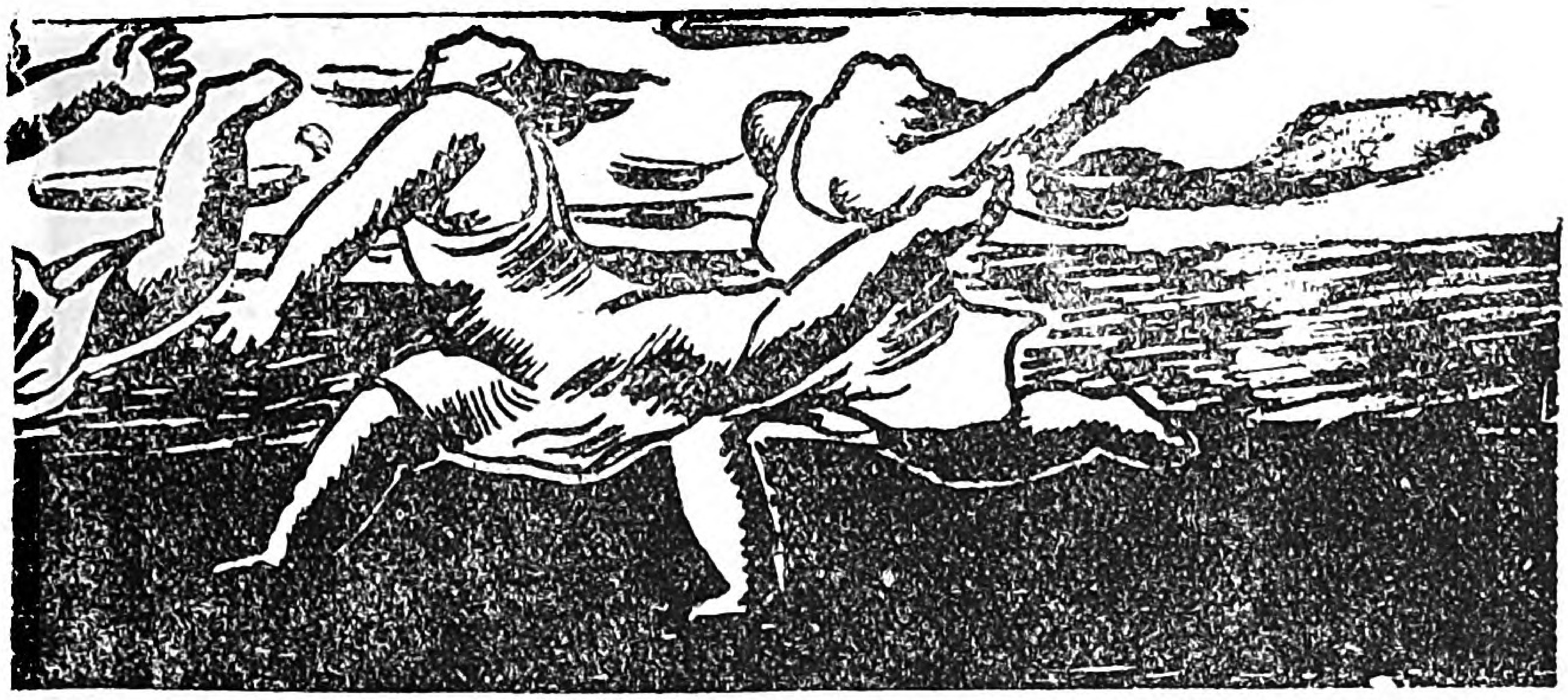
女人藝術

昭和三年九月一日發行（每月一回一日發行）
第一年第三號



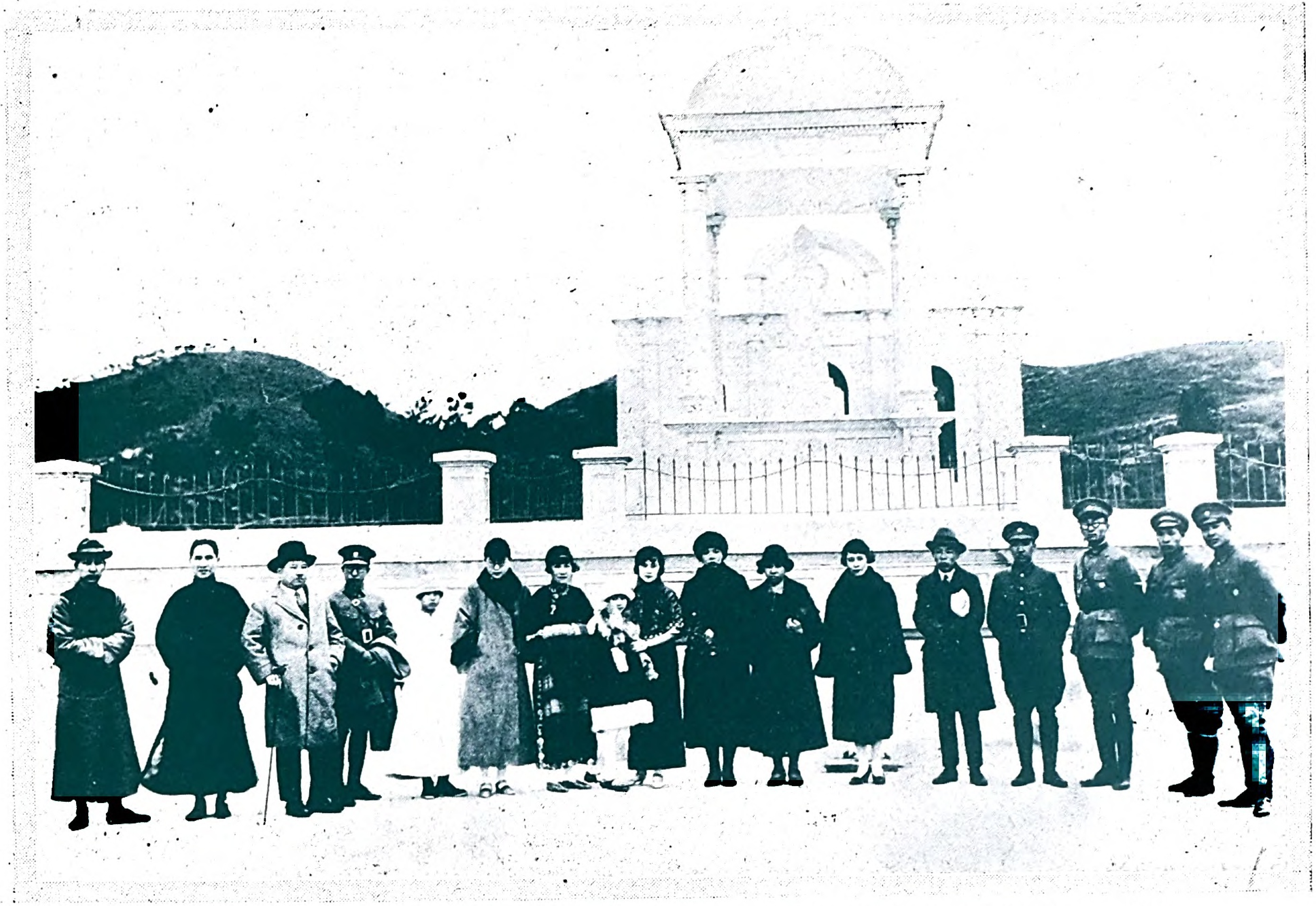
九月號



女人藝術九月號目次



實生活の一頁

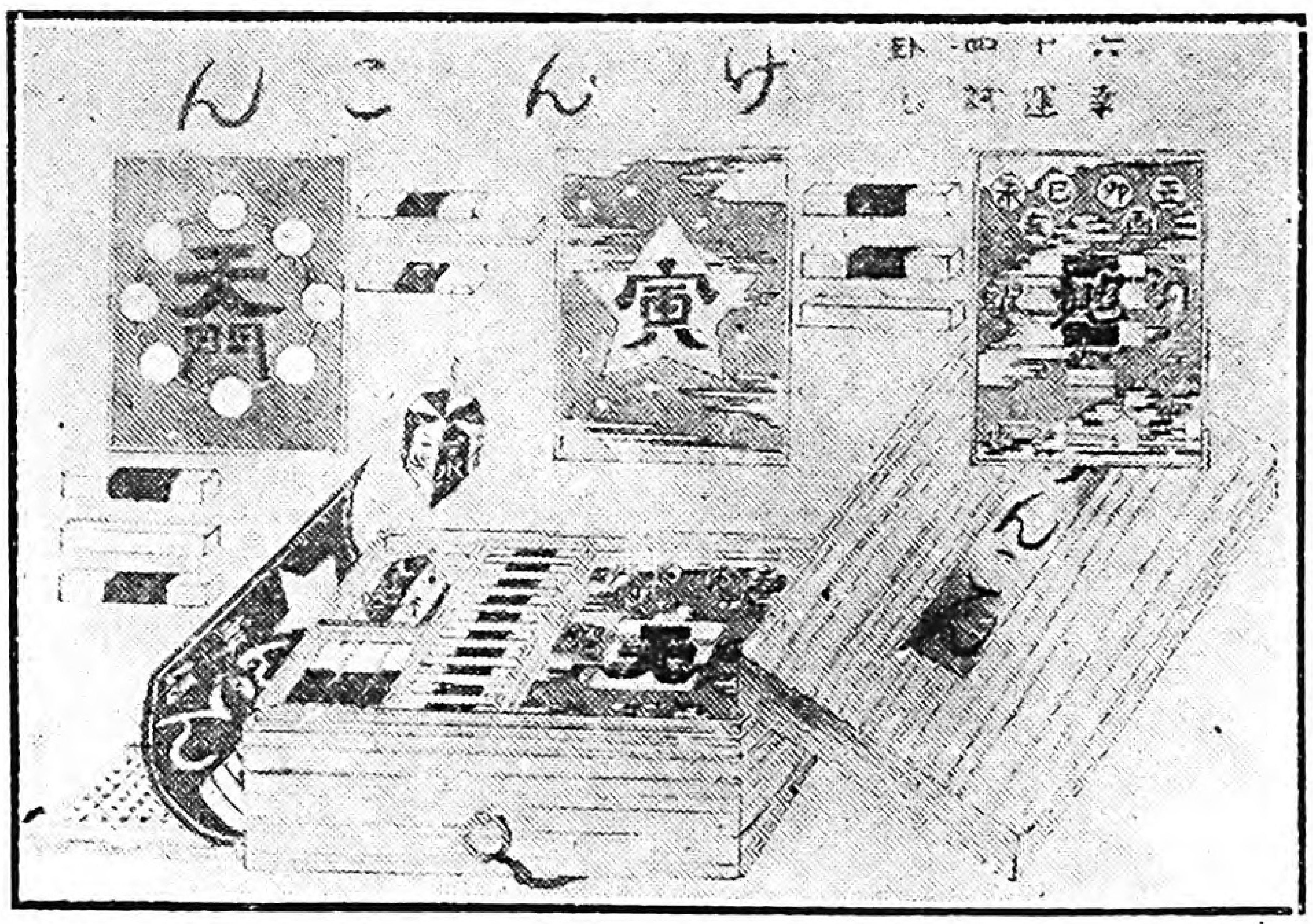


寫眞右より四人目、黄埔軍事政治學校政治部主任熊雄氏、五人目廣東日本總領事館書記松本增雄氏、六人目同夫人、七人目竹中繁子女史
八人目日華學會服部升子女史、九人目女優楊耐梅嬢、十人目ダンサー、紫羅蘭嬢 ————黄埔軍事政治學校校庭にて————

けんこん

幸運を摑む指針

劃時代室內遊戲



貴家の幸福のため
一個を供へられよ。

◇

團欒の遊戲とし
追隨するものなし。

◇

日々の指針
一生の至寶なり。

◇

カード三種	三十八枚
角製獨樂	一ケ
角製算木	六本
同小型算木	十五本
六十四卦判斷	一冊
上製桐函入	上函付

一組三圓也

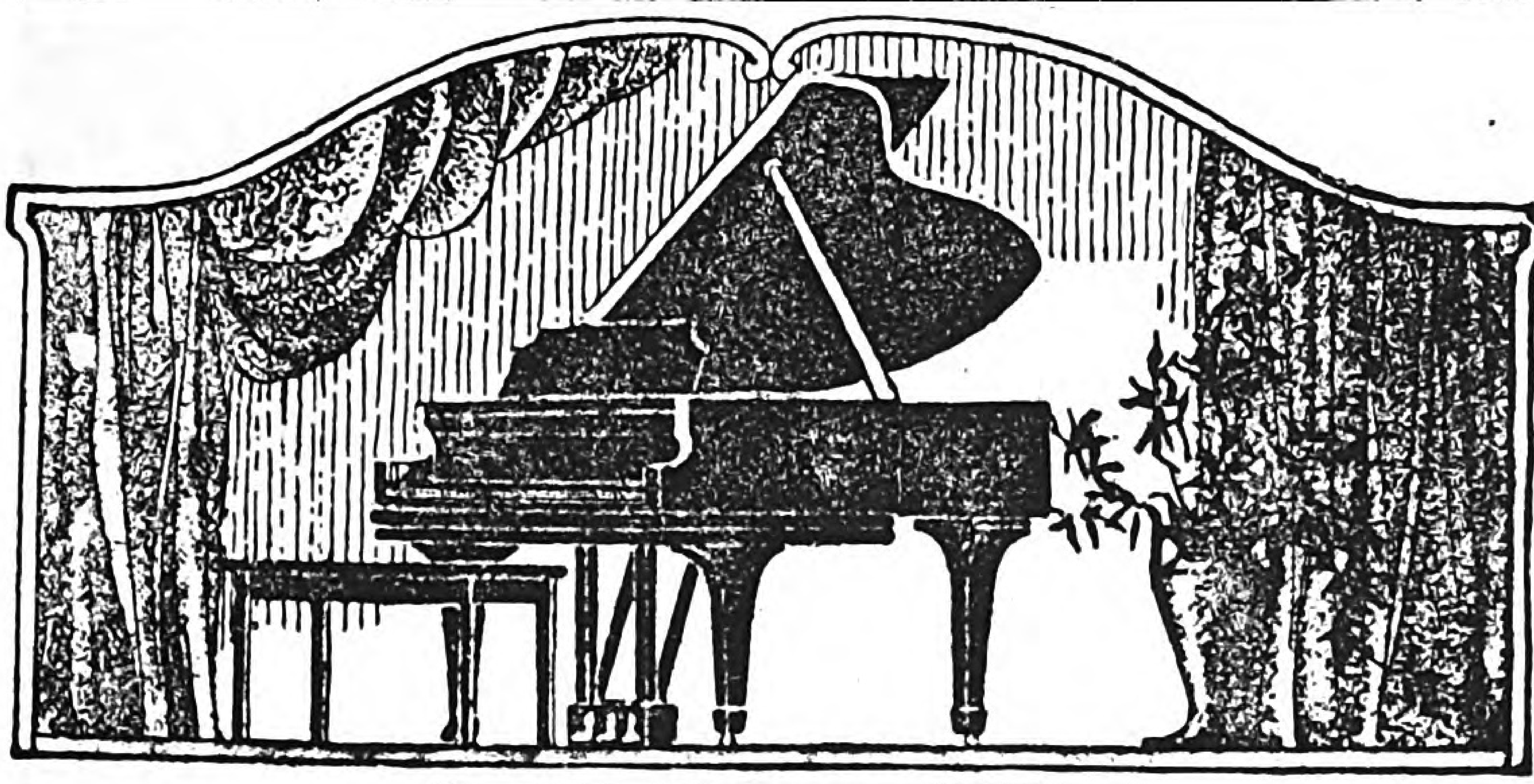
東京赤坂
表町二〇一

しようび苑

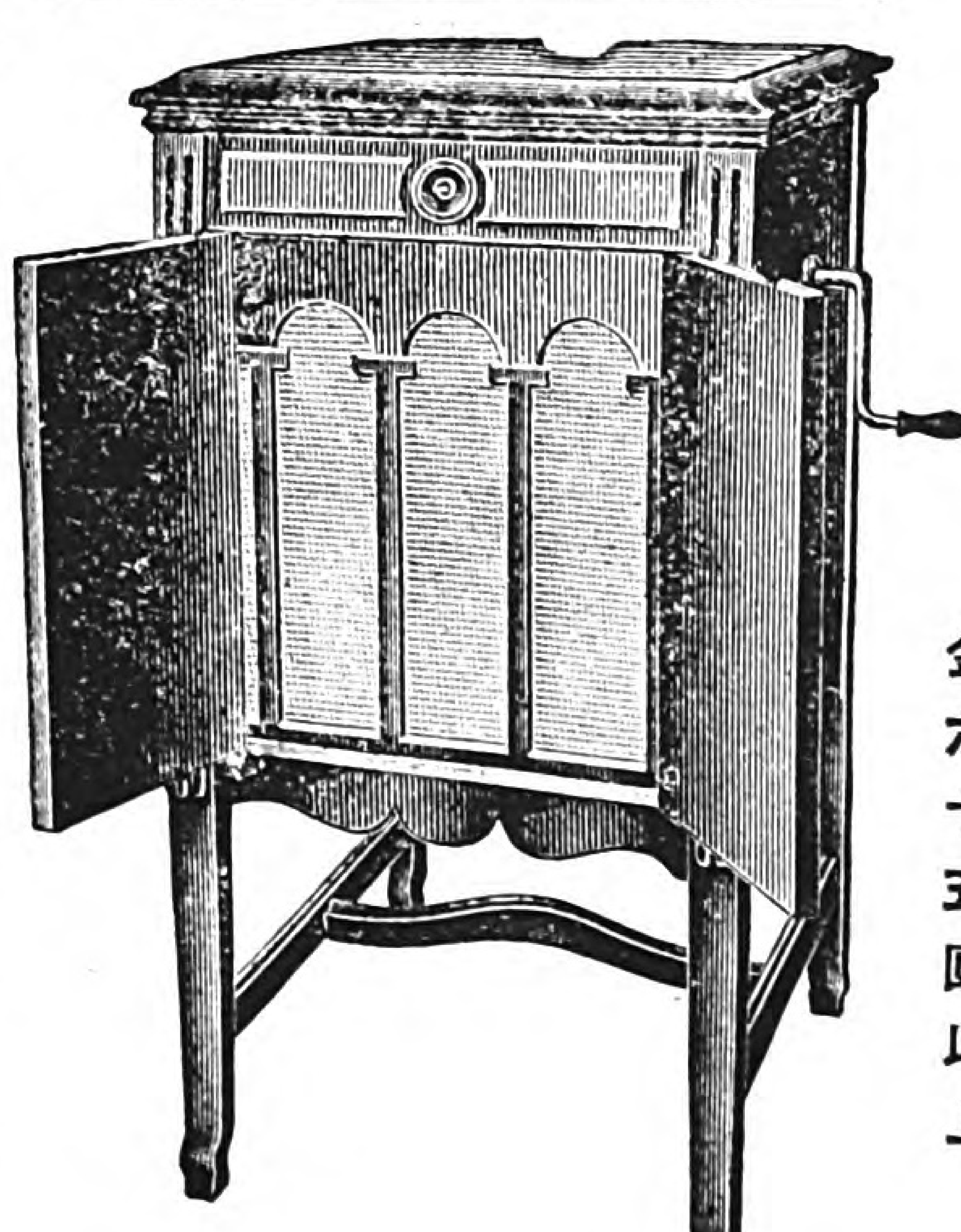
電話青山二九四一番
振替東京七五一六四

((有名カルタ玩具店ニアリ
御註文ハ前金ノコト))

◈ 御用命は弊店に御下命ください ◈



ピアノ
オルガン
樂器
樂譜



日本製蓄音機として
最も評判の良い
マーヴェル蓄音器
金六十五圓以上

外國製蓄音機として
最も評判良き
ビクター蓄音器
金貳百九拾五圓以上

◈ 大賣捌元 十字屋樂器店 東京銀座三丁目 電・京橋四五二八 ◈



苦勞のあとが見える、と此間十年ぶりで會つた人にいはれました。四年目に相對した或人は、

「少し痩せてね。」といひました。同じ人は往來で行き過ぎてもおそらくは判らずにしまふだらうともいひました。少し寂しいことだと私は思ひました。

尤も私は時ときの氣持で甚しく顔貌の變る質らしいのです。動く氣持を顔に表はすまいとすると、私の神經はぢき破産してしまひます。又いくら表はすまいとしても表はるべきものは表はれずにすむ筈もないでせう。

此寫眞は徹宵仕事をしたあと、手製の素服をまとうたところです。破産しがちな私の神經が他のどの寫眞よりもしるく出てゐるので、他のどの寫眞よりも常に私に近い感じです。乞はれてこれを自選した所以です。

さ さ き・ふ さ



かまきり

椎の木にふと見つけたるかまきりに
　子らと興ずる午後の秋の陽
小さき子にかまきりなどをまねてやりつ
　おろかしき母とわれもなりめる
（舊　作）

神　近　市　子

女人藝術

九月號



流行の奇異

多方面戀愛座談會

今井邦子　生田花世　長谷川時雨　長谷川春子　新妻伊都子
大井さち子　神近市子　さゝきふき　堺眞柄　北川千代
城しづか　平林たい子　望月百合子　素川絹子
（イロハ順）

――嫉妬の感情・感覺――貞操と戀愛――姦通戀愛
――戀愛の永久性――三角戀愛・多角戀愛――性慾と戀愛

生田　今日の會が成功するやうに、どうぞ出來るだけ忌憚なく、活字の上で讀む人でもほんとうにこの會の中に居て、聽いたやうな思ひがする程、女の人の心の底を一ッ話してこの會を成功の會にして頂きたいと思ひます。戀愛の永久性と云ふことに就て、その可否……といふと可笑しいかも知れませんけれども是非伺つてみたいと思ひます。エレン、ケイが言つて居りますのは、つまり永久性と云ふもの〻觀方を形式的に見ないで、精神的に永久性を觀て行くと云ふ風な解釋の仕方――人間の心は絶えず變るものだから、戀愛も變つて行くと云ふやうな事から云つて、固牢な意味で幾千年までの世界を願合ふと云ふやうなことを、形式的に英國あたりでしてゐることに對してかなり反對の意見を有つてゐるやうなんでございます。

神近　幾千萬年と云ふやうな……宗教的ですか。

生田　さう云ふ意味で、英國なんかで固牢にして居ることに對して、かなり反對意見を述べて……

神近　それは當然だらうと思ひます。幾千萬年も戀愛が續くと云ふやうなことは、一寸出來ない……（笑聲）

新妻　戀愛に二通りあると思ひます。戀愛と云ふものは永久的であるかも知れませぬが形式は變化して行くと云ふことが一ッ、もう一ッは個人の戀愛……と云ふのは一寸可笑しいが、一人の男なら男を戀する場合にそれが永久に續くかどうか――

佐々木　得られなかつた戀は永續するが、得られた戀はいろ〱の意味で變化して行くことは免れない。

新妻　贊成です。

今井　私個人としては兎に角、人の心を中心にして考へてみて、戀愛の最初には永久性を願ふでせうけれども、それは非常に得難

いことだと云ふことを、今の氣持で考へられます。

新妻　戀愛の永久性なんて、一體有るでせうか？私は迚も・・・・

今井　それはよく考へて出來難いと思ひますね。

大井　得られないから尊いんです。

城　私は出來ると思ひますわ。

新妻　大井さんは、永久性と云ふことは否定する、城さんはあると云ふ・・・・

大井　私は否定します。

城　あると思ひます。（笑聲）

新妻　城さんに伺ひますが、例へば一ツの戀愛が出來たとする、自分は永久性があると信じ、男を必ず愛すると云ふ自信もありますけれども、先方の男が自分から離れて行つた場合でも、自分はそれが續くと思ひませうかしらん・・・・？

城　離れて行けば行くほど續くものではないでせうか。それに皆さんは戀人同志がお互に倦きずに愛し合つて行くと云ふことが、出來ないと仰しやるけれども、ほんとうに愛し合つてゐる人ならば、どうしても倦きることはないと思ひます。（笑聲）

今井　それは面白い。それは一面さう言へますね。

時雨　そんなことを言つて、城さん大丈夫？

城　私自分の事を言つてゐるんぢやありませんのよ。「よきものは常に新し」。と云ふことがありますからね、どんなに古くなつても、其人から或る意味の新しさを見出して行くと云ふことが、必ず出來ると思ひます

新妻　新しさを見出せば、戀愛が續くと云ふのですか？

城　そこには倦きが來ないし、新い氣持ち・・

神近　一寸待つて下さい。戀愛から入つた結婚で、五年十年と一緒に暮して、ほんとうにあなたの仰しやる意味での結婚前の戀愛感情と云ふものが殘つてゐるものでせうか？私共は忙しいから、それをよく研究してみる閑が無いですが、（笑顏）非常に度の薄い、ほんの香りがする位のものかも知れませんよ。あなたの仰しやる戀愛と云ふのは・・・・新しい技巧を加へ、新しい何かを以て空虚を滿すだけの技巧とか、努力とかゞ拂はれゝば、是は別問題ですが、私みたいに家庭があり、子供があり、仕事があると云ふやうになると、さう云ふ戀愛の成行に就ては、非常に戀愛當初のやうな情熱を以て努力してはゐられない、さう云ふ場合に私は、非常に薄くなります、或時は無にもなります。

城　それは一ツの運動とか、お仕事を持つていらつしやる方は、その方にどうしても一生懸命になつてしまふから、そんなに技巧を凝らしたりするお閑はおありにならないでせうが、殊更に技巧をこらしたりなんかしなくたつて・・・・

神近　永續すると仰しやるんですね。それでは伺ひますが、永續させるほどの價値があるものでせうか。社會的價値はどうでせう

城　それはあると思ひます。

神近　それは生活にちつとも惱み苦しむ必要がなく、時間があつて、さうして非常に人世が樂しく美しいものであれば、非常に好いと思ふけれども、實用的ぢやありませんね。

新妻　戀愛其ものが私共から見れば、一私事に過ぎないから、社會的意義と云ふものは見出されません。

神近　いえ、それは違ひます。それは戀愛と云ふものが遊戲ならば、一私事に過ぎないが、家庭を作ると云ふことになる。結婚になり、子供が生れるとなると、それは決してプライベートだけのものではないと思ひ

ます。

佐佐木　其時は戀愛から出てやしませんか？

時雨　戀愛は靈光と同じで、一種の瞬間的のものだと思つてゐます。靈光と云ふものはそんなに永く、いつまでも有るものではありません。

生田　一寸面白い話があります。ある奥さん達が七八人集つて結婚して戀愛と云ふものが、どれ程あつたかと云ふことを、話合つた時に、一月あつたと云ふ、中には三月と云ひ、中には三年續いたと云つた人があつて、みんながドッと笑つたさうです。

神近　それならば私も一例を話しますが、私が子供の時に、それは非常に美しいものだな…と云ふことを考へてみたんです。あの尉と姥と云ふのがありますね、それを思ひ出させるやうな、立派な白髪の…年頃も五ッか六ッより違はない夫婦があつたのです。お若い時は、戀愛が燃燒したかどうか知りませんが、若い時は比較的生活の苦勞はなくして、さうして二人か三人の子供を育て丶、慎みを忘れないでゐらつしやつたらしいんです。年とつてからも、別に戀愛と云ふ風な名前では云はれないでせうけれども、夫婦の間の情愛の濃やかさと云ふことは、村中の評判になるほど綺麗なものであつたんです。それを理想として…いつでもそれを人間の理想として考へますわ。唯實用的になつた時にどうか、非常に疑はしくなる。それは不可能だらうと云ふことを考へるですが…

新妻　それは、今のお話は夫婦愛であつて、戀愛ぢやないぢやないですか。

神近　それはさうです、併し戀愛に似たやうなものが出るぢやありませんか。非常にそれは美しいものです。思遣り…人間的同情と云ふよりほかに、夫婦であるから、異性同志であるから、ですから年とつてさう云ふ風な、戀愛と云ふやうなものが、形を變へて生れ出るのぢやないかと、私には思はれるんです。

新妻　それは戀愛と謂へるでせうか——

生田　エレン、ケイの「戀愛の道德」では戀愛と云つて居るやうです。つまり斯う、宜い結婚生活と云ふものは、大抵戀愛と云ふものを培つて、向上さして行くと云ふやうなのが眞實の戀愛で、精神的にいつまでも斯う汲出され、かい出されて、淸められ磨められて行かなければならぬと云ふやうな考でございます。

神近　さう云ふ意味です。ですけれども、どうして「戀愛と道德」が、私達の問題となることが、出來ないかと云ふと、それは出來ないと云ふでせう？　城さんの場合を批判しましたやうに…それには金と、時間と勢力がなくちやならぬと云ふ風に…。

城　だつて人間は多少性慾と云ふものは持つてゐるんでせう？　それがある限り、戀愛は伴つて行くものではないでせうか…？

神近　私もさう思ひます。さう思ひますけれども、在來の戀愛と云ふ風のものは、分子は精神的のものが多分であつて、肉體的のものが少い…と云ふ風に考へられてゐませんか？　それなら是が兩立して行くのが私は當り前と思ひます。それがともすると或る場合には離れがちになるかも知れませんそれは自分達の生活から批判するのですけれども。

佐々木　城さんみたいに云ふと、城さんには失禮ですが、戀愛が精神的と、性慾的なそれが同時に滿され得る、狀態にある人は宜いですけれども、戀愛はあつて、性慾の滿されない狀態にある男女が、隨分多いでせう。さう云ふ場合には…さうね兩方同じ割合の力を持つてゐなかない？　餘儀ない

かも知れないけれども、さう云ふ場合が隨分多いと思ひます。戀愛には――

神近　戀愛があつても滿されない……？

佐々木。滿されないぢやない。滿され得る場合は五と五の割合になるかも知れないが、滿されない場合には九と一になつたり、七と三になつたりする場合がありはしないかと思ふんです。

神近　それはさう、私も思ふ。戀愛の分子が高まつて行く

佐々木　藝術的のものが生れると云ふことはやつぱり實利的と言へるのですか？　あなた方の御意見で……

神近　それはプロレタリヤ文藝談の問題になつたことであつて、十分解決されてゐないと考へます。それで私は、實利であると云ふことも斷定は出來ないし、非實利であると云ふことも、茲に私は暫くのあいだに言ふのは控へようと思ひます。

佐々木　私は藝術を主として居る場合は、實利と云ふことは考へたくないと云ふ氣持ですけれども……戀愛が素になつて、非常に藝術的に好いものが生れる場合が、隨分ありはしないでせうか。

神近　それは精神活動であると云ふ點で、一致するではないですか。

佐々木　さうすると、さつき仰しやつたやうに、戀愛は必しも家庭になり、子供を生まないでも、別に空莫としたものでない。何か社會的にも意義のあるものになりはしないかと思ひます。如何です。

神近　それはあるでせうと思ひます。さう云ふ場合、思想を淨化するとか、情操を……私達のセンチメントを淨化すると云ふやうな、作用をすると思ひます。それは非實用の、やはり實用です。

佐々木　さつき新妻さんの御意見だと、戀愛はそれ自體が、實利的なものぢやないと云ふやうなことを、一寸耳にしたから……

新妻　私はさう云ふやうな氣持があります。實利的なものではないと思ひます。戀愛は形が現はれて來た時には……

神近　それはさうでせう。全體としての、人世に働きかける價値を考へれば、非實用的な實用ではないかと……直接ではないけれども間接には――。

佐々木　結局……

神近　總てのものが人世に働きかけないものはない。又働きかけないものは、無意義な存在ぢやないですか。

新妻　戀愛をする場合に、實利的など考へてゐられないでせう。

今井　ゐられませんね。

神近　私、あまり澤山發言するから……私達少し止めませうよ。

時雨　私は天地が一際戀愛と云ふ氣持がする。總てのものに戀愛があると思ふ。男女の間ばかりではないと思ひます。さう云ふと可笑しいかも知れませんが……

神近　それは佛敎の方にはさう云ふ意味の事が、感じられると思ひます。

時雨　何となくさう考へる。男女の戀愛と云ふものは一ッの形ではつきりと出たものだらうと思ひます。生きてゐるものには何にでも戀愛がある。さうすると、何て言つたら宜いか……男女の戀愛と云ふものが、非常なパッション――その時の何か一番ねん燃した刹那がはなで、さう持續するものぢやない。

新妻　長谷川さんの仰しやる場合に……總てのものに戀愛がある場合に、一方が人間なら、人間の意志があればそれは破壞されることはありませんから、永續出來ると思ふですが、意志のある者が二つ寄合つた時、永續すると云ふことは、かなりお互に努力し

なければならぬ。併し努力して來たものには、かなり醜い跡が殘りはしないかと思ひます。

今井　さう云ふ風に求めて來ると・・・

神近　みな刹那々々ですね。

佐々木　いろくなものに戀愛があるとなると、さう云ふものだつて、その時々の對象に依つて變つて行くものでせう。豈人間のみならんや。

時雨　變つていくのが當り前でせう。

生田　戀愛と云ふものは、五と五、十と十と云ふ風にうまく行くと宜いが、環境や、職業、精神狀態、いろいろなもので、右に寄つたり左に寄つたりなかくむづかしいのでせう。そこにいろくな問題が出て來るのであらうと思ひます。

長谷川(春)戀愛が永遠だつたら、丁度天國に上げられた仙人みたいで、退屈でくたまらないと思ひます。

神近　永續したら價値のないものです。

長谷川(春)我々は天國が御免だとおなじに、戀愛の絶頂が永續すると云ふことは、御免だと思ふ。さう云ふと同時に、戀愛の永遠などゝ云ふことを、ちよいく考へるけれども。

生田　永久性が望ましいが、現實として望み難いから、問題が起るとすると、其問題によつてどうしても、三角關係に入つて行くだらうと思ひますね。

新妻　それぢや城さんの、永遠に、求められると云ふのはそれとして、刹那的であると云ふことに證明された譯でありますね。ぢや其次に移りませう。

生田　其次に移ると、是とは逆に、うまく行かなかつた狀態の時をお話して貰ひたいと思ひます。

堺　夫婦愛と、戀愛とは違ふと云ふお話がありましたけど、どう云ふ風に違ふのですか(笑聲)戀人同志が結婚生活に入つて、お互に愛して居る時のが夫婦愛と云ふんでせうか。戀愛とどう云ふ風に違ひますか？

今井　さつきからのお話を、默つて伺つてゐると、戀愛と云ふものゝ定義が非常にむづかしくなつて來る。私がこんな事を云つちや妙ですが、今の定義で下す所の戀愛と云ふものは、かなり曖昧になつて來るやうな氣がするんです。やはり夫婦愛に入つて、形が變つた・・・まア最初の逢ひたい、見たい(笑聲)と云ふ、さう云ふやうな感情と違ふ、何となく斯う引合ふ氣特ち・・・さう云ふ氣持も戀愛と云ふんでせう。夫婦關係に入ると、地味になりますが、魂と魂が深く觸れ合つて、切つても切れないやうな氣持に入るのも、戀愛の中に入れても宜かないかと思ひます。

神近　それは違つてます。夫婦愛と、戀愛とは區別してあります。

城　どうして區別するんですの？

神近　それを説明するのに「窓」と云ふ雜誌がある、その中に詩が書いてあります。それは斯う云ふ詩です。子供を生んで、その子供に乳房を與へる。その乳房に子供が吸付く瞬間を享樂する氣持を歌つたものゝやうでした。どうも今、はつきりとその詩を憶えないのですが、兎に角異性に與へる時の乳房と、子供に與へる時の乳房の感覺を、二ツに區別して、前のは、子供に與へる以前のものは、何と云ふ意味でせうか、斯う汚らはしい意味ではなかつたが――それに比べると子供に乳房を與へる時の感じが、何と偉大なものであるか――と云ふ意味の事が書いてあります。「窓」の詩人誰ですか名前を忘れましたが、八月か六月かどちらかへ出てゐました。母が子供に與へた時と戀人に與へた時との感じを、大變面白く感

じたのです。

新妻　それが戀愛に關係がありますでせうか

神近　ありはしませんか。明かではないけれども・・・

新妻　私は、一寸書いた方は忘れましたけれども、私の讀みました物の中には、子供に乳房を與へるときの感じも、性慾の一ッだと云ふことを云つて居ります。

神近　それはさうでせう。でもその詩人は、それを比較してゐたんです。

佐々木　そとから見ると、あべこべですね。母は餘りに鐵面皮で、乳房を出して寧ろ・・

神近　私も鐵面皮の仲間ですか・・・

今井　鐵面皮とはどう云ふことでせう。

佐々木　つまり異性に乳房を與へる場合は、例へば羞らひがあります。母が子供に與へる場合は、實に羞らひがないやうに思ふ。そとから見ると・・・

神近　羞らひと云ふものを、非常に高く評價すれば別ですけれども、さう云ふ場合の羞らひは、正しい評價ではありません。非常に高價の物であれば、それは大變好いと思ひますけれども。私共は或る場合に、今日の世の中では、羞らひが非常に過剰と云ふことを感ずるのです。

佐々木　それはさうかも知れません。

神近　例へば、私自身がさうですが、人前に立つて、正しい事を言はなければならぬ時に、氣まりが悪かつたり、胸がドキ〱したりする・・・さう云ふことは非常に過剰な羞らひだと思ふんです。戀愛の時の羞らひは非常に高尚であり、好ましい事に違ひありませんが。

佐々木　斯う云ふと私が母でないと云ふことを、斷らなければならぬが、母でない者がそれを見ると、子供に乳房を含ませて、異性の愛撫を聯想します。

神近　子供に乳房を含ませる場合に、異性的のことを感じますか――？それはお子さんがおありにならないから、分らないでせうがそれは全く無いです。

今井　私も鐵面皮には絶對反對ですよ（笑聲）

時雨　子供が乳を飲むのは、母が感覺的の喜びだつて・・・・

神近　それは異性的なものと違ひます。

長谷川（春）併し歌麿の繪なんぞ見ますと母の乳房を・・・・

北川　その詩を作つた方が、ほんとうの感情を正直に言つてるか、どうか――

神近　歌麿は、藝術的實感としては、非常に眞實（ほんとう）と思ふけれども、婦人を外（そと）から觀た時は、さう見えるかも知れないけれど、婦人の内面に立入つて、實感を經驗したとは言へないでせう。

長谷川（春）それは無論です。

神近　私共が非常に憤慨するのは、鐵面皮の方なんです。

佐々木　誤解のない爲に、もう一度言ひますが、神近さん、今井さん、鐵面皮の事を大變仰しやるけれども、或種の母親は、あからさまに、殊に男の子である場合に、異性として取扱つてゐますよ。

新妻　それはさうかも知れません。

神近　私は男の子も、女の子も生んでゐますが、男の子を非常に嫌やがる・・・・と云ふ譯でないけれど、どつちかと云ふと女の子の方が可愛い。それは意識的にさうではないが、男の子の方には、腸を悪くしたり何かした爲もありますが、ほんの一ヶ月か、一ヶ月半しか乳を飲ませなかつた。事情もあるけれど、憎らしいことは決してないが、よく世間の人から、男の子の方が可愛くないと云ふと笑はれるんですが、どつちかと云へは、男の子を嫌やだと思ふ――

時雨　大變お話は違ひますが、御夫婦でお互

に愛情を有つてゐた時の子供の方が可愛いか、そんなでない時の方が可愛いでせうか。

神近　分りません。

今井　さうはつきりしませんね。（笑聲）

神近　エレン、ケイの物にもさう云ふ事が書いてありますが、非常に仲の好い時に出來た子の方が可愛いか、反感を持つて、憎らしいと思つてゐる時に出來た子の方が可愛いか——と云ふこと。

新妻　それは夫が自分から離れた場合には、一層子供が可愛くなるでせう。その時、何となく自分が惨めな境遇に置かれた時には子供を抱き締めたいと云ふ氣持はあるかも知れませんが、それに依つて愛情が多いとか少いとか云ふことは無いと思ひます。

時雨　それからもう一ツ伺ひたいのは、御連合ひに似てゐる氣質の子供が可愛いか自分の氣質に似てゐる子の方が可愛いか、どつちが可愛いですか？

神近　私？　反對の問題になつて居るですが、さうですね、自分の缺點が出た時には、其子供が憎らしくなる。反對に自分の好い所が出た時には、非常に可愛い。私の長女は私に似て居ます。その子供がいやにチョコ〳〵する時、非常に嫌やです。自分が神經質ですから、それが子供に似て……けれども、人に親切であつたり、非常に思遣りがあつたりすると……さう云ふと私が、人に親切で思遣りがあると云ふやうですが（笑聲）さう云ふ好い性質が現はれた時に、非常に可愛いです。

時雨　それは御共通でせうが、御夫婦のどつちかに似て居る場合は、どつちが好きでせう？

今井　同時に夫の缺點を持つてゐる子供がありますと、實に仇のやうな氣がする。

神近　私が男の子をいやだと云ふのが、それですよ。

今井　それは賛成します。

時雨　自分の缺點が出たら？

今井　更にいやです。自分の良い所……寧ろ自分になかつた氣持なんか、ヒヨツと出た時には、實に嬉しいやうな可愛いやうな氣持がしますけれどね。

生田　子供の話から戀愛に方向轉換を願ひます。

今井　私は、さつきの乳房の問題を少し言ひたいのです、私が考へるのに、それはお醫者さまの方から謂つた、いろ〳〵な方面からすると、性慾的と云ふことになるかも知れませんけれども、少くとも母は子供を養ふやうに出來て居る。ですからその自然な感じが現はれるので、細かく論じて行けば性慾的なものが無いとは云へませんが、子供に乳房を與へる時は、自然的な感じであつて、まア私は性慾はないですねエ（笑聲）

神近　子供がお有りでない方には、斯う云ふことはお分りにならないでせうが、子供を生みまして、哺乳期には女は性慾は絶對にありませんよ。

今井　更に、實に夫が邪魔になります。（笑聲）ほんとうに邪魔になりますよ。

大井　偉大なる母を認めた譯ですね。

佐々木　哺乳期を出ればどうですか

今井　子供が育つて來れば、又いろ〳〵の……

生田　子供の話をもう打切てはどうですか。

新妻　もう少し子供の話があります。乳房の問題で一口……

神近　戀愛の問題を多方面から觀ての會だから宜いでせう。

生田　えゝ、さうですね。

新妻　性慾の問題が有るか無いかと云ふことは知らないですが、以前平塚さんがお書きになつたものに、婦人運動なんかをする爲に、子供に乳を飲ませてゐては、迚も駄目

・だからと、牛乳と兩方にした所が、子供が牛乳の方に行つて、どうしても乳につかなくなつた。さうしましたら親の方では、母乳をやらない子供は、余り可愛くない——と云ふやうな事が書かれてありましたが、そこに何かありはしないかと思ひます。

今井 それは生理的に云つてみれば、あるでせうね。

生田 この問題はこれ位にして、其次に移ります。

北川 話を進行して……

堺 乳房の話はもう止めろ（笑聲）

神近 新しい話題に移ると云ふのは、何を云つたんですか？（銘々發言多し）

新妻 一寸、整理して行きませう……

生田 話が統一しませんから、一寸皆さん……つまり戀愛の永久性があると云ふ人と、そんなものはないと云ふ人とある。で、永久性があると云ふ方は兎に角として、無いと云ふ方の……うまく行かないと云ふやうな場合の方へ話を進めたいと思ひます。

新妻 次の問題に移るとしまして、戀愛に破綻を來した場合、そこにはいろ〳〵な事がありませう。夫婦生活に入つてしまつて、乾燥無味の……

北川 乾燥無味と云ひ切れるでせうか？ そこには、さつき神近さんが仰しやつたやうに、尉とか姥とか云ふやうな。

新妻 それは離れてゐれば戀愛に歸りますが……

神近 精神的な分子が多くなると云ふ意味……（笑聲）城さんの仰しやるのでも、永續性があると云ふのは、さう云ふ意味からなんでせう。

城 私は、戀人同志とか、夫と妻とが、樂しみばかりして、始終戀し合つてると云ふ譯ぢやないので、永い間にはいろ〳〵な誘惑も入つたり、三角關係も起つたりすることもないことはないでせう。だけれども、さう云ふものはほんの瞬間で、すぐに元に還つて來ると思ひますわ、ですからさう云ふ風にして永續性があると思ひます。

佐々木 强いて元に還つても……

城 强いて戻さなくても、還つて行くものだと思ひます、眞實の戀愛ならば……

神近 その意味ならばありませう。

堺 戀愛と云ふものは、一等初めの形通りに行くものではないでせう。戀愛と云ふものゝ形を變へて行けば、永續性はあると思ひます。

北川 城さんだつて、何も十七八からお婆さんになるまで、戀愛が續けられると云ふのではないと思ひます。年を取つて來ると……夫婦でも永く經てば、お互に相手の氣持が、口には云はなくとも、自然分つて來るから、それでそこの所がうまく出來て行くのぢやないかしら？ よくお爺さんお婆さんになつてから、片つ方が死ぬと、ドカッと弱ることがありますね、あゝ云ふことはよく分ると思ひます。その片つ方の人がゐないと、自分が半分になつたやうな氣持になる……

今井 斯う云ふことがありはしないでせうか自分の理想の人が無くて、大勢寄せて……三つも四つも寄せて、その中から自分の求めるものを得やうとする。あの人から、この人からと云ふやうに、みんな寄せて、その中から自分の求めるものを得ようとする……

新妻 男の方なんか、殊にさうです。

今井 自分の戀人と云ふものは、斯う云ふ人でありたいと云ふ、氣持は持つと思ひますね。

時雨 人間は、重ね寫眞にはなりませんからね。

新妻 細君に滿されないものを他に求めると

云ふこと‥‥經濟的にも豐であるし、社會的にも差支ない地位にある男は求められるが、女はさう云ふ場合に、多く習慣とか何とか束縛されたものがある爲に、仕方がないからしないだけに過ないので、さう云ふことは隨分あると思ひます。

今井　今の男の人は、精神的の戀愛でなくて肉體的のものだと思ひます。ですから、さう云ふのには、權威を認めませんね。

新妻　併しかなりさう云ふことがありはしませんか。淋しい細君の場合には、明るいものを求めたい‥‥

今井　それは絶對にありますね。

生田　男と女との間には、そこに何等か喰違つてゐる點が、どうしてもあることゝ思ひます。それが非常に目立ちます。

時雨　靈とか肉とか云ふのは、どつちが先へ出て、どつちが後に行く‥‥と云ふことは云へないでせうが、男の人の求めるのは、兩方一致してゐなくちやいけないのではないのですか。

新妻　愛すると云ふ場合には、その人の良い點だけに引かれるのであつて、其人の全部を愛するのではないと思ひます。勝れた一點に引つけられる――あの菊池さんの「戀愛病患者」の中に、戀愛は熱病に冒されてゐるのと同じだから、それがさめて來るといろ〳〵な缺點が現はれて來る――と云ふことが書いてありますが、その人の全部が好きと云ふことは、殆どないと思ひます。だからその頂點が過ぎると缺點が見えて來る‥‥

時雨　それが分つてしまへば、價値のないものが隨分多いでせうから、戀愛もさぐりあひのうち多少の不安の伴ふうちが樂しいのでせう。そしてどうしても持續するものではない。やはりいろ〳〵のものに、向上性があると同じく、戀愛者にも向上性があると思ひます。

生田　兎に角男女間と云ふものは、三四年目位經つと、共同生活の名で入つても、結婚生活の名で入つても、何れにしても、隨分動搖して來るだらうと思ひます。三年目位に危險期が來る――その時にいろんな風に男の人がぐれる事もあるし、女の方がぐれるやうなことがある。さうしてそこで離れきつてしまふ場合もあるだらうし、又もう一度縒を戻す場合もありませう。その人その事情次第で‥‥。

時雨　さうなると顏でも、氣持でも、隨分より以上惡く見えて來るでせうね。缺點が見え過ぎて、却つて冷靜になりはしないでせうか、いつまでも假面を被つてゐられないから‥‥

新妻　初めには良い所ばかり見せやうとしてもね‥‥

生田　倦きる點ぢや、男の方が倦きると云ふ方が多いですね。

神近　女の方だつて倦きますよ。併しほかの經濟的に獨立出來ないと云ふやうな事情や何かあるだけに、強くそれを表現しないと云ふだけで‥‥

長谷川(春)神近さんや、うちの姉など、中年以後の人は、我々の理想の事ばかり仰しやらないで、もう少し批判を交へて、さうして自分より價値なき者を愛するのは、愚であるとか、同時に非常に苦しいとか云ふ、もう少し沈痛なお話を聽かして欲しい。今日はさう云ふお話を聽きたいと思つて‥‥あなた方、我々と一緒に甘い、センチメンタリズムの入つたのばかり仰しやらないで、もう少し沈痛なやつを聽かして頂きたい。母性として、さう云ふのは我々は今まで聞いても、朧ろ氣に、頭に描く程度のことを、はつきり云つて下さるに過ぎない。もう少

し沈痛なものを聽かして頂きたいのです。

今井　私もさう云ふ事を聽きたかつた。眞實の戀愛——どうしても思ひ切れない戀愛——さう云ふ戀愛が聽きたくて來たのですが——

長谷川（春）もつと眞劍な、爛熟した所を……あまり甘すぎます。

時雨　まだ問題がそこまで來てゐないのでせう。

新妻　私、若い時分の戀は、新譜離れるにしても、割合にあとがまを見つけるのも樂だから（笑聲）割に悲痛でないと思ふ。さうして又若い時分は、年をとつた人に縋らう縋らうと云ふ氣持の戀愛があるでせう。それが我々近くの年齢になると、昔から云ふ、中年の戀と云ふのがございます。非常に眞劍味になるのではないかと思ひます。眞劍と云ふのは、自分が凋落して行く所に、まだもつと引止めて置きたいと云ふことを、何か最後の憧憬があるのぢやないかと思ふ。ですからその場合には、多く同年の人達に同じ對等な戀愛を求めると云ふよりも、寧ろ自分より下の、愛撫するやうな氣持のものを得て行くのぢやないかと思はれます。それは、女ぢやありませんが、あの昔のお半長右衛門——あの長右衛門なんかでも、さうした心理からお半を戀したのではないかと云ふ氣持がします。今のかなり、著名な方にしても、四十以上になつて、子供も相當大きくなつて、生活の上にも割合に枷と云ふものがなくなつて來ると、何となく自分が不利な立場に來たやうな氣がして、そこに何か求めたい——と云ふ所で、多くその相手になる人が、ずつと自分より年下の若い人ではないのでせうか。

長谷川（春）若い男から愛撫されやうと云ふことから、相當苦しみもありませう。さう云ふことを大家連から伺ひたいので……（笑聲）

神近　私は戀愛の大家ではございません。私共は非常にゼネレーション……非常にさう云ふものに就ては觀念的な所が多い。今日は若い方の戀愛論を聽きに、此處に出て來たので、私なんかキリスト教の教育を受けて來てゐるせいもありませうけれども、非常に私が、戀愛の前科者のやうに見えるかも知れませんが、其實、性質としても、享樂的な方面なんか、少しも分りません。

長谷川（春）でも、戀愛の行跡を殘してゐられるから、もう少し科學的に説明して頂きたい。後輩の爲に……。

神近　笑談でせう——

今井　大井さん、望月さん、如何？若い方々の近代の戀愛……

神近　佐佐木さん、若い人達の新しい……。

佐々木　どう云ふ意味の新しい、ゼネレーションの戀愛？　私、新しくない、世紀末的ですよ。

神近　さう言つてしまへば……少くとも社會的に認めてゐる立場から、さう見えます。

佐々木　服裝だけでせう——。

新妻　世紀末的な所は、確に私達も持つてゐます。禁慾生活と云ふやうに育てられてゐましたから。總てさう云ふこと、戀愛の話をするだけでも、何となく控へるやうな氣持が、その反動で……

神近　さつきから、何も言はない人は、少しも話さないから、私はもうよく言つたから發言權を棄權します。

新妻　宗教に毒されて、我々人生の中にどれ程の損があるでせう。けれどもそれを打破しよう〳〵とかゝつてゐるだけに、いろいろ觸れて行きたい氣分はあるのです。宗教は人を愚にします。

佐々木　私に言はせれば、神近さんが發言權

を抛棄すると云ふ所が、古いと思ひます。あなたの言ふ所ですよ。

神近　結構です。その意味で古いのは‥‥自己批評をした所です。

新妻　若い方達に話して貰ふ爲に、三角戀愛でも宜い、皆さんの多角戀愛でも‥‥

時雨　嫉妬の感情感覺と云ふ方をねがひます‥‥。

長谷川(春)隨分苦しいものらしいですね。どうです?‥‥

佐々木　私は凡そ嫉妬しない方ですから‥‥

新妻　一々嫉妬して居た日には死んでしまひますよ。さう云ふ意味で――諦めですか、意識的になさらないのですか。

時雨　するに足らない――と云ふと非常に高慢ちきになるが、自分を優れりと信じたらそんなに嫉妬は‥‥

佐々木　私、今のところ種が無いから‥‥。

長谷川(春)さう言つて居られる間は甚だ御目出度いけれども‥‥

時雨　家庭を持つとか仕事を持つとか、色々複雜すると、家の體面とか、社會的の立場とか、其等に對する防禦線――と云つては可笑しいが、一つの物の毀れを厭ふ爲に、其れを防ぐ防禦的の位地に立つのも嫉妬と見られることもあるでせう。自分を優れりと信じたら、騷ぐのは詰らない。だらうと思ひますね。

佐々木　詰りプライドを持つて、其人は其人として獨立して居ると云ふことは、嫉妬を起させないものでせう。

時雨　相手が職業的誘惑――爲にする誘惑を以てかゝつて來て居る、さうして其れに引つかゝらうとするのを見て、救ひからする嫉妬――それは嫉妬と謂へるか何うか分りませぬが、自分の職責として其れを防がうとすることもあるだらうと思ふ。

長谷川(春)さう云ふのでなく、純粹に、自分の好きな人があつて、本能的に來る嫉妬は、隨分沈痛なものだと思ふのです。

新妻　愛が强ければ强い程ありますね。それは。

佐々木　結局所有慾が强ければ强いだけ‥‥

生田　詰り所有慾の問題ですね。

佐々木　離れて行かれたら自分自身突つ離れて、獨立し、

生田　嫉妬がある爲に物が繫がつて行くと云ふ狀態もありますね。

時雨　陶醉する人としない人とあります。

生田　嫉妬の對照となる場合とならぬ場合とある、嫉妬と云ふよりも違つた意味で、肉躰的に來るものがあります。

今井　どう云ふ風に?

生田　嫉妬の域まで行かぬ中に、肉躰的不快と、苦痛と、色々のものがあります。感情と云ふやうなものが、自分の軀の中を步きまはる生物みたい‥‥。嫉妬の感情なんと云ふものはさう云ふ肉體的氣持の後で意識する。

長谷川(春)其の點で、私あの貴女の書かれたのに打たれました。

生田　けれども何うしても今の樣な社會狀態で、若い人は、一方に妻君が有らうが無からうが、兎に角觸れる所まで觸れて、自分を生かしてみようと云ふ氣持は、隨分强いだらうと思ふ。

新妻　話は三角戀愛に入つたですが、例へば玆に妻の有る男を愛する場合に、何う云ふ風に考へるでせう、詰り妻なる人を退けて家庭に這入らうとするか、或は又自分は其の家庭を破壞せず、唯戀人として一生男の人と戀愛を續けて行くかと云ふこと、‥‥若い方等の御意見を聽きたいと思ひます。

生田　二通りあるやうですね。妻を排してまで這入りたいのとさうでないのと。

新妻　ですから若い人の意見を聴きたい、家庭を破壊して迄も這入りたいか、或は唯戀愛を續けて行くか。……

大井　其の奥さんが餘りやきもちなど燒いて酷に夫を取扱ふやうな場合、奥さんが悧好に振舞はず、騷いで、其の女の人に對して惡い感情を持つて居る場合は、やけにでも取つてやりたくなりますね。奥さんがやさしい人だと、そんな考は起りませんね。私は起りませんね、少くとも。

新妻　其の場合には感情でせう、奥さんが妬いたから這入つてやりたいと云ふのは。一つの感情で這入つてやらうと云ふのでなしに、心から何處までも家庭生活の煩雜な中に這入りたいと云ふことを御考へになるでせうか。

大井　私ですか、私一個ですか。

新妻　えゝ。お若い方の御意見として。

大井　私は面倒臭くて嫌やですね。（笑聲）

佐々木　私、若くないけれども、年取つた者の意見として、戀愛が遊戲――小手先の遊戲の場合は這入り込みたいことはない、眞劍な場合で、奥さんを突き除けようと云ふ心はなくても、社會的壓迫が非常に加はつて來ると何うにも仕樣がなくなつて、何うかしなくちや仕方がない、さうすると何かの形で欲しくなつて來る。自然の要求だと思ふ戀愛が本當の戀愛で眞劍なものなら、何かの形で安定を得たくなる、結果は奥さんを突き除けることになるかも知れないけれども……。

生田　兎に角戀愛に這入る時は、男女と云ふものが、妻君と云ふものは忘れた狀態で這入るらしいですね。

新妻　總てを獨占しなければならぬことになるですか。

生田　周圍にさう云ふものがある、と云ふ位の考へ方でせう。

新妻　現在の習慣制度を頭に置いてですね、周圍の壓迫とか云ふことになつて來ると、今佐々木さんが仰つしやつたですが、周圍の壓迫のない所なら何うかと云ふことになりますね、もつと考へ方が違つて來やしないでせうか。

望月　壓迫がなければ這入り込まうとは思はないでせう。若し周圍の壓迫がなければ妻君があつても、仕方がないと思ふでせう。

今井　戀愛が高潮して來れば、領してしまはうと云ふ獨占慾が起つて來るでせう。遊戲の戀愛なら格別、本當の戀愛なら。

生田　それはさうです。遊戲から這入つても段々獨占慾が出ます。

新妻　戀愛の遊戲と遊戲でないのとは、何處で區別が出來るでせう。煩雜さは欲しくない男を愛して居る、女房があらうと無からうと介意はず、一番愛されるものと信じて居れば、家庭に入らなくても宜いことになつて來るですね。それが今迄の社會の制度や習慣に捉はれて居るから妻君を突きのけても這入りたい氣がする……。

北川　家庭に這入ると云ふことはどう云ふ事です？

今井　家庭と言へるでせうか。

新妻　家庭と言へないまでも、例へば夫婦生活に第三者が現はれて、其の一方と戀に落ちる場合ですね。

北川　其の夫が出て來て他の女と一緒に住むとか、又其處へ女が這入るんですか。

新妻　家庭生活と云ふのは共同生活でも何でも、夫婦一緒に住つて暮して居ると云ふことでせう。ですから其の場合に先に女の人が其處に居る、――妻でなくても共同生活者でも、其れを突きのけて後から戀した者が這入つて行くか、それとも或は這入らず

に三角關係を續けるが・・・

堺　途中から出て來た女と男の人との關係も矢張り新しい意味での家庭になるでせう。私共今迄の家庭と云ふのは、妻君があつて亭主があつて、火鉢があつたり簞笥があつたりすることを家庭と思ふから、それで家庭に這入るとか出るとか云ふことになるけど、三つの者で、男が眞中に居て女が二人端に居るとして、それは家庭になるではないですか。

新妻　戀愛關係が起つたら家庭なの？

堺　さうでもないでせうけど、それ以上に進んで居るではないですか、三角關係と云ふのは。

望月　今の家庭制度ではなくて、これから先の家庭を考へた時の事でせう。

新妻　今の生活で、――今の時代ですね、詰り色々の壓迫があるからと云ふのも現在の制度を認めて居ることでせう？　是れから先になつて家庭がもつと煩雜でなくなつて炊事等もなくなり面倒臭くなくなつたら這入るかも知れない、詰り家庭と云ふことでなく男を獨占するかしないかと云ふことを云へば宜いことになりますね。

今井　さう〳〵。私先に言ひたかつたのは、家庭と云ふことは餘り問題にしないで、一體人と云ふものは、幾人をも愛するでなく自分一人丈けを愛する人を求めないかしら。

新妻　それは求めますね。

今井　だから矢張り、周圍の壓迫とか家庭問題は措いて、戀愛が高潮する時、奥さんの方はもう一人の女の人が居ては嫌やだ、其女の人の方では奥さんがあつては嫌やだと云ふ氣持があると思ふ、さうしてそれは何時の社會になつても。さう云ふ感情は――或は悪い感情かも知れませぬが、必ずあるだらうと思ふ、さつき言つた未來の社會が來ても、どうも其の鬪ひは有るやうに思ひますね。

望月　未來の社會が來れば、家庭は何う云ふ形に現はれるか分りませぬから、男女關係も何う云ふ形になるか分かりませぬが・・・

今井　併し一人の愛を獨占しようと云ふ氣持は確にあると思ふ。非常に其の感情は悪いとか、洗練して行くとか、練つて直さなければならぬと云ふことはあるかも知れませぬが、人間本能の一つにさう云ふものは無いでせうか。

望月　現在に於て一人を獨占しなければ居られないと云ふ氣持を持つて居ることは解りますが、私共の生活は何う云ふ風に變つて行くか分りませぬ、社會生活も個人生活も何うなるか分らない。其時は感情も變つて行くかも知れませぬ。

神近　夫婦生活に倦怠の生れることが前提かも知れませぬね。

生田　次の時代は、悧好が澤山になつて、さう云ふやうな風の鬪ひは、より眞劍になりはしないかと思ふ。

長谷川(春)　私の考へは望月さんと同じで、私も矢張り、制度が變つて行くにしても行かない前でも、丁度今井さんの言ふ性格の人と、望月さんの言ふ性格の人と、既に有ることゝ思ふ、それは是れから先もつと家庭が自由な形式になれば、無論それがはつきり現はれると思ふ。

今井　人の盛情が自由になつて――さう云ふことは希はない世界だけど・・・

長谷川(春)　女として、もう一歩進んだ人間は希ふ世界でせう。

佐々木　現在の露西亞の狀態でも、獨占の要求は失せないと思ふ。又獨占には色々の慾があつて、妻君のある男と戀愛關係に陷つたとする。そして男が完全に自分一人を愛

して居ると云ふことが分かつて、其人が自分に對して絶對に貞操を守つて居ることが分つてもですね、尚且つ妻君の存在は非常に氣になりますよ。男を專有して、精神的或は戀愛的に男を獨占して居ると云ふことは確信を得たにしてもですね、さう云ふ確信を得たにしても、それであつても妻君の有ることは何か邪魔になりますね。

新妻　私の讀んだものゝ中に非常に面白いものがあるんです、それは戀愛は有るか何うか分らぬけれど、社會の制度が非常に進んで來て離婚の自由が認められると云ふ場合になつて、ノルエーが何處かで、ホテルに一人の人が泊つて居る、そこで結婚を成立させるには登錄しなければならない、で一人の人が、一番レコード破りは一週間に三回結婚して離婚した、…さうなつて來ると自然賣婬行爲はない、併しさう云ふものは、形は變つて結婚とか離婚とかの形に變つて來ても、或は其處には何等の感情もないかも知れぬ、さう云ふ場合になつて來ると嫉妬も何もない、愛情と云ふことが薄くなつて來るではないかと思ふ。

長谷川（春）しかし、自由だからと云つて、眞摯な心を缺くと云ふことではないですね。

望月　さうです。もつと眞面目に、眞劍に。…惡い意味の自由ではない。

新妻　勿論それは解つて居ます。…あのコロンタイの「戀愛の道」の中に、ゲニヤと云ふのがある、自分の母親の夫に關係して居る位のゲニヤが、「自分は何時か戀愛をする時があるかも知れない、お母さんがなさつたやうな戀愛をきつとするかも知れぬ、」と言つた、若しそれが出來たら貴方の仰つしやるやうな本當の戀愛かも知れませぬ…それは非常に違ふですけれども、日本の遊女の生活などにあります、遊女と云ふものはそれこそ夜毎日毎に枕の變る性行爲をして居る、其時吾々の考へる、より以上の戀人があるものです、眞劍なものです、ですから矢張りさう云ふやうな自由な社會になつて來た時に、ゲニヤのやうに性交は非常に自由にして居ながら、本當に愛して居る者はない、或は其の以上にそれから超越して、本當に愛する離れ難いものが出來るではないかと云ふ所に貴方の仰つしやるものが出るではないですか。

長谷川（春）兎に角、今の世界は、女子にとつて實に不自由な、成つて居ない世界ですね。

神近　だから、其の窮屈な世界をよくしなくちやならない。

佐々木　將來、より良い狀態が生れて、眞劍な戀愛が生れて、離れがたないやうな關係が起つたにしたところで、人間は矢張り動搖がある、個々人の心の過程と云ふものは全く同一だとは言へない、今言葉の上ではさう云ふ狀態になれば離れがたない眞劍な戀が出來ると言へませうけれども、其の時代になつたら個々人が離れ〱な…

神近　何時の場合でも三角關係はあるですが社會の狀態が、其時の打擊を少くすると云ふ意味で、現存の社會と將來の社會——私共の造らうとする將來の社會とは、大變に違ひませう。

佐々木　少くとも理論的には…

神近　理論的ではない、實際にもさうであらうと想像が出來ます。又經濟的獨立の場合とさうではない場合とは大變違ふでせう。例へば生田さんの場合と、無智な人の場合と違ふやうに。

生田　（笑ひながら）どうぞさう云ふ風に認めて貰ひたい。…それは確に言へます。經濟的に獨りで何時でもやつて行ければ、

瞬間の混亂狀態を過ぎたら、後は非常にらくなものです。

神近　生田さんのあの文章は、昔はあの氣持がよく解るやうに思ひますが、現在ではあの氣持が、……私失禮だが、――それもバラ／＼と見た丈けで其れを專心的に讀んで居ないから、何とも立入つた批評は出來ませぬが、貴女のは餘り苦惱が大きいので、一寸變な氣持がします。

生田　あの作品の上で言ひたい苦惱の形は、心の中だけの問題で、外に表はすまいと云ふ意味で、原稿紙相手に心持を統一し綴りをつけて、外の方には、行動としては殆んど現れて居ない女の形です。女の立場として突然さう云ふ事が、信頼し切つた形の上で現れたとすれば、あれ位の驚きは當然だらうと思ふ。あんなに書きつゝある女でもあれは些つとも行動としては出て居ない、唯原稿紙の上で書いた。行動として出たのは自動車に乘つた位のもの、(笑聲)そこを一寸認めて頂きたい。

長谷川（春）先月のはさうでもありませんでしたが、今年は非常に打たれました。あれ丈けの事は實際した人でなければ書けませんね。

大井　私も。大變お氣の毒に思ひました。

長谷川（春）藝術的に中々良いと思ひます隨分いゝ。活きて居ますね、凡ての言葉が。

生田　一番最初の氣持は逆上の氣持です、唯あゝ云ふ形式では「逆上でございますから其の積りで讀んで下さい」と云ふ註が出來ない……。

長谷川（春）書かなくても十分逆上して居ると云ふことが分かります。

望月　先月あれを拜見して、今度も拜見して二重に苦しまれたと云ふことが解ります。お氣の毒に思つたですが、途中斯う云ふ事件があつたからお氣の毒と云ふよりは、寧ろ生田さんとしたらあゝ云ふことを御主人に對して御考へになることは、あれにも書いてあるやうでしたが、女性の侮辱とか、さう思つたらもつと勇敢に何うか解決法を執りさうなものだが、執れない所に……

生田　何と言ひますか、蜘蛛の巢にかゝつたやうに、行くべき途も――斯う云ふ風に行きたいと思ひながら何うも斯うも足掻がつかぬと云ふ形を見せて居ります。

新妻　では是れから、姦通と云ふことに就て話を進めませう。詰り三角戀愛と云ふことは、夫ばかりするのではなくて妻もすることがある、自然其處に姦通と云ふことが連絡して來る譯です。で此の姦通と云ふ言葉は非常に惡いと思ふ。

時雨　嫌やな言葉ですね、初めから罪と決定的ですものね。

今井　本當に嫌やな言葉ですね。

長谷川（春）本當に。其の言葉の中には罪と侮蔑があるやうですね。

時雨　そんな決定的罪とするやうな言葉はやめて、もつときれいな言葉がありさうなものですね。

生田　さうですね。人間が解放された狀態で話される場合には、そんな言葉は一寸……。所有觀念が强い所から來るのだと思ふ。

望月　言葉は換へても事實は存在するでせうと思ふ、新しい時代が來てもさう云ふ事はあると思ひます、ですから生活意識から變へて行けば宜いと思ひます。所有權を無くせば、事實はあつてもいゝ。先づ所有權と云ふものを、無くさねばならないと思ひます。

長谷川（春）やつぱり三角關係と云ふことが稍々それに……少し長たらしい言葉だけど……。

生田　女で、夫に充たされない淋しい時、一寸はずみで這入つて行くことは、隨分多くなつて居るやうな氣がしますね。

望月　今の道德を基調とする考へ方では、勿論今の姦通と云ふ事は惡いでせうけれども私共の考へる道德では‥‥

長谷川（春）干乾にするより何か與へるがいゝですね。

佐々木　第三者に苦痛を與へる場合は？

長川（春）それは考慮しなければなりませぬ。

望月　第三者に苦痛を與へることは、自分の感情の通りに動いて行く場合何うかと云ふことは、新しい道德に於ても惱むですね。

長谷川（春）人間を饑えさせることは罪惡なら、精神的に饑えさせるのも同じでせう。

時雨　三角關係の場合、貞操は何方に持つもの？

望月　貞操は客觀的に言ふべきものではなくて‥‥

時雨　自ら自身の貞操は何方に‥‥　戀愛した方に持つですか。

望月　それで宜しいではないかと思ひます。

時雨　それを承知して居ながら一つの處に留るのは、自分の貞操に許されない譯ですね氣特が他へ行つた時に舊い方に留るのは。

望月　多角性の場合ですか。‥‥それは戀愛した方に持つのが當然だと思ひます。

長谷川（春）さう潔癖に決めることが出來るかしら、

望月　決められると思ひます。今の社會でなく、此の次に來る社會では決められると思ふ、新しい戀愛が生じたら其方に行くと云ふこと‥‥

新妻　併しですね。戀愛は二人を愛ずると云ふことは出來ないでせうか。

生田　男は出來ますが、女には出來ませぬね、どうしても、‥‥餘程特殊の人でない限り。

佐々木　生田さんのやうな女には‥‥でせう。

平林　出來ると思ひます。

望月　今までの習慣から保守的で、二人を同時に愛することは出來ないかも知れませぬけれど、併しさう云ふ今までの感情など女性の生活と云ふものから造り上げて居ますから、是れから自由な新しい社會が來てさう云ふ風に生活して行くと、女の人の感情だつて保守的にばかり動かないでせうから、さうなれば同時に二人でも三人でも愛することが出來ます。

長谷川（春）出來たらしたいですね

新妻　其の場合に貞操と云ふものは何方へ持つて行くんです？

望月　一度に二人を愛して居るとなれば二人に持つて行つたらいゝ譯でせう。二人を愛して同じやうに感情が動けば仕方がないでせう。

佐々木　寧ろ刹那ですね、其時に眞劍であればいゝ‥‥

神近　二人を同時に愛すると云ふことは、あのコロンタイの「三代の戀」の二代目のオルガですね。

北川　今の日本ぢや、お祖母さんの時代が當てはまるぢやないか知らん。

城（望月氏に向つて）二人を同時に愛することは、生理的に何うするの？

望月　それは、三人何時も一緒に居るのではありませぬから‥‥

神近　實笑の方ではさう云ふことがあるでせう。

望月　今の世の中には、本當に眞面目の戀愛で同時に幾人もと云ふことはないでせう。

新妻　今は無いかも知れぬが、さう云ふ傾向

はあるぢやないですか。

望月　所謂モダンガール的のものは分かりませぬが、それは本當の戀愛と言つて宜いか何うか分かりませんですね。

今井　本當に眞面目で、二人を愛して、それで不愉快ぢやないでせうか。

望月　本當のものなら不愉快に思はないでせう。

神近　本當のものか嘘つこのものか、見分けがつかないぢやない？　第三者には。

生田　私もそれはさう思ふ。夫が非常に好い話相手として魂と魂と觸れ合ふ意味で現れて來る女性、他に又賣笑婦のやうな關係で現れて來る女性、又さう云ふ或一面丈けでない場合――靈的と肉的と兩方面一緒に結び合つて來た場合と、此の三つの場合に、靈的のものとさうでないものと結び合つて來た場合には去ると云ふことが一番痛切に動きます。其他の問題はそれ程に燃燒しませぬ。さう云ふ精神的魂の燃燒と云ふものにまでやかましく云ふことは、あまり人間的でないと思ふ。

神近　是は私の觀念論的な空想ですが、戀愛至上の立場から、非常に精神と精神と觸れて居る人があつたら、第三者は身を退かなくちやならぬと仰つしやつたんですか。

生田　靈肉共に燃燒したら。……

神近　それはよく解かる、それは拒むものはないが、併し更にもう少し考へてみて、子供の有る場合とか、其の全體の廢頽的とか、それが社會的に非常に惡い印象であつた場合にはいけないと云ふ考があります。例へば、子供が七人も八人もある旦那さんが大變意氣投じた別の婦人が出來てしまつて、家を出て、奥さんが非常に窮乏な生活の中に七人八人の子供を抱いて、社會の制度が十分よく出來て居ないで子供を扶養すると云ふことは兩親の肩にかゝつて居る時代に其の子供達と奥さんとが取殘されて、戀愛至上論者の二人だけが、戀の歡樂だか何だか、立派な生活の中に立籠つて居る時に、何方を貴方がたは支持なさいますか。矢張り戀愛勝利者の方が非常に正しいとお考へになりますか、子供を扶養して居る馬鹿な奥さんの方がお氣の毒だと思はれますか、社會的には何方を助けなければならぬとお考へになりますか、私は今戀愛至上論に反對的な意見を段々持ちつゝあるのは其點です。

新妻　ある夫婦が結婚したのは二十歳位で、子供が幾人も居る、中學に行く位の子供があるですが、旦那が愛する人と一緒になつて、離れて行つて、奥さんが一人で子供を抱へてやつて居る。勿論私共から見れば扶養もしないで行く夫を憎む。さうして其の殘つて子供を育てゝ居る人に同情します。ですからそれは戀愛とは別になつて來ると思ひます。

神近　非常に現代的常識論と思ひます。

平林　私はやはり戀愛の自由と云ふことに反對するです。現在ではさう云ふ場合は考へませんでしたけれども、其の場合でも恐らく私は棄てゝ行く男に反感を持つだらうと思ふ。此の世の中は戀愛ばかりではない、仕事の問題もある、子供を扶養する責任も親としてある、社會運動などによくある、勇敢だつた人が、結婚しますと――綺麗な奥さんを貰ふとですね、其人が奥さんに引かされて運動に出なくなつた事實もある、又社會運動の中に一人の女が這入つて來るさうしますと、十人二十人の中に渦が起る――其の場合戀愛の自由と云ふことは言へないと思ふ。――階級鬪爭の時代だから其れに當嵌つた戀愛規準がある、さう云ふ意味で私は戀愛の自由と云ふことに反對で

す。

紳近　私は其の場合と同じで、戀愛至上論に反對的の考です。

新妻　私も反對です。

長谷川(春)私、二人で逃げた戀人達の方に同感して、置いてきぼりの方に同情する‥‥併しどつちになりたいかと云へば逃亡者になりたい。

時雨　置いてく人にも苦悶はあるでせう。

今井　私は殘して置かれた者に非常に同情しますね。

紳近　戀愛至上論の意義のあつたのは、封建制度に對して反逆の點で意義があつた。ですけれども現在では其の責は了つたと思ふですから其の戀愛至上反對の理論を大いに宣傳する必要があると考へて居ります。

佐々木　紳近さん、もう戀愛時代を卒業なさつたものと思ひますが、近い未來に非常に好い戀愛が起つたら、今仰しやつたことを御取消しになるかも知れませんね。

紳近　それは、私の持つて居る情熱で押殺すと思ふ。今の若い人で小ブルジョア的戀愛至上主義に實に反感を以て居られることはよく分る‥‥

長谷川(春)戀愛至上主義ではありませぬが、壓迫して來ると、個人生活を――自分の生き方を勇敢に‥‥

大井　自分の要求を自分で恐れて居るやうなことぢや仕方がありませんね。

望月　すると、戀愛と云ふものも重要なものでせうけれども、私共の生活には道德が非常に重要です。道德と戀愛と一致させて行かなくちやなりません、戀人と逃げたら戀愛至上主義には適ひませうが、七人八人の子供と妻君を棄てると云ふことは、事實どんな意味に於ても道德に適はない。規則で拵へた道德でない、人間性に對して‥‥

大井　それは同情はしますよ。

長谷川(春)同情して苦しみますよ。

望月　苦しむなら其處に實際に、心で苦悶するだけでなく、行動に現さなくちや何んにもならない‥‥。

長谷川(春)藝術家の立場で、唯人に同情して藝術の發露を押へては、詰まらない‥‥

望月　道德と云ふものはそんなに窮屈ではないと思ひます。

平林　戀愛は個人的で藝術は社會的ですから‥‥

長谷川(春)それは全然反對だと思ふ。藝術は一番個人的だらうと思ふ。

新妻　私も藝術は個人的だと思ひますね。

大井　情熱的滿足を摑んで生きて行くのが意義がある生き方と思ひます。

紳近　藝術は個人的であると云ふ、私は藝術は個人的でもあるが社會的でもあると思ふ。

佐々木　結果は社會的だが動機は個人的だと思ふ。

紳近　其の程度の理論で、戀愛も、個人的でもあるけれども、同時に社會性も認めなければならぬと思ふ。

望月　第一人は個人的に生きる譯には行きませぬ、個人と社會と一致しなければならない。

平林　戀愛は結局、自分が戀して自分の問題で、さう云ふ意味で些つとも社會的ではない、藝術は印刷して皆が讀むと云ふやうな意味で社會的だが、戀愛をしたのを模型にして人に示すと云ふやうなことはないでせう。

望月　印刷して皆の眼に觸れることは無いかも知れませぬけれども、行動は次から次へと傳へられるから、やはり社會性があると思ふ。

平林　さう云ふ意味では社會性があるかも知



——右より 長谷川春子、素川絹子、神近市子、生田花世、望月百合子、佐々木ふさ、

れませんね。

神近 戀愛そのものゝ本質は個人的ですが、行爲に移つた時には社會的のものになるではないでせうか。

平林 戀愛は私事だと思ふ、さう云ふ風に言へば何でも社會的になりますが、

今井 之と反對に、旦那樣を棄てゝ奥さんが出て、子供を同行すると云ふやうな、生活上の心配のない戀愛は何うでせう。某學院の……

（衆口騷然速記中止）

今井 兎に角性慾問題は、個人々々のものだから、中に這入らなければ分らぬ、やたらに批判は出來ませんね、何う云ふ譯で出來上つたか、非常に深い原因がある、輕卒に表面を見ては言へませんね。

時雨 今井さん、さう云ふ場合には貴女を陪審判事に推稱します。（笑聲）

今井 殊に現代の社會で、女の人が思切つてさう云ふことになるのはよく〳〵の事だと思ひます。

長谷川(春) 昔のやうな、單純な頭ならよいが……

時雨 昔だつて隨分澤山姦通と云ふことはあつたものと思ふ。御手打など澤山あつたこ



長谷川時雨、新妻伊都子、城しづか、今井邦子、大井さち子、北川千代、堺眞柄、平林たい子
——レインボーグリルにて——

とを思ふと、……寧ろ今よりも有つたと思ひますね。あたりまへだわね、それは。

今井　それを男の方は當然視されて、女の事ばかりを攻撃する……

城　それは生理的の事から來てるのぢやないでせうか、女は子供を生まなくちやならないから。今は避任とか何とか進んで居ますけど……。

佐々木　さつき神近さんが「子供を生むから社會的」と云ふことを言はれましたが、すると子供を生まない人達は社會的でなくなるのですか。

神近　それは不用意の間に語られた事だからさう云ふ風に取れるかも知れません。

生田　豫定の項目は大分皆通りました、唯戀愛のサヂズム・マソヒズム、是は可成り讀者諸君にとつて聞きたい事でせう。

神近　それは私共聞き役ですね、戀愛の享樂的方面は知らない。

長谷川(春)　併し體驗深きは先輩諸氏だらうと思ふ。……

大井　婦女界の、現代戀愛座談會と云ふので佐藤八郎と云ふ人が「今の女は拾はれたがつてる」つて言つて居ます。そんなけちな女は居ませんね。

佐々木　そりや居るかも知れませんね。

大井　「拾はれたがる」なんて、女の人はそれ相當自分の力を知つて居やしませんか。私八郎と云ふ人を攻撃するではないが、あの戀愛談を聞いて居るときたならしい‥‥。

長谷川(春)　男に下品な魂があるやうに、女にもありはしないでせうか。

平林　全部拾はれたがつて居るでせう。

大井　今の女はもつと自分の力を知り過ぎてゐやしないでせうか。

今井　此頃、奥さんを失つた男の人が、悲しまないで嬉しさうな氣持があるぢやないでせうか、是は氣に喰はない傾向だが。

神近　ブルジョアの奥さんは後家さんの方がいゝと思はないでせうか。

今井　奥さんが亡くなると、更に若い更に美しい人を奥さんにする、さう云ふ傾向‥‥

神近　ありますね、第一小川平吉さんでも床次さんでも‥‥

佐々木　後家さんになつてホッとしたと云ふのが澤山ありますね。

神近　外國に多いでせう、日本人にはまだ其處迄婦人が行つてゐないかも知れまませぬが‥‥。

佐々木　日本人にもそれが見えますね。

新妻　さう云ふのは、旦那樣が餘り横暴だつたのではないかと思ふ。

城　脚本「甘美媛」の戀愛觀は大變研究すべき事だと思ひますが‥‥

時雨　あの場合、男は、一人やそこらぢやない、いろ／＼の女を、食好みするやうにして居る、それでもそれを喜んで愛する氣持になれるならばですが、それが愛し許されなかつたから退いた譯です。

新妻　やつぱり私は積極的に、自分が向ふの女を押へて殺すまで行くか、又色々自分に缺點があると考へてそれを充たされないならば退いた方が、更に男を愛する度が強いではないかと考へるです。

時雨　あの瓊缶(ニヱ)の場合は、權政とか其他のものを含んで非常に不純なものです。唯、他の女を戀ふが爲に此方を棄てたのではなく色々のものを喰ひちらして、其上に權政も位地も女も取らうとする、それが嫌やなので棄てた譯です。さうして倘片方には前の女卽ち「甘美媛」も取らうとする男の氣持が嫌やなんです。

新妻　多くの男――寧ろ全體の男にさう云ふ氣持がありますね。あの「雲右衞門」で、おつまの心持が、雲右衞門は自分の生活を活かす爲に總ての女を犠牲にして行く、それをおつまが雲右衞門の心持を知つて、女らしい嫉妬もなく、‥‥諦めの生活ですね。

時雨　おつまと違つて、甘美媛の場合は、女の大事のものまでも敵將に奪つたんです。‥‥ではもう、大抵問題もすみましたから‥‥。

生田　では御挨拶しませう、大變工合よく色々の御話に亘つて有難うございます。

時雨　どうも有難う。御暑いところを濟みませんでした。

素川　座談會に出席しながら一言も發言しなかつたことを深く陳謝してその云ひ譯でこの空白を埋めます。あの場合私は、酒席にお燗番が必要であるやうな、そうした意味の存在でもあつたのですが、最も大きな理由としては、お讀みになつてもわかるやうに經驗多々なお方の盛んな、まさに戀愛そのものに當面してゐるかのやうな情熱的なお話振りに聞き惚れてしまつて自分の口を忘れたかの觀があつたためでした。したがつて私は戀愛そのものについても、ともすると傍聽ではない傍觀者で滿足する類の人間であるにちがひありません。

（佐藤秀子　大野優子速記擔任）

如何に戀愛すべきか

堀江かど江



[illegible]田ちか子

一

それが如何なる內容を持つ戀愛であつても、性慾に立脚してゐる感情であるといふことは疑ひない事實である。例へば、發明狂とか、政治狂とか、文學狂とか、迷信家とかいふものを、科學や政治や文學や宗教に戀愛をしてゐる者であるといふのは、すこし可笑しいいひ方であるかもわからないけれど、そのやうな人々の生活行動であつても性慾本能の變形的現はれである。だから、戀愛が性慾本能に立脚してゐる感情であるといふことはいふまでもない。それが性慾と異る點は、單に、前者は後者の純化され洗練された感情であるといふに過ぎない。

　動物には戀愛はない。それは動物が生活意識を持たないがために、性慾本能を純化させる力がないためである。それ故に、動物の生活様式には進歩がない。が、人間の性慾本能は生活意識をもつて純化され洗練される結果、往々、それ自體の目的から遊離するばかりではなくて、その目的に向つて反逆する場合さへある。戀愛のための戀愛乃至『プラトニック・ラヴ』『同性愛』などその例である。

　が、これらの戀愛感情は性慾本能から出發した生活意識乃至生活無意識が運動の法則上遠心力的に性慾意識の限界から遠ざかつたために、本來の目的性が稀薄になり、或は埋沒されて、それに代つて第二次的の目的が力強くなつたために、第一次的の目的との間に衝突が起るに到つたものである。いはゞ、目的と手段とが、その地位を轉倒したのである。が、性慾意識的にせよ、性慾無意識的にせよ。性慾本能から遠心力的に出發した生活感情は、てうど、糸に繋がれたマリがまた求心的に指をめがけてかへつてくると同じやうに、ある限界性に行き當るとまた性慾意識の限界內に向つてもどつて來るも

のである。戀愛の場合に於ては、その感情が相手に受入れられた場合に於てである。發明狂や政治狂や文學狂や迷信家などがその仕事を完成させるか又は放擲した場合に、一時に異性を求めて狂ひ廻つたりするのもこの故である。また『英雄色を好む』とか『天才は多情である』とかいつてゐるのも、彼等が人一倍强い性慾本能をもつてゐるためであつて、言葉を換へていへば、人一倍强い生活力をもつてゐるためである。

が、それらの人々が自分達の仕事は性慾本能の變形的現はれだと思つてゐるわけではない。それ程、人間の性慾本能は生活意識の純化の下に似ても似つかない表現となつてゐるばかりでなく、第二次的の目的――仕事自體の目的――のために顧みられなくさへなつてゐるのである。學者が學問に身を捧げるのも、藝術家に身を捧げるのも――一生獨身生活をして苦にしないのは、その仕事によつて性慾感情乃至戀愛感情が充されるからに他ならない。が、それには少しにても心に弛みがあつてはならない。仕事の停滯乃至頓挫があつてはならない。その時遠心力的に性慾意識の限界性から遠ざかつてゐる生活意識は直ぐに求心的にそこに戻つてくるからである。その時、妻帶もしくは夫帶の學者や藝術家はそれをすなほに受入れるものであり、獨身のそれは更にそれを再び遠心力的に性慾意識の限界から遠ざけるものである。

その何れが自然であるかといへば前者である。けれど、人間は時に社會が不自然に發達した場合、乃至は社會の自然なる發達を打切らなくてはならない場合には、不自然な生活をしなければならない。逆をとつて順を守つてゆかなければならない。

二

では、戀愛を如何にすべきか、如何に結婚をなすべきか、それについて私は『性慾開放』を考へる『性慾解放』は現代のやうな一夫一婦を性道德としてゐる社會に於ては不自然な生活であり、そして不道德な生活である。が、一夫一婦の性道德は果して人間本來の要求であらうか、若しさうであるとすれば何故に姦通であるとか、畜妾であるとかゞ人間の社會に行はれ、また賣淫制度が存するのであらう。それについてブルジョア的道德者達は人間の性的廢頽といつてこの事實をなげく。そしてヒステリカルな悲鳴をあげて一夫一妻は高等動物の性的本能乃至性的道德であると叫ぶ。而して、世には一夫一妻どころか半夫半妻をさへ求められない男女が充滿してゐる一方に、有閑貴族階級の間には一夫多妻、一妻多夫の性生活が公然の秘密となつてゐることには目をふさいでゐる。一夫一妻の性生活が高等動物の自然な性生活であり性道德であるとすれば、何故、高等動物の中の人間、人間の中でも高等人間だといはれてゐる有閑階級の方に一夫一妻の道德が守られないで　下等人間とはれてゐるところのプロレタリアのそれにより多く守られてゐるのは何故であら

うか。また進化した人間よりもその先祖である猿の方にそれが嚴重に守られてゐるのは何如であらうか。一切は欺瞞である。

一夫一妻は決して高等動物の自然なる性生活乃至性道德ではなくつて、實に資本主義と共に著しく發達した私有財產制度の副產物なのである。それは私有觀念の現はれなのである。而して、そこでは社會が男子中心に動いてゐる以上、被征服者たる女子は財產の一部とさへ見られてゐる。だから、現代に於ても妻子も物品のやうに賣物にする者さへもあるのである。

かゝる社會に於ける戀愛は、當然、戀愛私有の觀念に支配される。そして一夫一妻の結婚への課税が暗默の中に約束させられる。それは約束である以上靜的なものである。しかし、戀愛感情は藝術創作と同じく創造的のものであつて、その本質は動的のものである。それを人々は現代資本主義社會に於てより幸福な生活を營まうとするがために、現代の性道德をもつて抑へ付け、その傳統に媚びてゐるに過ぎない。けれど、元來、動的であるものをもと〳〵靜的なもので抑へつけるといふことは到底不可能なことである。元來動的であるべきものを取扱ふのに、元來靜的なものをもつて抑へ付けてはいけない。何故なら、それは、その動的なものをよりよく導く事によつてよいのであつて、學者や藝術家がその極め盡すことの出來ない仕事にその動的な感情を移し植えることは心あるとである。が、前にもいつてきたやうに、意識的にせよ、無意識的にせよ戀愛感情を性慾から遠ざけるには心にすきがあつてはいけないにも拘らず、到底それは人間に於ては出來得ないことである。そこで『性慾開放』が必要となつてくるのである。現代に於てはそれを賣淫制度に於て見ることが出來る。しかし、これは人類に對する侮辱でなくて何であらうか。何故なら、そこでは尊敬の代りに侮辱が、感謝の代りに輕蔑がつきまとつてゐるからである。

『性慾開放』は何のために必要であるか。それは戀愛をして『人を愚劣にするもの』たらしめないために、『人を盲目にするもの』たらしめないために必要なのである。政治や學問や藝術や日常生活に對する戀愛が人間を賢こくして行くに引換へて、所謂戀愛が人を愚劣にし、盲目にするのは何故であらうかといふに、異性に對する私有觀念が働らくからである。傳統の力が働らくからである。そしてその傳統生活なるものが、もしも不自然なる生活であり、不合理なる生活であつた場合には、そこでは『不自然な性生活』乃至『不合理なる性生活』の方が尊ばれなければならないであらう。

三

私は所謂『戀愛』が輕視され否定されるやうになる社會がのぞみたい。そこでは科學に對する戀愛、政治に對する戀愛、藝術に對する戀愛、日常生活に對する戀愛が重視されたい。が、これは私の理想であつて、現在私がそれを實踐してゐるわけではない。また、こ

んな理想などは現代の社會制度治下にあつては『夢想』として一笑に附してしまはれるべきものであらう。

だが地球は廻つてゐる。

所謂、戀愛感情はもはや過去人の生活感情であり、それは私たちが意識的に埋めて行かねばならない生活感情である。私は『〇〇交換所』みたいなものが今日の警察機關みたいに所々に設立されることによつて戀愛感情が形を變へて『友情』となる時代をのぞむ。もつとも『友情』もまた繁殖慾の變形的現はれで、特別に親しむ友人同志の間には所謂戀愛氣分が漲つてゐるのをよく見うけるけれど、『友情』には戀愛に於けるが如き痴愚が伴はないで聰明が伴ふものである。

では、私の夢想する〇〇の交換所に於ては如何なる方法と約束とによつてそれがなされるかといふことに就ては、あまり大きなこゑではいへない。何故なら、私は生物學や醫學の專門知識をもつてゐないからである。故に、性慾開放によつて人間の質が低下するといふ說に對しても何とも論爭しようとは思はない。が、私は人間の科學の力を信じたいものである。おそらく、人間の持つ武器である科學の力はそれを防ぎとゞめるであらう。

性慾行動が食慾行動に於ける場合と同じやうなイデオロギーによつてなされなければならないといふと、ヒンシュクするものがあるかもわからない。が、事實夫婦間に於てはそれがなされてゐるとしては。してみればイデオロギーの變化によつてその延長は可能であると見られるのである。が。くれ〴〵も繰返して置かなくてはならないのは、これには私の實踐が伴つてゐるのではない。例へば、食事の際に飢ゑた人間が來て食を乞ふた場合に、私はその人に食を與へてやることを義務（乃至は權利）であると心得るけれど、〇〇を滿足さすことの出來ない獨身者が訪れてきて〇〇の交換を乞ふた場合には、私は不用意にも怒つてしまふであらう。異性を持たないものが異性を持つてゐるものにその異性を借して貰ひたいといふのは當然の權利であつて、それを拒むことは出來ても怒ることは出來ないにも拘らず、私達はつひ怒つてしまふであらう。それは資本主義的個人主義イデオロギーの然らむるところである。

が、それは兎に角として、食慾分配と同じやうに性慾（必ずしも異性の分配ではない）が分配された場合には、恐らく、現代の如く戀愛のために貴重なるイネルギーを浪費することはなくなつて、それが、例へば、××主義社會の世界完成であるとか、自然征服に關する發明であるとかに使用される結果は、おそろしく人類は叡智に達するであらう。また、そのやうな社會にも『結婚』とか『家庭制度』とかがあるとすれば、それは自然の結合である。もとより、この如き社會の實現は現代社會組織の解體後といへども即座に出來る社會ではない。育兒その他に對しても國家がその責任を負ふたにしても、それに對するイデオロギーを一變させない限りはそれは不

可能なことである。イデオロギーの變化は環境の變化によつて變化するものであるが、それは即座にといふわけにはゆかない。

私に與へられた枚數よりも長くなつてしまつたが、最後に私は食事に對する習慣の變化を書いて、讀者に何物かを暗示することによつて筆を擱かう。

私達は、以前は今とちがつて、來客が割合に少かつた上、たいして貧乏な生活を送つてゐなかつたから、食事の際に來客があつても、十人前後の人數には役立たせるだけの食器の用意があつたが、いまは來客の殖えたに反して道具もなくしてしまつたので、六七人も來客があると平生、私の使用してゐる食器をまで出して間に合はせなければならない。私は初めの中はそれが自分の所有物を他人に汚されるやうな氣がして不愉快であつた。てうど、いまの貞操に對するケッペキのやうに。だが、この頃では自分の食器に對しては少しも氣にならなくなつたばかりでなくて、むしろ自分の食器の役立つことに喜びをさへ感ずるのだ。おそらく、これは私一人の經驗ではないであらう。平生、自宅にあつて自分の食器を他人に使用されることに非常な怒りを感ずる人であつても、一度町に出て公設乃至は私設の食堂に入つて食事をする場合には、共同食器を何の苦しみもなく使用するであらう。而して、性慾乃至戀愛に關するイデオロギーもこれと同じ環境の變化によつて一變しないと誰がどうしていひ得られるだらう。(完)

北京のこのごろ

飯島・松子

こちらはもう暑さの峠を越して朝夕は涼風がたつて參りました。そちらより一月以上秋が早く來ます。貴君方はよい時にお出になりました。國民政府となつてからは、舊時代のものはドンドン廢せられて、淸朝時代の遺物や名前はグン／＼改められます。葬式の行列、婚禮の式——市中であなた方が御覽になつたあの昔風な綺麗な行列もやめられました。其他馬掛兒——三上さんもおつくりになつた支那服の上に着る半分のものあれも着てはいけません。

女はどん／＼斷髪になり着物はピッチリ體に合ふやうに小さく、袖も丈も短くなりました。私のような頭でつかちの瘦せぽちは支那服がミットモなくて着られなくなりました。

男の人——官吏は中山服(運動服のような型)を着せといふ命令です然し北京はなんといつても舊時代の遺物ですから、そうすぐにも全部が變りもしませんが、兎に角、これから後お出の方には、ほんとうの舊支那を御覽になることは出來なくなります。文華殿武英殿など只今は見られないようです。

主都が南京になつて、諸會社は追々南京に移ると思ひます。北京に日本人の數がへつて淋しくなることゝ思ひます。

あなたがお出になつた時が、ほんとうに全盛期の終り(在留日本人の)でした從つてあの婦人會は誰れにも記憶さるべきものです。本當に風雲兒於菟吉夫妻の來燕は意義がありました。

大連や内地へ引上げた日本の太々連もぼつ／＼歸つてこられてすこし賑やかになりました。交民へお箸とお茶碗だけもつていつてゐたころの寂しさつたらありませんでした。

天津日報に三上氏の小說、「京津日報」には吉井勇氏、「新支那」には加藤武雄のが載つてゐます。

この半歳

自らに寄す

春寒や女人形の光澤(つや)くすり

春曉の組む手佛に似たるかな

涙ながるゝ燈の獨りよ春灯

春曇り蜘蛛垂れしまゝ動かざり

貸すといふ二階に雛飾りあり

隣々と假屋こぼたれて人々散りゆく　二句

さし柳芽ぐめるを置き別れゆく

リヤカーに子の運ばれて春の暮

三十餘年住馴れし京都をあとに
母は病兄を伴うて歸郷す

春寒き雨ふッつける別れしな

川島つゆ

母を偲ふ 二句

かげろふやほのかに母の呼ばる聲

昨夜(よべ)は夜着薄かりつらめ別れ霜

獨り居に馴れて明るし春灯

過ぎし日の我れ

葱玉や涙沁み入る庭の土

やがて毀たるゝ假屋

燒土に苔の花咲く五年越し

花桐や家さがしあぐむ曲り角

校正に罷ること二句

うたゝねや芍藥開きゆく見えて

七月抄

富本一枝

二十日

打水がすむなり私達は庭へ椅子卓(テーブル)をはこびさゝやかな夕飯をとつた。暦で立秋とあるにまだ間もあることなのに夏もこの月の廿日となると、さらさら吹き渡る風をきくたびに秋がすぐそこへきて待つてゐるやうでなにやらあわただしい思ひがする。

けふの夕暮夕顔三つ咲く。

夏の夜の星は八時とならねば燦然とした煌めきはみられぬ。銀河は幾億の星があつまりあのやうに霧状の帶となつて空の南から北にかけ渡されてゐるのだといふ。きをつければ流星するのも多くこのあたりからである。今宵は月がないために二等星三等星まではつきりと見られる。光度のことにすぐれて强いのは牧夫座のアークトウルス、琴座のヴェガと鷲座のアルタイル、今時分になると乙女座は西の山に低くかゝる。夏の星座のうちで好ましいものは北冠である。この星は優しくはじらひをもつてゐる清げな姫のやうでかぎりなく美しい。あたかも寶石をちりばめた可愛いゝ指輪のやうでさんぜんとした光は靑く靜かでをかしがたい品格がある。

しとしと夜露がおりかゝる頃になると射手、山羊、水瓶、祭壇も煌めきをましてくる、草叢から蟲が鳴きはじめ葉末に露がむすぶのもこの頃である。夜の讃歌は馨しき香をはなち不可思議な魅力と感覺が溶けあつてひやゝかな夜氣となるのを覺へる。遠くの空で雷光りする。そのあたりの雲が一瞬の間金色に耀きさつと凉風がすぎるとしぶきに似たものが感じられた。あちらの田からこちらの畦から蛙の低唱がはじまる。一羽の五位が低く飛んでゆく。流星。都に住む様々の人をなつかしみとりとめない思ひにふけりながら

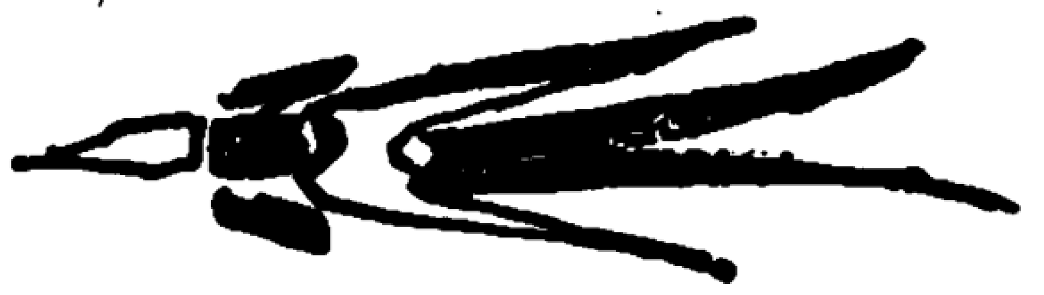
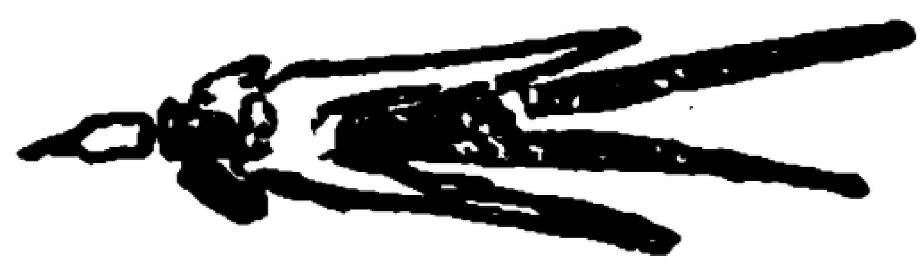
蚊やり火をはたはたと煽ぐ。蜜柑の香ひがあたりにたつ。年寄に教へられて正月ころから丹念に貯へて置いたものである。

子供らは涼臺に腰をかけて花火に餘念ない。闇に咲く松葉牡丹のやうに愛らしいのは線香花火である。火の戯れが嬉しく眺められてゐるうちが花であらう。なかにはくす玉のやうに大きく見事なものもあつた。赤く青く噴水のやうに空に走るものも光焔をはなちながらくるくると水車のやうに廻ぐる花火もあつた。白と赤とに染めわけのついたやゝ太目のこよりを丸く結んで兎のやうな耳をつけたのは鼠花火で、はしこくその邊を走り廻る。ツッつと走るので、子供らはそれを廿日鼠と呼んでゐる。萩の小枝に糸でむすんだものに口火をつけるが早いか青く火を吹きあげ、その中に紫と赤の星くづのやうに小さい火玉を輝かせながらぽんぽん音をならすのはなにやら景氣のよいものであつた。

かうして一つの花火がすんで次の火口に火がてんじられるまでの一時(ひととき)の間はへんに淋しいものである。ふつとくる香ひから人はしばしば思ひ出すことがある。くらやみでいかにも時世とそぐはぬ焔硝の香ひを嗅ぐなり、昔見た田舎芝居のうちでなんでもその時分評判だつた針金强盗を仕組んだものゝ大詰が闇に浮んだ。しりはしよりをして鳥打帽を目深くかぶつた男が人相の怖い男を組み伏せそやつの手にもつてゐるピストルをたゝき落し歯でしつかりかんだ捕繩を右手でぐつとたぐりあげ大目得をきつてゐる。そばで誰かがあれが名高いたんていだと教へてくれた。壓へつけられてゐた泥棒といふのが針金强盗で、殘念がつて恐ろしい聲でなんとかわめいてゐた。それがどうかしたはづみで不意にたんていをけりあげピストルを奪ふが早いか、ズドンと放つた。私はあつといつて耳をふさいだまゝ誰かにしがみついたが、その時の焔硝のにほひがいまかうして闇にたゞよつてゐる。

思へばその頃からすでに二十幾年かの歳月が夢のやうに過ぎてしまひ、大人になつた自分をかへりみるとき、けしがたい哀愁がしみじみとわく。

子供らもねむつた。會所からであらうか、明笛が流れてくる。このせつは村の青年達も尺八とか明笛なんかに興をもつものが餘程すくなくなつて、無暗みと安物の提琴(ヴアイオリン)黨がばつこしたゝめ夏の夜の興をそぐことおびたゞしいことを毎夜のやうに嘆じてゐたが、今夜は思ひがけなくうれしい思ひをする。やむを得ぬ時世の力とはいへ、そのために日本人でなければ吹きこなすことの出來ないこれらのものが日に日に奪ひとられるやうに失はれてゆくことはさみしいことである。

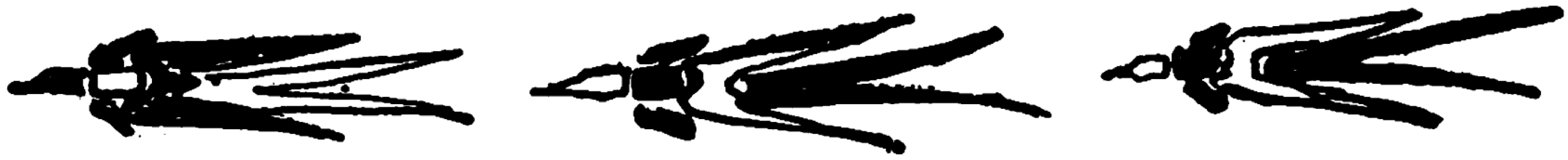




夜もよほどふけてきた。机にむかつて蜻蛉日記をひらいてみたが、この燈ひとつをめがけてあつまる虫の襲來にまかされ、そのまゝとなる。たえまなき輪舞、光の交錯。しばらく眺めてゐたら眼がひどく疲れた。

彼等の執拗さと多勢なことにはただ驚かされる。芥粒ほどのもの、それよりやゝ大きいめのものは胡麻の一粒ほどあらうか、それほど微細なものにさへ潑溂とした生命力の躍動を見る。かすかにのびる二本の觸角は纖細な心づかひをもち、ほしいまゝにおのれの感情でうごき廻してゐるではないか。檜扇の實の黑漆なつぶを嚙み砕いたかと思へるやうに光り艶やかがないのは何虫であらう。すばらしいそのひかりには魅力がある。趣きのないのはあのうんかである。穀物の脱殼のやうにかさかさとして、わづらはしいこともこゝ一番である。この密集は遠慮もない、愛想もない。極めて味のない態度であつてその數もほかの虫よりもつとも多いのが毎夜のことである。蛾の群はとりどりに彩り美しい海邊の貝の模様を思はせるし巧妙優美な絹の刺繡を想像させて樂しみはなかなかのものであるに比べて、うんかは人の世の衆愚と一口にいひかたづけられる徒に抱く感じがあつて、しばしば輕蔑心が起きてくる。愛すべきは道化者のくそぶんぶんである。うるさくうなりをたてゝ無智なその頭を燈火にぶちつけるなり、机の上にさかさになつて落ちてくるのをつまみかけると素早く手足を縮め込みころりとした格好をして動かない。强敵と見て死んだ眞似をして欺すつもりでゐるところに中々稚氣があつて面白い。獰猛なのは女郎蜘蛛である。彼女の生活振りはまさしく近代歐洲人であらう。生仲な感情や、既成道德にしばられて吐息したり蒼白になる自分は毎夜彼女の强い生活態度に憎惡の念を抱きながらも否定しきれぬものを感じる。同意はもてない、しかし承認しなければならぬ主義でもあるやうに。しかも彼女は實にあくどく狂暴に見えるにもかゝはらず蠱惑的である。醜惡であるはづのものがかうした感じをもたせることはどうしたことか。慘虐であるものに對する嫌惡こそかへつて輕蔑でむくはれてくる。結局彼女の態度は最後まで强く卑陋ではないためであつた。

二十二日

靑空ばかりのひろさがり。寺の裏山で土鳩がなく。潤みのある底のふかいその聲はさみしい。柿、柘榴の實は共にかたくて小さくその色の綠は岩繪具である。空にひろがる來竹桃のしなやかなゆれかた、そのたびに光だまりはまろぶ。蜜蜂、熊蜂、大蜂、足長蜂



までこの花のまはりに羽をすり合せてもの懶いうなりが午後の空氣にただよふ。

曉方露でしつとり濡れてゐるうちにつるをきつて風通しのよいところへしまつて置いた西瓜を三時が鳴るなりみなして喰べた。水などで冷たくしたものと味のうまみは比較にならぬうまさであつた。大きな盆に山のやうにかさなつた弓がたの皮を裏まですてに出たら向ひの農家では女共が瀨戸で髮洗ひの最中である。酒好きの姑は八十を越してゐるのにでつぷりとふとり日燒してさらに紅い。酒呑みの人だけの肌色は憎氣がさすほどつやつやとして健康そのものである。その婆さんが頸の邊りまでしかない白髮をばさばさにして手拭でごしごし身體を拭つてゐる。嫁はやつと洗ひ落したところとみえ蒼白い片手をのばして濡れたまゝの髮をくりくり手の甲にまきつけ片方の手でつるべの棹を腹のあたりで力をさゝへながら井戸水をたぐり上げてゐるのにこの婆さんは手をかさうともしない。婆さんの後には入道雲が高くもくもくと光つてうごいてゐる。この炎天に燃えるなかにひとりでつぷりとたちはだかつてゐる婆さんの格好はまさに仁王樣であつた。十五六の孫になる女の兒が裏口からちよつと顔をのぞかせたかと思ふとすぐ引込んでしまつたがまなしに手毬をつきながら出て來た。この兒も髮を洗つたらしくいつものやうにひきつめた髷ではなかつた。すらすらと素直にほぐれた黑髮を風の吹くまゝにさせてゐる。それでも毬つきがはづむたびに顔にかゝる髮を邪魔げに苛々とかきあげ瀨戸をあちこちしてゐる姿はなにやら嬉しいものであつた。

母家で人の呼ぶ聲がした。女の兒は毬をかゝへて走り去つた。俄に空間がひろがつたやうで私も急にさみしくなつた。あかるすぎる空に燕が生き生きと身をひるがへしてゐる。蟬の聲の喧しさ。

夕飯前籠をかゝへて極樂寺にゆく。いつもこの時分は椽側に出てぽつねんと庭先きを見てゐる和尚がゐない。案内を乞ふて見ても返事がない。畠かと思つて裏木戸をあけたら和尙は鳥屋の傍でなにか一心に身をいれてやつてゐる。

聲をかけたらあはてゝ立ちあがり慇懃に腰をかゞめた。「なにをおやりでせう」と言葉をかけながら傍へ近寄つたら、どうしたことかそこいら一面鷄の羽が散らばつて裾さばきのたびにほうほうと飛びたつほどであつた。和尙はともすれば澁面をつくりかけるがそれをやつとこらへるやうにしてやゝ唇のあたりを歪めながら勢のない聲で話し出ず。「畜生といふ奴には全く手を燒ますで御座いますどうやら脂もまはつてきて卵もよく產むでくれますと思ふ頃にかゝるとこれまでからも再三かゝりにきよりましたが、まあ大抵は一羽高々二羽ですんでゐましたところ、昨夜ときたらからつきし根こそぎ、鷄屋だけ殘しよりまして十六羽きれいにころりとやりより

ましで御座りまして、はい。」といふ聲も終りかたは少しではあつたが顫へてゐた。それぢや床屋の犬でもかかつたのかと聞くと、朝日山の狐の業だと言ふのであつた。狐、狐、これはまた意外であつた。村といつても百數十戸も建てこんでゐるこんな村へいつたい何處の狐がきたのであらう。都會に近いために年毎に惡く人ずれのしてきて氣持が惡くそろ〳〵住み心地もよくなくなつてゐるこの村ではあつたが、それをきくとさすがにまだ田舍であることが嬉しく思はれた。

それにしても十六羽とは中々の惡狐めである。みんな搬び去つたのかときいたら七羽とか八羽はそれも一つところではなく、あちこちと狐の逃げた徑におとされてあつたといふことである。それも滿足な姿のものは一羽もなく、むごたらしく頸を嚙みちぎり、皮一枚でやつとからだにくつついてゐたと言ふ。鷄のむしりとられた羽毛が時々ほうほうとたつのを心からなさけなげな眼でみやりながら今朝からのいきさつを話しつゞける。もつともなにやらこの夜中はいつもになく鷄屋から騷がしい羽ばたきが幾度もしたのをきいて蛇でも卵をのみにきたかなと思つたがそのまゝにして置いた。そんなことで今朝はいつもより早く、四時といふ時刻がうつなり床から起きて鷄屋に出かけた處が大變な出來ごとが和尙を待つてゐた。鷄屋の入口はつねから嚴重に靑竹であじろに組み犬の二匹や三匹では到底破りきれぬほどしつかりとしてあつた。ところがその肝心賴みにしてゐた戶が大きくあいた傷口のやうに見えたほどすごい破れかたであつた。和尙はかつとなつていきなり鷄屋にかけこんだがそこはあまりのことで一時は眼をふさいだほど慘忍きはまりのない掠奪の跡であつた。和尙は恨めしいやら憎いやらで寐着のまゝ床屋にかけつけ、眠つてゐる喜二郎をたゝき起し獵犬をひき出すなり狐が逃げたと思ふ方向にけしかけた。ところが犬は憑かれたもののやうになつて一向きに朝日山の傍の池まではしりつづけたが、「そこは畜生で御座ります。仕樣のない奴でそやつ勘造とこの牝犬にばつたり出會つたもので御座りました。さうなるといかに尻をけりあげても首つ玉をどやしましてもさつぱり動かうともしませぬでなあ、あとはお話にもならない不行儀で御座りました」と平常の和尙にかへつてあつさりと笑つてのけた。

この卵の賣上げは師範へ通つてゐるひとり娘が乘り物にかゝる費用にあてゝあつたもので寺住みの人間にとつてあんまり馬鹿に出來ない金もうけのみちで和尙のしよげるわけはそこにもあつた。

和尙に挨拶して表の石段をおりかけるとむかうから大黑が戾つてきた。「とんだことでしたね、あんなに手をかけてゐられたのに」といふと、ぼんやりした聲で「ほんにがつかりいたしました。いそがしいなかでめんどうみてゐたもので阿呆らしうてなあ」といふ。

この大黑は和尙とそろつてお愛想もので卵をもらひにゆくたびにきつと畑のものを籠に添へてよこしてくれる。今日もそのまゝ別れかけやうとするのをまあまあといつて無理に待たせて置いてころあひの白瓜を五六本大急ぎでもいできて空の籠にいれてくれた。ほうほうとうぶけでまだつゝまれてゐる白綠色の美しいものであつた。

山門をはなれたら蜩がいちどに鳴き出し、歳を重ねた柿の梢に入陽が赫々と映えてゐた。

二　日

桔梗は夜あけに野菊は夕暮、水引の白と緋袴は朝のまにみる。けさからは夏萩、女郎花、畠のものでおそまきの隱元の花。

白瓜、冬瓜の豐ななりぐあひもうれしく、とうもろこしの毛はとみに唐人色が濃くなつてそとから指さきでなかをうかがふとしつかりと手にこたへが出來てきてたのもしい。蔓のあがつたものに胡瓜と南瓜、花をつけたまゝ實をみられるもの茄子、千なり瓢。藤豆の蔓にからんで晝顏が一輪。

源氏を籠いつぱいとつて子供らがもどつてくる。かぶとを白かなでくくつて角はせてみたり飛ばせてみたり、戰ひごつこをさせてゐる。二人とも女の兒でありながら田舍で育つものゝ遊びかたでひがな一日餘念がない。このやうな少年らしいよろこびは氣持のよいものである。

晝の光が西の空に低く殘されて五位が呼びかはしながら高く渡つてゆく。蜘蛛が巣をつくり夕風が吹いてさらさらとやさしくゆれる。ゆれるたびにうす明りがすけてみえる。なんともいへぬ靜かなおちついたすがたである。明日もまたよく晴れわたることだらう

此頃

岡田八千代

久しく雨蛙の姿を見ない。よく晴れた夏の午後、芙蓉の葉の上になどちよこなんと座つてカラ〳〵と鳴く時など、夕立の樂しみもあつて好いものだのに、近頃とんと見かけなくなつたのは如何したものだらう。——幼ない時、市川の邊へ泊りに行つてよく蛙を釣つた事があつた、今のやうにまだ開けない時で、方々に沼のやうな水溜りのあつた故か、其處の家にも蛙がたんと居て、短かい竹の先へ糸を下げて、おんばこの葉を丸めて其糸に結び付けて、「かへるさん〳〵」と言ひながら縁から出して居ると、いくらでも釣れる釣れたのを、竹を持つたまゝ地面へ打ちつけると、ぽんと音がして蛙は白い腹を出して目を廻す、それを澤山ためて、塵取りで取つて捨てに行く。其處の家のおばあさんが名古屋の人で、一處に蛙を釣るのに、「かへるさん」といふのを、「ぎやアるさん〳〵」と訛つて言ふのが可笑しくて仕方がなかつた。葦に圍まれて眞赤に濁つた沼では、何が釣れたのか忘れたが、よく日盛りを海水帽を冠つては釣を垂れた、四五日泊つて東京へ歸つたら、田舍言葉になつたと言つてみんなに笑はれた、今では其邊もすつかり開けて東京と變らない位だから、町の人の言葉などは變りもないが、夫でも市川から少し這入つた私の今住んでゐるあたりの百姓等の話してゐる言葉などは、早くて、そして何を言つてゐるのか分らない位違つてゐる。此邊はまだ田圃が澤山あるので、梅の實がやゝ大きくなつた頃若い娘までが田圃に出て働くが、田植ゑの頃は、脚袢も手甲も紺の香の高いのをして、浴衣などもさらのを短かく端折り赤いめりんすのゆもじを出して、新らしい手拭を冠つた姿は、大變色白に美しく見える。

田圃を一と廻りして來ると幼ない時馴染んだ種々なものを出見す、もう野菊も咲いてゐるし、赤のまんまも色に出てゐる。つばなはほけてすかんぽの花も枯れたが、おんばこはすく〳〵と勢よく葉を開けてそうめんももう結べる程に延びてゐる。小ひさな青いか

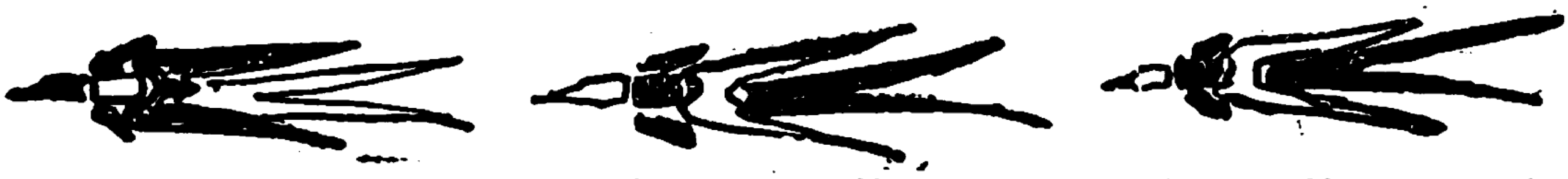
まきり、まだ痩せてゐるいなご。夜はしきりに螢が飛ぶ――

春の頃はこの畦に田芹が一つぱいに生える、莖の赤い、丈のつまつたのを摘んで胡麻よごしにすると幽かに香りがついて春らしい味がする。たんぽぽは少いが嫁菜もつくしもほこりの付かぬ美しいのが直ぐ風呂敷に一つぱい位は摘める、芹、嫁菜は言はずもあれ、春の草はみんな若い柔らかな中は食べても好いやうに見える、字引などで見ても「金蓮花（ナスターション）も昔は水草で、「其の葉は若きは食す可し　などあるが、一寸じゆんさいのやうな雅な味がしさうで、三杯酢にでもしたら、すき者に賞味されるかも分らない美しい花を見ると、食慾が起ると言つた人があつたが、無理ならぬ氣もする。木曾のお花漬、櫻湯の櫻、夏菊の酢のものにしても決して悪い味では無い。牡丹の花の酢のものも好いと聞いたがまだ食べた事は無い、然し最近味はつたくちなしの花の、胡麻よごしはうまかつた、それの三杯酢も結構だつた、花の莖をつけたまゝ熱湯でサツと湯がいて用ひるのだが、其花のねつとりとした舌ざはりに得も言はれぬ味がある。吸口に柚の花の蕾のつかつてゐるのも好いものだし、最近星が岡の茶寮で食べた栗の花の漬物も（ぬか漬らしかつた）味つては平凡だが見た目がしやれてゐた。

東北の方で出來るあけびの蔓の若いのも好い味のものだし、關西の料理屋などで一月頃用ふかんぞふの芽も枝豆の若い時のやうな味がして美味い。總じて野菜は、煮過ぎぬほどのもの、果物は、うれ過ぎぬほどのものが私にはおいしく思はれる。

水草

水草にも隨分種ゝなのがあるのが、此頃田舍に住んで氣がつく、無論名のつく程の水草丈でも睡蓮、澤瀉、風船草、其外澤山にあらうが、さうした名のあるものでなし、所謂「水草や」といふ程のものにも隨分いく種類もあるのを此頃知つた、尤も、京都の西芳寺の苔など、何百年とか經たものだとか言つて、上へ乘ると、上等の絨氈を踏んだ程に心好いが、見た所は一様にしか見えぬ、あれにも何千種とかあるとの事で苔の研究に見えてゐる人さへあつたから、どんなものにも種類は限りなくあらうけれど、智識の淺い自分などには、こんな人の目につかぬ溝川のやうな中にもこんな種々な水草があるのかと思つて驚く程だ、初めは何か草の花が散つて浮いて居るのだと思つた、細かい薄紅色のも水草だつた、此邊にはねむの木が多いので其葉が散つて浮いたのだと思つた、そのねむり草のやうな葉も水草だつた、まるで其あたりの草原と同じやうに青々と苔のやうに透間なしに水の面を隱してゐるのも細い粉のやう



なもので水草だつた、さうした水面を隠した水草の下になほ、金魚の中へ入れてやる松葉の細いやうな藻も一ぱいに浮いてゐる。

晩春、まだそれ程に水草の繁らぬ頃、裾をおなかまでたくし上げた子がよくその川で田螺を取つてゐる。片手に笊を持つて、片手を水の中へ入れて掬ふやうにするときつと田螺が四五匹は這入つて來る。商賣にするのだと見えて、まだ水は冷たいと見えるのに、長い事さうやつてザルに一ぱいになると歸つて行く、

「田螺の鳴くのが好い聲でせう？」と鏡花先生の奥様は言はれたが、私にはまだ、どの好い聲が田螺のだか判別する事が出來ない。夜更け近く、ククククと鳴くのがさうか、チーッと染み入るやうに鳴くのがさうか知る事が出來ない、

まだ「おうしいつく／＼」も鳴かないのに其あたりではもう夜になると蟲が鳴いてゐる、此頃のやうに雨が續いて涼しいとこほろぎの聲さへする、蟲ばかりでなく、二三日前には確かに「百舌鳥」と思はれる鳥さへ鳴いて居た。

鳥と言へば、此邊には尾長といふ鳥が澤山に居る、尤も初めは何といふ鳥か知らなかつたのだが、さき頃、動物園で鳥の居る所を見たら、その中に「をなが」と書いたのが、此邊の松に群れて來る鳥と少しも違はなかつた、尤も此邊に居るのは野生で荒々しくて、汚れてゐるから動物園の程綺麗ではないが、やゝ青味を帶びた鼠の羽根で、尾が山鳥のやうに長い、鳴聲はギイ／＼と言ふやうで姦しいが、凡そ何十羽といふ程群れて來て大きな松の枝に止つて居る所など見事だ、大きいので運動が鈍な様に思はれるが、たまに離れて一羽割合に低い枝に居るのを見やうと思つて、足音を忍ばせて行つても直ぐに氣取つて飛び立つて終ふ。

此間、――もう春の事だ、時雨さんの處の庭へ迷つたかなりやが來た時はをかしかつた。庭のつゝぢの枝に居るので、おまけに足に糸が付いてゐるから、その枝につないであるのだと思つてゐたら、何處かしらぬ所から庭にある大きな鳥籠の中のかなりやの音に誘はれて迷つて來たものらしい。時雨さんは私がきつと取つて見せてよ、でも急いぢや駄目、今度あなたの來る時までに捕つておいてよと言ひながら、庭下駄を穿いて下へ下りると、縁側の下にあつた汚ない底ぬけの鳥籠を持ち出して、チュッ／＼チュッ／＼と言ひながら其籠を鳥の近くの低い枝に掛けた。

「かうして置けばきつと取れてよ」と澄ましたものだ、其次ぎに外で逢つた時

「この間のかなりやは捕れて？」と聞くと

「駄目だつたわ、でも三上が又澤山買つて來たから見に入らつしやい。」と、捕り損つた小鳥の事は一つも口にしなかつた。

小サロン

翁久允氏の「道なき道」の出版記念會があつたをり、何を思出したのか堀江かど江女史クス〳〵と笑ひ出した。傑作「おぢいさん」の作者某氏が翁さんと並んでゐたからである。この「おぢいさん」といふ作は、小說でも感想でもない。實をいふとその某氏から翁さんは長い間、姓を「爺」と思ひこまれてしまつて「爺久允さま」といふ手紙をもらつてゐたのだ。が、笑つてはいけない。考へるに別段緣故のない事でもない、色の黒い尉どのは、おぢいさんに違ひないから、ぢぢい久允、おやぢ久允でも意味のない事ではない。

おなじ會の散會時、大きな銀金具のニギリのある男もの〻太い太いステッキを持つて、地下室の階段から、ボロニヤースのやうなかつこうで上つてゆく、吉屋信子女史の、斷髮の毛なみ眞黑な頸許を見おろしながら、中村武羅夫氏とても愉快さうに、「あなたはまるで瑠璃鳥だ」と讃美感嘆すると、女史ニッコリ見上げて「瑠璃鳥？さう見えて」と、この日吉屋女史の洋裝るり色なり。も一つ忠實に記せば、中村氏に長編「瑠璃鳥」の好作あり。

◇

生命保險勸誘員になつてゐる片上伸氏未亡人に、中年洋服の立派な紳士近寄つて來て、あなたの羽織の紋はかたばみですね、とかなんとかをキッカケに、夜分散歩に出られませんかと勸誘する。未亡人びつくりして社へ飛かへつた。それを聞いた社員たち、こつちも親切にして保險へ加入させてやればい〻にと、逃した鳥が大きさうに思へて嗟嘆した。と、傍にゐた或もの、それは大方抱へてゐた包みの方が目的だつたのだらう。もう一人のひと、なあに、近寄つて來て女かどうか見きはめたのだらうと、これは女人侮辱である。

◇

八月號深澤紅子女史の目次カットは、アナメ、サロメ東西の美女。

◇

女人藝術八月號本社は卽日賣切れといふ繁昌ぶり、臺所孃まで勇んで臨時電話交換手とおさまる。とてもそれがキパッで愛嬌がある「なんですつて、八月の西瓜百五十？」と一きは高く「西瓜を百五十すぐ送れといひます」と、蓋し西瓜は追加とわかつて西瓜のやうにころがつて笑ふ。

◇

アマミヒメ、カンビヒメ、ウマミヒメ。中味のルビを見たらウマシヒメだつたと、神近市子さんが「甘美姫」の作者にいつてゐた。

◇

その神近さん、斷髮の筈なのが時々髷がクッツイてゐる 不思議だと思つたら、御良人の田舍へ避暑にゆくのに、髷のある方がうけがい〻のだといふことだ。

◇

今井邦子さんが神近さんと向ひあつた食卓でこんなことを言つてゐた。「あなたの書いたものに鱶のお刺身をたべるとあつたのを讀んで、びつくりしたので名を覺えてゐた」それは吃驚したのが道理今井さんは山深い信州で育ち、神近さんは長崎の海邊の生れだ。

◇

葛西善藏のお通夜に、山本「改造」と泣きながら飲んだ三上於菟吉、よつぱらつて露のをりる庭へ上布の帷子で寢たので、その後めづらしいことに、禁酒蟄居といふほどの憂目を見た。胃がさういふふうに痛むのは潰瘍だの、血を吐くの、里見がさうだつたの、吉井がさうだつたの、中村武羅夫がさうだつたのと威されて、元來の氣弱がすつかりショゲてしまつて、「葛西はしどい奴だ、死んでしまつてからも友達を苦しめる」とコボシてゐると、生てゐるので、もつとしどい奴が見舞ひに來た。「日々新聞で見たが病氣はその位なのか？帳附けをするのだらうと思つて來たが」と。それは藤澤淸造だつたが、自ら帳附け役と役どころをきめてるのが面白い。

◇

婦人文藝聯盟の讀書批判會が新宿の某カフェーの二階で催された夜、いかに逞ましい尻が揃つたからとて、まさか階下の男客のビールのコップに塵が浮きもしまいにどう憤慨したのか怪しい會合だと密告された。あはれいたましくも交番へよばれて岩永もどきに「そなたの年は」と問はれた若杉とり子女史、顏も得あげず聲細く消がてに——十七といふ。怖さも忘れた衆議クス〳〵と二がつくの三がつくのまさか四ではないでしよ。

◇

汎太平洋會議に布哇へ出かけた市川房枝女史友に人からの贈物が振つてゐる。派手な絽の紋附裾模様に丸帶、親切ついでに連れて行つたのが美貌術及び衣裳着附所

第一巻第三号、四十頁から四十七頁は、高群逸枝著「新興婦人の道——政治と自治——」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致しました。

（龍溪書舎）



婦人の言論機關とその特殊的使命

山川菊榮

雜誌『婦人運動』八月號には、三人の婦人が檻の中に押詰められてゐる漫畫に添へて、『檻詰められた婦人解放』の題下にかう述べてある。

男子立入禁止と檻詰主義を叫んで創刊された『女人藝術』の七月號に、山川菊榮さんが『フエミニズム（女性文化）の檢討』を論じ、神近市子さんが『婦人と無產政黨』を叫び、望月百合子さんが『婦人解放の道』を說いてゐる。惟ふに、女性解放の意義は、異性と肩を並べて歩くところにある筈だ。だのに『女人藝術』の執る道は封建的思想の（女人王國）だ。そんな檻詰の中から、三女史の論說は、例へば天へ向つて唾を吐くの觀がある。婦人解放運動が、かうして檻詰られたり、檻切られたりして、同じ所をさ迷ふのも積極的になれないからだ。女性的な、餘りに女性的な優柔不斷であるからだ。

漫畫の三人の婦人が神近、望月の二氏及び私自身であることはいふまでもない。かゝる形式をとつた嘲弄的批評に對しては、同じ形式で、即ち漫畫と漫罵とをもつて嘲弄的に答へるのが適切であることはいふまでもないが、問題は、さういふ無責任な取扱ひ方をもつてするには餘りに重大にすぎる感があるので、特にさういふ方法を避けて、正面からその批評を檢討することゝする。

本來私は『婦人運動』に對しては創刊以來、多年の間友誼的關係をもつて今日に及び、微力ながら好意的援助を吝まなかつたつもりであるし、たとへ完全に同一立場を取る間でないにしても、積極的に挑戰し、好んで對立的に立つやうなことは決してしなかつたつもりである。かうした關係上、私が今一つの婦人の言論機關――『女人藝術』――に執筆したといふ問題に對して、私自身の意見をもたゝさず正面から堂々と理論的な批評を試みるでもなく、藪から棒に嘲弄的な態度で罵倒せられるといふことは、甚だ意外なことであつた。その筆者が何人たるを問はず、その雜誌の責任者に對する多年の友誼と信頼とが裏切られた感じを抱くものは私だけであらうか。

が、こんなことは私の不明の結果であつて、要するに個人的な問題にすぎない。問題となるのは、この嘲弄的な批評の中に含まれた

二つの論點である。それを要約すれば次のやうなものとなる。

一、婦人が、婦人のみの獨自の言論機關をもつことは、『封建的思想』の現はれであり、『異性が肩を並べて歩くところに意義のある』婦人解放への反逆である。

二、執筆者が、自己と思想的立場を異にする編輯者の手になる雜誌へ、編輯者と異なる立場からの意見を發表することは、『天へ向つて唾する』にも類した、無意義な、自家撞着の行爲である。

私はこの二つの論點について、『婦人運動』の批評を檢討することにより、讀者の批判に訴へたいと思ふ

二

『婦人解放の意義は、異性と肩を並べて歩くところにある筈だ』といふ『婦人運動』同人の意見は、なるほど御尤である。然し私はなほ次のように云ひ足したい。

『そして婦人解放運動の意義は、現在實力的に男子より劣つてゐる婦人が、異性と肩を比べて歩き得るようにするところにある』と。現在、婦人が男子と肩を比べて歩き得る地位にあつたならば、婦人解放は既に完成されたので、今後そのために特別に運動することは全然不必要である。さうだとすれば、婦人運動は、すでにその目的を達成した、過去のものであつて、婦人の現在及び將來には關係のない問題である。

ところで日本婦人の現狀はどうか。法律上は勿論、慣例的にも、能力の上でも、『男子と肩を比べて歩く』までになつてゐないのが事實である。そこに婦人解放の要求が起り、そこに婦人運動の發展する原因があるのではないか。

婦人解放運動が兩性の平等を目標とするものである限り、それは婦人の發展を阻止する一切の客觀的、主觀的條件の除去を意味せねばならぬ。從つてそこには後れてゐる婦人を男子と同一の水準に引上げようとする特殊の方法、特殊の努力が必然に伴隨して來なければならぬ。私の解する限りでは、婦人獨自の言論機關は、さういふ要求に基づいて起つた、さういふ特殊な方法の一つであり、婦人解放の上に重要な使命を課せられてゐるものである。

かの『青鞜』の如き、極めて幼稚なものではあつたが、あの時代としては、他の言論機關の滿たし得ぬ特殊の婦人の要求を滿たし、かつその力を充實し發展させる上に、一つの重要な役割を務め、次の發展段階への必要な飛石として役立つたのである。

雜誌『婦人運動』もまた、さういふ性質のものであるかの如くに、愚かにも私自身は今日まで信じて來た。嚴密な意味で無產階級の立場に立つ譯でもないにかゝはらず、無產階級の陣營にある多くの人々がこれに支持を與へて來たのは、みな私と同じ解釋でそれに臨み、それが婦人によつて、婦人のために發行される特殊な言論機關であると信ぜられてゐたからではなかつたらうか。なるほど『婦人運動』には男性の手に成る斷片的な論文や感想も少々交つてゐる。けれど『婦人運動』そのものを特徵づける、第一義的な性質のものではなくて、被壓迫者たる婦人が、不徹底ながらも獨自の見解を發表する特殊の機關たるところにその特殊の使命があるのだと解せられて來たのではなかつたらうか。『女人藝術』の場合には、この婦人獨自の言論機關たる特質を、編輯者が明確に意識し標榜して、執筆者

を婦人に限定した點において、『婦人運動』に一歩を進めてゐるだけで、いづれも婦人獨自の言論機關たる點では、本質的な差異があるものとは認められないのである。

婦人特殊の言論機關の主要な目的が、男子に比して著しく機會を制限せられてゐる婦人に、可及的十分な發表の機會を與へるところにあるとすれば、原則として執筆者を婦人に限定するのは當然のことである。殊にさういふ雜誌は、高級な評論雜誌と異つて、評論にしても專門的、理論的なものではなく、水準の低い、婦人向きの啓蒙的なものに留めをさすので、多少勉强すれば、專門家でない婦人でも十分書き得る程度のものにすぎない。『婦人運動』に掲載される男子の文章は、大體その程度のもので、特にその雜誌を特徴づけ、權威づけるほどのものではなく、あの程度のものならば、他に發表の機會も多く、特別の好意で『婦人運動』のために犧牲的寄稿をされるにすぎない知名な男性のために、小さな雜誌の中から貴重な數頁を割くよりも、むしろ婦人自身の努力に成る寄稿、特に發表の機會を得ずに苦しんでゐる無名の青年婦人のためにそれを利用した方が、『婦人運動』本來の使命から見て、有意義なのではないかと思はれる位のものである。

婦人の中に書き手が少い現在では、大抵の問題は、婦人に書かせるよりも男子に書かせる方が、編輯者としては樂でもあり、販賣政策の上からは有利であらう。けれども婦人の特殊の言論機關の使命を全うする上からは、骨は折れても、面倒でも、執筆者と編輯者とが互ひに努力し合ひ、鞭撻し合つて、すべての問題に對して、男子の力をかりずとも、婦人自から調査し、研究し、意見をまとめて發表することを根本の方針としなければならない。それは婦人を『女人王國に罐詰める』所以ではなくて、かへつて、『男子と肩を比べて歩くこと』を可能にする上に必要な、準備的、敎育的な段階の一つであり、他の言論機關では滿たされぬ婦人獨自の言論機關のもつ特殊的な使命である。

數年前、左翼勞働組合の內部で婦人部廢止論が起つたのも、この場合と類似してゐる。當時、極左小兒病の一派は、『勞働組合は男女の機會均等を認めてゐる。然るに男子部といふ專門部が存在しないのに、婦人部といふ專門部をおくことは、婦人を特殊的な領域に封鎖するもので、封建的差別待遇の一種である』と主張した。かゝる機械的形式論に對して私達は、形式的な機會均等を口實として、不平等の事實を陰蔽することは、實質上婦人を男子の水準に引上げるために必要な特殊の方法をとることを拒否することに歸着する、卽ち結果の上から見れば婦人をその現狀に留めんとする反動論者と一致するものであるといつて反駁した。『婦人運動』同人の批難もこれと共通で、男子との間における實質的な、機會不均等の事實を打破せんがための婦人特殊の言論機關の意義を、かへつてその不平等を永續せんとするところの、封建主義的、反動的な目的をもつかの如くに歪曲して批難してゐる。

萬一『女人藝術』の同人が『男女別あり、』『男女七歳にして席を同じうせず』式の封建的な男女關係を承認して、その立場から婦人の言論機關を創設したといふならば、それは、『婦人運動』同人の解するが如く、「封建的思想」に外ならない。しかし私の解するところでは、『女人藝術』は、男女の不平等に對し、その機會均等のために特殊な方法をとつたにすぎないので、その立場は反封建的、卽ちブ

ルジョア・デモクラシー、又はフェミニズムの立場ではあつても、斷じて封建主義ではない。私達にとつて物足りないのは、それが反封建主義の闘爭に滿足して、反資本主義の立場にまで發展し得ないところにある。婦人の特殊的言論機關をもつて封建主義と難ずる人々は、勞働組合における婦人の特殊機關をもつて婦人に對する封建的差別待遇の承認と曲解した極左主義者と共通の立場を採るものである。

婦人の特殊機關は、婦人を特殊の領域に封鎖するものである、即ち謂ゆる『罐詰めにする』ものである、といふのが極左主義者の主張であつた。然しさういふ特殊の機關が婦人から意志や行動の自由を奪ふわけでなく、又他の一般的な活動へ參與することを禁止し又は妨害するわけでもなく、却つて特殊の機會を與へ、特殊の方法を設けることによつて一般的な活動へ參與する準備を與へ、『異性と肩を比べて歩くこと』を可能にするものであることは、極左主義者でない限り、常識で判斷のできることである。勿論特別の例外的な婦人には、かういふ特殊の機關の必要はない。最初から『男子と肩を並べて歩くこと』のできる婦人、例へばローザ・ルクセンブルグのような天才的な人物には、さういふ特殊機關の必要はない。然し吾々のような凡庸な人間には、幾千年來の機會不均等の結果を、自分一人の手で打破して、最初から『男子と肩を並べる』ことは不可能であり、まづその準備として、特殊の教育的段階を通過することが必要なのである。中條百合子、與謝野晶子、平塚明子といふような人々は、最初から男子と伍し得たであらうし、婦人の特殊機關を必要ともしなかつたであらう。しかしそれは一般婦人が特殊機關を必要とせず、又は特殊機關が今後より多く有能な婦人の輩出を助けるものでないといふ證據とはならない。

婦人が、獨自の言論機關をもつことをさへ封建主義として排斥せられる『婦人運動』が、男女を共に包容する消費組合のほかに婦人消費組合協會を作り、男女共同の大衆團體以外に職業婦人協會を作ることを是認されるのは、どう解釋したらよいものか。

三

ブルジョア婦人運動においてのみならず、無産階級の運動においても、婦人特殊の言論機關は重要な意義をもつてゐる。各國無産政黨の婦人機關誌が、專ら婦人の自主的な活動の一つの結果であり、その促進の上に役立つてゐることはいふまでもなく、婦人運動に熱心な男子指導者が、婦人の言論機關の支持者であり、レーニンの如く發起者でさへあることゝ普ねく知られてゐる。日本においても勞働組合の婦人機關誌の如き、專ら婦人のために、婦人によつて執筆し、發行される特殊的なものであるし、雜誌『勞農』の婦人版の如きもその一例である。これは婦人を特殊の領域に封鎖する『封建的思想』ではない。たゞ一般機關誌又は『勞農』本誌だけでは、水準の低い婦人に訴へるのに足りないので特に發行するのであつて、婦人の自主的活動を促す教育機關としてのその目的からいつて執筆者は原則として婦人に限定されてゐる。勿論『勞農』本誌は婦人に對して開放され、婦人問題も扱かへば、婦人の寄稿を歡迎してゐるのではあるが、さういふ平等の機會のほかに、更に婦人特殊の境遇に適應するために、特殊の機關――婦人版を出して居り、獨立の雜誌とすることが、男女同志の共に望む所である。これが日本のみならず、眞に階級的立場に立つ無產者が、婦人運動に對して採つて

ゐる共通の態度である。

現に第三インタナショナルは、常に各國の××黨に向つて、その發行する一切の機關誌に婦人附錄を附すること、婦人自身の手に成る獨立の婦人機關誌を發行することを要求してゐる。のみならず、黨外の一般婦人大衆が發行してゐる言論機關の利用と共に、婦人大衆をしてさういふ機關をもたせるために努力することが、婦人に對する活動方針の重要な項目となつてゐるほどである。勞働者農民の婦人大衆は、指導者から讀物をあてがはれることに滿足せず、進んで自分自身の意見を發表する機關をもち、それに執筆し、それを編輯し、經營する事務に習熟せねばならぬ。法律上の形式的な機會均等は、勞農婦人を實質的に男子と比肩せしめるには足りない。そのためには、婦人に對して男子以上の特殊の便益と機會とを與へて、その自主的、自發的な活動と訓練とを促さねばならぬ。そして婦人特殊の言論機關はかゝる任務の遂行の上に、極めて重要な意義をもつものである。

ロシアでは共産黨婦人の機關誌は、一九一四年にレーニンの創意によつて發行され、一九一七年の三月革命當時には、その誘因となつた大示威運動を組織し、其後もあらゆる壓迫の中に發行しつゞけられた。一九二三年には、それは編輯方針を變更し、意識水準の高い婦人指導者を目標とするものとなつたので、それ以下の大衆のために、もつと啓蒙的な言論機關の必要が認められ、『勞働婦人』、『農民婦人』の二種が發行せられ、前者は忽ちにして三萬、後者は二萬の讀者を獲得したが、一九二六年までには、この種の、無産婦人自身によつて執筆し、維持せられるところの特殊の言論機關――民族により地方によつて、種々なる言語方法で綴られた――が十四種に達し、その發行部數は數十萬に達した。共産黨婦人部は、これをもつて滿足せず、婦人の間にかゝる機關をもつ要求を強め、それを實現せしめることによつてその教育と訓練とに努めてゐる。

一九二六年の第三インタナショナル婦人大會で、この方法が推奬された時、ドイツ代表はかういつて嘆じた。『ロシアでは政府の援助があるから何でもできるが、資本主義國では到底さういふ種類のものは維持ができない。』これに對してロシア代表はかう答へた。『ロシアでは何でも政府がひとりでやり、どんな仕事も金に困らぬと思つたら大間違ひである。第一、婦人の機關誌の如きは、勞農婦人自身かその乏しいポケットからもち出す銅貨で支へられ、その持ち慣れないペンで綴られた眞情流露の文字によつて紙面が滿たされるようでなければその眞價を發揮することはできないものだ。ロシアがもつ勞働者農民の婦人の機關誌はそれで、それらは決して政府の力によつてゐるのではなく、眞實に勞農婦人自身の力によつてできてゐるのである。……これらの雜誌は、勞働婦人のためのものでなく、勞働婦人自身のものであるところにその意義がある。……かくの如くしてわが黨は近代社會の强力なる武器――言論機關――を、勞働婦人解放の偉大なる任務のために使用しつゝあるのである。』

無産婦人の言論機關は、その教育の道具であり、學校である。時にはこの學校に男子の講師を招聘するのもよからうが、大體において男子にたよらず、婦人が自分自身で、自分の教育をやり直す覺悟をもつてしなければ効果は上らぬ。無産者團體における婦人の特別集會でも、始めは男子指導者の斡旋を必要とするが、婦人の進歩につれて、全然婦人だけの手で立派に切まはしてゆくようになり、男子幹部の出席が必要でなくなる。さうなると今度は、婦人のみの特

別集會に滿足せず、進んで男子と共同の、一般集會に出席しようといふ要求が起つてくる。最初から一般集會に出て、男子と同じやうに意見を發表する婦人は稀である。婦人の機關誌も同じことで、いつまでも男子の助力を必要とし、その寄稿がなくては成立たないやうなものは、教育機關としての不成功、不成績を證明するにすぎない。男子の力をかりずに、婦人だけで立派なものが出せるやうにならなければ、男子と肩を並べて一般的な雜誌に寄稿し得る婦人、一人前の婦人は出てこないのである。

同じことは演說についてもいひ得る。婦人の演說家を養成するには、一流の男子雄辯家の演說を飽きるほど聞かせおくよりも、どんなに下手でも、婦人自身を演壇に立たせるに限る。疊の上で水練の極意を學ぶことは出來ないと同じことである。行動による教育！これこそは無產階級の教育の秘訣である。そして婦人特殊の機關誌もまた、婦人に發表の機會を與へることによつて、行動による教育を行ふ一つの重要な道具である。

婦人特殊の言論機關が、婦人解放運動の上に演ずる役割は、以上の如く極めて重要なものである。自から婦人特殊の言論機關たることによつて存在の意義を認められてゐる『婦人運動』が、さういふ言論機關の意義を否定し、それをもつて婦人解放の妨害と見ることは、私の單純な頭では理解しかねる論理である。或は少數男子の寄稿家を交へることが、『婦人運動』をして、婦人特殊の言論機關たる本質を否定させるほどに重大な、根本的な意義をもつのであらうか。いづれにもせよ、私はこの點において『婦人運動』同人と反對の意見をもち、この種の言論機關發展を、婦人解放のために必要な條件とするものであることを明らかにしておく。

四

次に第二の論點である、思想的立場を異にする編輯の雜誌に寄稿することの可否について一言せねばならぬ。

理想的な條件のもとにおいては、執筆者は自己と立場を同じうする編輯者、又は自己の編輯する雜誌にのみ執筆するのが愉快であるには違ひない。現に外國の文學者にはさういふのが多く、自分の個人雜誌以外には、一切執筆しない例はいくらもある。又無產政黨の機關誌などで、特にその黨專屬の執筆者には、生活費を支給する代り、他への執筆を禁じてゐる例も多い。しかしこれらはすべて、營利的言論機關に寄食してゐる日本の原稿生活者には適用のできない、理想主義的原則である。かゝる原則によれば、無產階級の言論機關が極めて幼稚で、微力である日本では、無產階級の立場に立つ者は、殆んど言論の機會を奪はれることになる。なぜなら、編輯者の思想的立場を問題にすれば、一般の營利雜誌の利用は勿論、『婦人運動』への寄稿すら、『天へ向つて唾を吐く』嘲りを受けなければならないからである。それとも『女人藝術』の場合だけが『天へ向つて唾』することになるといふ論理が成立つならば、御教示を乞ひたいものである。

私自身の個人的立場からいへば、無產階級の雜誌は極めて少く、從つて利用の機會が甚しく制限せられてゐる上に、營利雜誌は、註文された場合に、註文をうけた問題について書くことを許されるだけで、自由に利用し得る言論機關の不足を感じてゐた矢先であるから、編輯者と立場を異にしようが、男子禁制であらうがあるまいが問題でなく、勝手な時に、勝手なことを書かして貰へる雜誌は甚だ

結構である。言論をもつて生命とし、生活の手段としてゐる私は、編輯者の思想的立場を云々するやうな潔癖な理想主義者ではなく、敵對關係にない限り、あらゆる言論機關を利用する方針であるし、又さうしなければ第一食つていかれもせぬ。『女人藝術』が婦人獨自の言論機關であるといふことは、それを一段營利雜誌や『婦人運動』とも區別して、特に執筆を拒絶せねばならぬ理由となるほどの重大な罪惡であるといふことは、私には理解できぬところである。無産婦人の讀者が少くインテリゲンチヤが多い點では、『婦人運動』とても五十歩百歩であらうし、それを問題にすれば、一切の營利雜誌への執筆は不可能となり、原稿生活は上つたりである。『どんな責任でも負ふから、思ふ存分に利用せよ』といふ『女人藝術』編輯者の提言は、私にとつては甚だ好都合である。私は私自身この有利な機會を利用すると同時に、知己の婦人にも積極的利用をすゝめた位である。私は思想的立場を異にする者に向つて無條件の利用を許す編輯者の寛大とその熱心にも好意を持つたが、廣く一般の婦人に開放してその發表の機關となるといふ編輯方針もまた、婦人特殊の言論機關としての意義と職分とを理解した態度であると考へた。私は『婦人運動』の同人も、かように自由な機關を利用し、進んでそれを占領する位の意氣込みで書き立てた方が有利なのではないかと考へる。

婦人特殊の言論機關の意義といふようなことは婦人運動のいろはであつて、無慮數萬言を費して論ずるほどの問題ではない。しかもこれが婦人界の先驅者をもつて任ずる『婦人運動』によつて否定されたのを見る時、私は曾て極左主義者によつて組合婦人部が否定され、男女同一賃銀が否定された時と同じ驚き、同じ悲慘なる滑稽を感ぜざるを得なかつた。さても前途遼遠なる日本の婦人解放運動！

ハワイより——北村兼子

春洋丸で船長主催のティーパーティーがありました時、私たちは日本服で出ました。そしたら同船の獨逸人が是非寫させてほしいといつて『着物娘』の一葉をお撮影りになりました。

いま私たちはMANOA・VALLEYに居ります。ここは虹の谷といつてちよつと輕井澤をしのばせるところです。美しいナイトブルーミングシリアスの花の開くとき、私達は競つてその周圍に集ります。

朝咲く花、晝咲く花、夜咲く花——、花、花、花、ほんとに花の國です。赤、黄、白、紫、緑、きれいな、きれいなところ、それはホノルルです。長谷川時雨女史がこゝへ來られたら、劇がどんなに澤山出來ることかとおもひます。あなたがたもここへ一度おいでたら、どんなに詩嚢を豐かにして歸られる事でせう

青森より——山本安英

私共は昨日札幌から青森にまゐりました。おかげさまで各地とも相當の入りでございます。北海道は永い間あこがれてゐた土地なので何を見ても嬉しうございました。白樺、ポプラ、アカシアの木も澤山見る事が出來ました。あと新潟と松本でかへれます。こちらはもう一ケ月近くも雨が降らないさうで草なども大分枯れてまゐりました。



[illegible]田ちか子

プロレタリヤリアリズムと關聯して（感想）

平林たい子

プロレタリヤリアリズムの問題がこの頃頻りに論議される。さういふ名前をきくのはこの頃のことであるけれども、この問題は、決して昨今に起つてはゐない。

この問題が、この頃になつて喧しく論題とされるのは、今まで、作品の投ずる社會的結果などには無關心に（プロレタリヤ文學製作者の最大關心は實にそこになければならないにも拘らず、しかも、彼等は、關心をそこに集中してゐる如く裝ひながら）個人的自己滿足のために叫喚怒號する事をもつて事足れりとしてゐた、プロレタリヤ文藝陣內のある一派が曲りなりにも自己淸算をしはじめやうとした事の結果である。局外者から見れば彼等が一應事新しい問題を提出した如く見える。しかし我等は、それを、遲蒔な自己淸算としか見得ない。

プロレタリヤ文學運動が、靑野氏の目的意識論に指導されて方向轉換をなし、社會主義的政治鬪爭の一翼としての自覺を持ちはじめた頃、日本のプロレタリヤ文學運動の陣營內には、既に方向轉換の犧牲として極政治主義、左翼小兒病的政治と文學との混合傾向を生じた。そしてこの傾向は、その頃から、一般無產階級運動を徐々に支配して來た小兒病的傾向に相呼應し追隨して一時、プロレタリヤ文學運動の全陣營を覆はうとする勢をさへ見せた。彼等は、政治的には、福本和夫によつて代表された極左的觀念論を信奉し、藝術の範圍內ではその觀念論を機械的に適用して、適宜に調合したロマンチシズムを强調した。作品は、表現派などとは紙一重の恐しい主觀主義で、そこには一千九百二十年代のプロレタリアートの生活の、冷靜な、そして希望に燃えるところのいかなる描寫をもうかゞふ事は出來なかつた。そこには、沒落に面した小ブルジョア層の自己欺瞞的な怒號と叫喚とがあるのみであつた。

そして、それは、小ブルジョア層の、個人的な、自己滿足などといふ消極的な結果に留らず、叫喚や怒號によつて、一見極左的に扮飾してゐるところから一部小數の大衆の支持を得る結果となつた。

我等の先覺は、既にこの時代から、この傾向と戰つて來た。「プロレタリヤリアリズム」と云ふ言葉は、或は、使はなかつたかも知れない。しかし、理論的表現に於て若干の遺漏があつたにしても藝術

運動に於ける實践であるところの作品行動に於いては、强く頑强にこの主張をたてとほしてたゝかつて來た。

武田鱗太郎氏の「敗戰主義」と黒島傳治氏の「穢」とを比較して見よ。久板榮二郎氏の諸作と里村欣三氏の諸作とを比較して見よ。

プロレタリヤリアリズム――この主張はまことに正しい。プロレタリヤ文藝運動の陣營內では恐らく、本莊可宗氏を除いて外には、この主張に反對するものはないだらうと信じる。

しかし、作品行動に於いては、今なほ、頑强な、反對者を發見する。しかも、それは、今更らしく事新しげにこの問題をジャーナリズムの夜店に洒して得意になつてゐる彼等自身ではないか。

彼等はつねに、まづ「現實はかくあるべし」といふイデアを、福本和夫著「社會構成＝並に變革の過程」と共に机の上に用意してただそれだけで小說を書かうとする冐險を敢行した。

社會の「構成並に變革の過程」が佐野學の論文の載つてゐる、マルクス主義と取りかへられたとて、實質的にいくらの違ひがあらう。

彼等の小說の中では、あらゆる小作人は皆地主とたゝかつて勝利し、勞働者は常に資本家側を敗北させて凱歌をあげ、すべての大學生は街頭に人民の政治的自由を叫び、被壓迫小市民は、芝公園に殺倒して反動議會解散の請願運動に一大デモを行ひ、婦人層は（我等は、ブルジョア、或は小ブルジョア、プロレタリヤ、ルンペン、農民、としての婦人は發見する。けれども彼等のいふ「婦人層」なる超階級的層は、未だ見たこともきいたこともないのだ。）その不平不滿を、無產階級的政治鬪爭に結びつけて鬪爭し、等々等々。

そしてその結果は文學の持つ特殊の機能は輕視されて、讀者を極度に倦怠させることになり、遂にプロレタリヤ文學の讀者の層はプロレタリアートから徐々に小ブルジョア層の方へ移動する結果をさへ生じた。

プロレタリヤ文學に對するプロレタリアートの不信と輕蔑、プロレタリヤ文學にとつてこれより重大な問題はないであらう。學生やどら息子ならざるプロレタリアートによつてはプロレタリアートの運命は他人事（ひとごと）ではない。

ハッピイエンデイングに終るロマンチックな小說は、他人の運命である場合には面白いであらう。が現實には、資本主義の安定の時代にあつて資本家の攻勢にあひ、失業苦と生活難に苦しめられてゐる現在のプロレタリアートにとつては、さういふ文學はただ苦笑以外の何物でもない。

ただ消極的な、笑ばかりでなく、ともすると、この苦難の時代のプロレタリアートの固い決意に樂觀主義を强いるそれらの文學には、敵意さへ感ぜしめる。

プロレタリアートはいふまでもなく、究極の勝利は固く信じてゐる。しかも、その勝利への道は、學生や小ブルジョア文士の考へるやうなそんな容易なものではなく、實に、血と肉彈の道である、ことを知つてゐる。そして世界のプロレタリアートの現實が、あなどりがたい反動の攻勢の前に今さらされてゐることを知つてゐる。この現實より出發して、猶固く未來へ燒きつく希望を失はぬ文學こそが、一千九百二十何年代の、日本のプロレタリヤリアリズムの文學であるべきだ。

現實に對する正確な計算なしには未來への一步前進は望まれない。彼等の口にする「プロレタリヤリアリズム」はもとより我等の

はじめから主張するところだ。それに異議はない。だが彼等は、遺憾ながら、現實に對する正確な計算を忘れてゐる。彼等は、頭の中のイデアの都合のいゝやうに、現實をでつちあげてゐる。

　プロレタリヤリアリズム――この主張は實に言ひ得べくして行ひがたい。彼等の中の、小才の利くあるものは、この主張の出現と共に、急角度の轉回をして危く小ブルジョアリリシズムに轉落しやうとしてゐる。戰旗八月號の中野重治氏の「春さきの風」を見よ。

　プロレタリヤリアリズムは、決して、内容ばかりの問題ではない。形式もまた、形式化された内容だ。あの、行をこまかくかへて、細い針金の樣に筋をたどつて行く形式は、激動のある環境を避けて自分の氣持ばかりをいたはりながら平和に日常生活を送りたがる小ブルジョアの生活の好みより出たものだ。

　そして、この形式を傳へる感情はさういふ小ブルジョア―的生活に人間を組織する能力を持つてゐるのだ。

　ブルジョア文士の中でも、ことに反動的な室生犀星に讃められる自分自身であることを反省せられよ。

　プロレタリヤリアリズムの文學は、いふまでもなく、自然主義的リアリズムの文學ではない。またロマンチシズムの文學でもない。さらに小ブルジョアリリシズムの文學でもない。

　雜誌文藝戰線に據る我等の一派は、理論の上だけの空しい怒號でなく、既に實踐に於いて久しい以前からこの問題は解決して來た。我等は、更に次の段階に移つて、次の段階の新しい問題に食ひ入りつゝある。

――前號に於いて新人の作として推薦掲載した創作「街の底を踊る人形」の作者高橋鈴子氏を紹介する――女人藝術社

略歴　高橋鈴子



明治三十九年八月神戶市に生る、丙午なり

大正元年――二年まで父と別居して、母の故鄕に母と共に住む。すでに母の精神的苦惱を察知する早熟神經質の少女なり、祖父の歌集、句集、隨筆などについて、つれづれの母の寢物語りを大いに樂しみとする。

大正九年兵庫縣立神戶第一高等女學校入學、

同十四年奈良高等師範文科に無試驗推薦を受けたが體質惡しく爲に入學不許可、縣立高女高等部國文科に入學、古文、漢文に熱中する。哲學及び法制は教授に對する。好感から眞面目に講義を聞いたが、他の學課は大部分圖書館と、小説を書く時間に代へられる

「的」「或恐怖」「芭蕉と旅」「惡人」「落葉の秋」等を書き、同人雜誌「二人」を作る。この頃父と再度の別居によつて、妥協出來ぬ夫婦――父と子の苦境に身心の懊惱はげし。

昭和二年二月國文科卒業、「南京虫」「五鐵白銅とリリオム」其の他を書く。

同年十月――十二月保姆生活其の後家庭教師となつて現代に及ぶ。藝術に對する憧憬と精進の念は愈々堅く、文學への緊重と必死の精進を續けてゐる。



吉田雅子

社會時評

大木耳子

一、對支問題

反動內閣、又の名を『よひどれ內閣』と云はれる田中內閣が、とうとう支那問題で一つの大きな暗礁にのり上げてしまつた。

それは、無論滿洲の治安を楯にとつて張學良に南方政府との妥協交止を中歩せしめ、支那の統一運動を妨げ、支那の南方にも北方にも內政干涉として恨まれ排日の氣勢を盛んならしめてゐるところに、米國が突如として南方政府との間に關稅新條約を締結したからである。

この事は、日本をして二つのことで非常に不便な立場に置くこととなつた。第一は、日本政府が日支兩國民に南方政府信賴するに足らずと强ひて來た主張の根據を大變に薄弱ならしめたこと、第二には、支那國民に日本と米國との態度を對照比較する機會を與へ、いや更に排日の空氣を濃厚ならしめる傾向があることである。從つて日本と米國との關係はこれ迄も一再ならず云ひ觸らされて來たところではあるが、それが尙ほ一層緊張したものになりつゝあると想像されることである。

それかあらぬか、七月二十九日の一新聞は、ワシントンに於いて『米國は……日支兩國間の問題解決を齎らす唯一の可能の方法は、仲裁の外にはなく、然らざれば極東の國際關係は止めどなく緊張するであらう』こと、又『米國政府は極東に突然大事件が燃え上るとは期待してゐない』といふ觀測が行はれてゐることを報じてゐる。

しかし人間の心理といふものは妙なものである。無い、無いと云はれると、却つて有るやうに思ひ、有る有ると云はれると却つて無いやうに思ひ勝ちである。『極東の突發事』もワシントンあたりで『期待してゐない』と云はれると却つて『期待してゐるのではないか』と疑ひたくなつて來る。

私共のこの不安を尙ほ一層不安にするのは、田中首相の談話である。首相が先達て腰越行の列車中で爲した談話として發表されたのを見れば、凡てはこちらの筋書き通りであると語つてゐるのである。アメリカは極東の國際關係は止め度なく緊張せんとする危機にあると云ひ、日本の首相がそれがこちらの筋書き通りだと云つてゐ

るとすれば、それは何となしにアメリカ側の覲側が裏書きされてゐるのだといふ考へを私共に起させる。

田中首相は、巷間傳へ云ふ通りに日本を率ゐて支那を中心とする國際的鬪爭の中に引入れんとするのであらうか。私共は田中內閣が存續する限りこの絕えざる不安に惱まされなければならないのである。

二、矯風會諸姉の首相訪問

イギリスが、選擧法の改正を行なつて男女同權としたことに刺戟されたといふ譯でもあるまいが、日本の保守黨政友會も何物かに脅へて、始めてこゝに突然と婦人の參政權をその政綱中に加へるといふことを宣傳し出した。

腐敗、墮落、無恥、厚顏――凡ゆる集團的罪惡の見本のやうな政友會の『よひどれ』振りを凝視して來た國民が、どうしてこんな淫祠の御札めいた一片の綱領に欺むかれよう。人は却つてその木に竹をついだやうな人氣取政策に、政友會の挽歌を聞く感じをしてゐる。

例へば田中首相が刺客の一家を濕した金一千圓にしろこの婦人參政權の問題にしろ、立場を異にした政黨なり個人なりの立場なら深い好感をもつて受入れられるべきことが、反對に首相と政友會への嘲笑反感の種となることについて政友會が今更らに狼狽と當惑とを示してゐると報じた新聞があつたが、これも凡て政友會が自分で播いた種を自分で苅つてゐるまでゝあつて、彼等が何時迄も國民を木偶と見てゐた誤算の結果である。

私は僅かこゝ一二年前迄、政友會が婦選尙早論であつたことは問題としない。正しい意見であることを氣付いた時には、主張をかへることは早ければ早いほどよいからである。けれど參政權に國民權利の擴張である。前代未聞の彈壓を無產階級の上に加へ、世界無比の惡法を國民の前を謂はゞ無理押しに押し切つて發布した政友會が、一夜にして國民權利の擴張を志ざす政黨に更生するいふことを信ずる國民があるであらうか。私共が政友會の婦選案を眉唾ものとして日本の婦人界に警戒する必要を感じるのはこの爲めである。

しかるに面白いことには、政友會のこのイカサマ綱領の宣傳を眞にうけて（或は眞にうけた振りをして）、態々田中首相に政友會の婦選案を空手形に終らしめないやうにといふ警告をしに行つて、政友の婦選案の爲めに提灯をもつ役割をつとめた一團の婦人達があつたことである。

私は、矯風會の諸姉が全然權力階級に迎合しやうとする動機ばかりであゝした態度に出たのではないことを確信する。諸姉と雖ども國民の政友會の婦選案に對する感情は知られる筈である。諸姉は恐らくは善意で、たゞ自己の意志表現を急いであゝした態度をとられたものであらう。

しかし空手形であることを百も承知の上で空手形であらしめるなと願つてゐる人と、空手形を擁し乍ら『いや、御婦人には何時も負ける』などとふざけてゐる會見の樣子を遠くで見てゐると、私共は自然『狐と狸のばかし合ひ』を見てゐる感を抱くのを如何ともしがたい。

同じ宗教團體でも、米國のクエツカア達は、自己の新しい活動の分野を發見した。飢饉期のロシヤを最も大々的に救護して多くの人命を救つた彼等は、極く最近にも米國ペンシルヴアニア州その他に

起つてゐる炭坑ストライキの坑夫達の慘めな生活に奮起して、資本家側の妨害と壓迫とにも拘らず單獨その救護に努めてゐる。私の記憶が過たなければ、彼等はかのザツコ、ヴァンゼツチ事件當時も、彼等の救命運動に盡した。

しかし私は婦風會が日本の無産階級解放運動や犧牲者救援運動に積極的にどんな支持を與へたといふことも聞かない。かの半年にわたつて日本の無産階級の血を湧かさしめた野田の爭議に、罷業者慰問の企てがあつたといふことを聞かない。

今にして偏見を去り、創立の精神に歸つて社會の大勢に順應しなければ、これらの宗教團體が反動的存在として社會の明らかな指彈を蒙るのは決して遠い將來ではない。

三、『皮相なる見解』について

婦人に參政權が與へられるのも、今日ではもう時の問題となつた――と、かうどの新聞も主觀的に書くやうになつては、その日が來るのは、決してもう遠くはない。

日本の社會がかうした情勢をはらんで來ると共に、非婦人參政の主張も現はれ出した。私は比較的に公平な立場からこれを主張する人々の言説と非難をうける側の人々の言説とを比較研究して來たつもりであるが、非政治論の側の人々は、餘りに自己の傳統的立場に執し過ぎ、餘りに相手を知らない恨みがなくもないと思ふ。

例へば『中にも最も大切なのは、婦人參政權の問題であります。それは婦人が參政權をうれば、從つて他の凡ての婦人問題が婦人自身の力で解決できると思はれるからであります。併しこれは甚だ皮相な考と云はなければなりません』と云つて、婦人の政治的參加をし否定てゐる人があるが、これを今日無産政黨の組織に參加してゐる婦人達の代表的意見として批評してゐるのであるとすれば、それこそ『甚だ皮相な考だと云はなければならない。』

婦人が參政權をうれば、他の凡ての婦人問題が解決できると思ふのは、民主々義者である。(否、民主々義者も今日ではさう考へてゐるかどうかは疑はしい。)今日無産大衆の間で壓倒的の勢力を示しつゝある無産政黨の精神を汲む婦人は、決して參政權をもつて婦人解放の唯一の利器と考へてはゐない。寧ろ反對に非政治主義の人々が、極めて屢々云ふところの强權政治への反抗を具體化せんが爲めの參加であつて、從つて議會に席をうるといふことがそのまゝ一般婦人への裏切りとなる理由もなければ、敵の陣營に降服することも意味しはしない。

しかし、これらの政治的理想が、腐敗墮落をした場合を指摘されゝばそれはないでもない。例へば第二インタアナショナルの諸政黨の墮落がそれであつて、よくこれは引かるゝ例であるが、しかしそれだから今日の日本の無産黨も直ちにさうであると斷定することは出來ないと思ふ。

私共は、非政治主義を主張した先輩の著書には、多くのものを學んで來た。そしてその主張には實際に聞くべきことがあることも知つてゐる。しかし今日の日本の無産政黨中の最も有力なものが第二インタアナショナルの諸政黨に對する批判の上に生れたものである事實をすら知らずして批評することは、非政治主義を世間の物笑ひの種にする危險があり實際には主義に忠實な人であり乍ら結果に於いて反對に不忠な人となるのではあるまいか。

四、賣淫制度について

秋田雨雀氏が、ロシヤから歸つて來られてロシヤには賣笑婦がゐないと云はれたと云つて、何かの雜誌で秋田氏をひどく嘲笑してゐた人があつた。本誌前號で生田花世氏は秋田氏が『賣笑婦は從つて少ないやうだ』と語られたと書いて居られるやうである。

私は直接に秋田氏の話を聞いたのでないから、同じ問題についての氏の話にどうしてこんな開きが生じたか分らないが、まさか秋田氏が賣笑婦がゐないなどゝ云はれる筈はないやうにも思ふ。私共は、四五年來次々にロシヤから歸つて來る學生、主義者の人々に逢つた時、彼女達の存在についてはよく話を聞く。それらの話から押して、別に所謂『憂欝な人生の教師』でもなければ、ソビエットロシアの外交官でもある筈のない秋田氏が、事をまげて話をされる道理はないやうにも思ふ。

たゞ秋田氏が、革命前の如き奴隷的存在である賣笑婦はゐないと云はれたとしたら、或は當つてゐるかと思ふ。聞くところによると、ロシア政府は賣淫制度をプロレタリヤ國家の汚辱として、徹底的にこの制度の掃蕩を期してゐる。活動寫眞、學校に於ける教育講演等の手段によつてこの制度の弊害と危險性とを青年男女に知らしめる一方、施療所その他の機關を通じて接觸して來る賣笑婦に仕事と住居とを與へて、舊生活を嫌惡せしめようとし、又法律を設けて賣笑婦に接近する男とこの制度によつて利得するものを最も重く罰してゐる。しかし賣笑婦自身は最近花柳病の危險に他人を曝した場合にのみ男子と同じく罰されることに法律が改正されたが、それ迄は賣淫行爲そのものについては無論、その他にも彼女を罰する制度はなかつた。のみならず政府の地方行政官に對する指令は、明らかに彼女達の人格を認め、彼女達の境遇をその環境の故に歸し、充分の同情と敬意とをもつて扱ふやうに警しめてゐる。賣淫に從事する婦人は、物質と生活との狀態に堪へがたいものがある爲めにそれをとり上げたのであれば、地方の行政官はその職務の遂行に當つて賣笑婦との接觸に際しては、鄭重と禮義とをつくして、必らず粗暴の振舞ひがあつてはならない。』

これを今日のブルジョア日本の龜井戸、玉の井あたりの私娼窟の女達が檢擧された時にうける待遇に比較するとどうであらう。必ずやその隔たりは思ひ半ばにすぐるものがあると考へる。

龜井戸署には、現在毎晩必らず十數名の賣笑婦が檢擧されて來るさうである。私共の今日の制度は、この制度によつて利益するもの又この制度によつて女を使用するものを罰しない。罰される者は三者の中の最も弱者であり且つ無力な賣笑婦自身である。その彼女達が官憲の手によつていかに侮蔑的に且つ享樂的に遇されてゐるか、目撃したことのない者にはそれは想像することさへ出來ないと思ふ。それを考へると私共はこの女性に對する侮辱の爲めに自分の面が赤むのを感ずるのである。

この隔たりは無論ブルジョア國家とプロレタリヤ國家との本質的な相違の爲めであり、これらの事情から押して今日のロシヤは他のブルジョア諸國に於けるがやうな極度に頽廢的な人類と社會との存續に致命的な影響を與へる賣淫制度はなく、たゞ無智であつて比較的に性的に無感覺な階級の人が貧困の爲めに投ずるのであつて、そしてこの貧困の爲めであるといふことがロシヤの當局にとつて救濟の本位であるといふのも注意すべきことである。

秋田氏がロシヤに賣笑婦なしと云はれたとしても、それが『奴隷的存在としての賣笑婦』と限定されての上でなら決して不當ではないと私に思はれるのは、これらの事情によるのである。

五、白石氏の『おつね』

女流文藝雜誌『窓』については、生田花世氏も本誌の創刊號で紹介して居られたやうに思ふが、同誌の短篇作家白石清子氏は、天分と手腕に惠まれた作家であると思ふ。

私はこの稿を書きかけて、フト机邊に落ちた『窓』八月號をとり上げた。そして白石氏の『おつね』といふ作をよんだ。それは實によい作品である。原稿紙二十枚そこ〳〵の短かい作品であるが、私共はこの作品の一行一句に生きた人生が息づいてゐて、觸れゝば血を出しさうな現實を感じさせられるのである。

こゝには當ても氣なく、摸倣もなければ主觀と客觀との見苦しい分離もない。凡てはスッキリとして明らかに私共にどこか深川あたりの陋屋に展開されてゐる或る淋しいやるせのない人世を感じさせてくれる。難を云へば目的意識の度がやゝ低いことであるが、しかしそのリアリズムにはゴールキイの短篇に見るが如き描寫の正確さとある力とが感じられる。

尚ほ同じく『窓』六月號に出た『煎餅』と題する作品も、深味のある苦しい人生の惱みを感じさせるいゝ作品であつた。

この四五日前に久し振りに『改造』に發表された野上彌生子氏の『眞知子』をよんでゐた私は、偶然白石氏の『おつね』を『眞知子』に比較して考へしめられた。『眞知子』は、多分一つの長篇にまとまるらしい創作であるが、今月發表された分によつては私共はあの非難の多い野上氏の手法に、未だ何等の新らし味を見出さない。實際に、『眞知子』六章三十一ページに、私共はどこに白石氏の『おつね』に滲じみ出てゐるやうな藝術的アトモスフイアを、生きた現實を感ずることが出來るだらう。なるほど克明には書いてある。構圖も相當に工夫され、筆は尚更こなれてゐる。しかし藝術は克明や構圖や慣れにはない。それら以外のサムシングがなくてはならない。藝術とのこのひそかな連鎖を失つて、空疎な人物を紙上に踊らせる時に、私共はこれを通俗小説とよぶのである。(七月三十一日)

實生活の一頁

おもちやの貯金箱

安全自働車株式會社　武田凡子

海だ！山だ！と大方の人は、暑熱を避けるといふよりは、寧ろ夏を享樂するに浮き身をやつす今日此頃も、おもちやの貯金箱のやうなボックスにゐて、自働車のガソリン供給をしてゐるのが、私達の務めです。人の足音、電車のひゞき、自動車の警笛の交響樂に耳をすまして、ボックスの前に立ち止るお客を待つ、さういふと、あまりに職業意識が働きすぎるやうですが、實際その日の賣れ高が、私共には大きな影響を持つて來るのですもの。

私共は毎日午前八時きつちりには、このボックスの鍵をあけます。退けは大抵六時といふのですが、どうしても六時半でなければ歸られません。その間、お客のない限り、お裁縫しようが、編物しようがまた讀書をしようが勝手なのですが、何しろ三尺四方のその土間の半分は腰かけに作られ、手廻りのものをおく有様ですから、一時間ぢつとしてゐたらいゝ加減くたびれてしまひます。それでお客が見えるとつひお話に花を咲かせてしまふのですが、それがまたおなじみをつくる元となり、大抵お客の顏ぶれがきまつて來るのです給料は一日一圓の割、それに手當と歩合といふものがつきます。歩合は一日に百ガロンのガソリンを賣ると二十錢、赤貝印、黒貝印の五十回のガロン回數券を賣れば一冊で二十錢二十回券が十錢、オイル一個賣つて二錢です手當は一ヶ月一回の休暇を與へて日給はそのまゝなので、かうして計算しますと、月ざつと四十圓位受け取る事になります。賞與は本給一ヶ月分位づゝ二回ございますが、その半分は、不時の使ひ途のある時の用意といふ名目で、天引で、會社に積立てる事になつてをります。

私共は、仕事は割合に手綺麗な上に時間の餘裕があり、婦人の職業がやう／＼本筋に入つて行くにつれて、辛さが増し、そしてかへつて收入の減つて來る時に、勉強しようと思へば、樂に出來るこの職業を私は喜こんでをります。けれどもかうして日々いろ／＼な人に接しますので、時にはざれ言いつて言ひ寄つたり、なんだかんだと無駄口叩いて去らない人もありますが、そんな時には、口惜しい心をぢつと押へて、知らん振りで受け流してをります。世の中に働く以上、どんな辛いこと

[illegible]ゐると思ひますので、自分さへしつかりしてゐれば、とその方を心掛ける事にしてをりますの。會社の方でも男女の社員が多いので、偶には艶やゝかなローマンスも生れない事はないでせうが、ガソリン部の主任は非常に物堅く、出勤退社の時間を恐ろしく氣になさるので、私のお友達ではまだ、謂はゆる美くしいローマンスを聞いた事がない位、さうした事のないうちに、大抵さつさと結婚してしまひます。

お勤めの目的は、もつと前に進まうとの希望よりも、家庭の生活の手傳ひとか、お嫁入りの支度の稼ぎ、そんな所で精々なので、勤務年限も從つて短い譯、三年もゐたら長い方でございませうか。

不平、といつてはあまり言葉が强いかとも思はれますが、お友達同志口にする事は、この勤務の場所の事です。一日一圓の日給は誰でも同じですけれど、歩合が一ヶ月の收入の大きな結果を持つて來ますので、誰でも賣れる場所、例へば、大手町とか、虎の門とかに廻りたがります。今では一度受持ち場所がきまると、なかなか動かしてくれないのですがみなさんは、それは不公平だと仰有います。しかし會社の方から言へば、賣りあげ高を多くする上から、おなじみをつくる必要があり、さうさう交替させては、成績にさしひゞくといふのでございませうが、とにかく兩方に理屈はございませうね。

もう一つ、本當に辛いこと、それは冬の寒さです。ガソリンといふ爆發しやすい危險物と共に一日をすごしてをりますので、火の氣は一切禁物、外に出れば寒いし、ボックスの中にゐれば、寒い上に倚息がつまる、冬は文字通り、ガソリン賣り子を泣かせます。

助演者の苦心

松竹映畫女優　**飯田蝶子**

(どうして女優を志したの?)つてよく聞かれる。華やかな映畫女優の生活に憧れて、蒲田へ、蒲田へと押寄せて來る今の方々と、その時の私の心理とは大そう違ふやうである。

私は若くして結婚に失敗した。理想の人に再びめぐり會ふまでは、何でも自活して行かうと考へて、まづ女事務員になつた。だが、何とそれは無味乾燥な創造力の不要な仕事であつたことよ、同じ力をいれるならもつと面白い事はないかしら……。で、ある日のこと。ふとのぞいた淺草の活動小屋に、私は映畫女優といふ職業を見出したのである。しかも私の眼をつけたのは、主役俳優を「けて然も自己を生かして行かうとする、複雑な研究を要する助演者の立場である。その時みた寫眞は川田芳子さん、五月信子さん主演の「白蓮紅蓮」だつた。そこに出て來る小間使ひや婆やそれらの役の需要の將來必ず多いであらう事



を私は考へたのである。
そして運よく友だちの手を經て有力な人の紹介狀を貰ひ、以來獻身的な苦心を重ね、とにかく今日になつた。が、顧みて今も尙涙ぐまれる苦い思ひ出は、「不如歸」のロケーションで大洗に行つた時のこと。（岩田・栗島兩氏主演で、私はばあやのお幾になつた。）その町の常設館では私達に是非挨拶をしてくれとの懇望である。然し私はまだ其頃少しも世に認められてはゐなかつたし出る幕ぢやないと思つたから、辭退したが、どうでも出ろといふ。仕方なく町の衣裳屋から晴衣を借りたりして岩田さん栗島さんの後につゞいた。悲劇がそこに待つてゐた。岩田さん栗島さんを迎へて百雷のやうに起つた拍手が、私の出た時には實に見事になりをしづめてしまつたのであるしかも「そんな奴は知らねえや、ひつこめ！」なんていふ野次まで飛び出すさわぎ。そのまゝそこにへた〳〵と仆れてしまはなかつたのが不思議だつた。私は全身の力をこめて、公衆に皮肉の一矢を放つたものである、
「どうぞ皆さま映畫を御覽になる方は、華やかな主役の顏や動作ばかりを讃美なさらずに助演者といふものゝ苦心にも注意して頂きたいと思ひます」
が、私が喜劇に志したのはこれが刺戟になつた爲だから、感謝すべきではあると思ふけれど、ほんとに、ほんとに、私にとつては、それこそ生涯の悲痛な思ひ出である。「助演者として成功するのは非常に骨の折れる」といふ事は、今も皆様に理解して頂き度いと思ふ。
私は生れつき頓狂な性質を持つてゐるので喜劇をやるのは割合やりいゝのだが、そしてまた、撮影では全く生命をかけてやる事が、喜びであるが、内に憂ひある時の出演は、出來上つてから自分で見て自分だけにわかる表情の堅さを見出す。そんな時はふと寂しい氣がする。だが、それとは全然異つた意味でかのチャプリンのやうに、底に涙を秘めた深刻な喜劇を、一生に一度はどうしてもやつてみたいと思ふ。ほんとうに女性の心理をのみ込んだよきユーモア作家よ監督よ出でよ。さはれ、私は外國の名監督よ日本へ飛んで來給へとは願はない。今の私達の監督は立派である。今少し充分な費用を會社から支給されたなら、必ずよりよき映畫を作るであらう。
とにかく私はよき道を選んだと思つてゐるお蔭さまで理想の人も見つかつたし、これから唯共に研究に研究を重ね、かたはら、今の借家住ひなんかよして、私達の生活にふさはしい巣を作るべく幸福な計畫をしてゐる。

口と齒と生活

齒科醫　鈴木愛子

──お口を大きくあけて下さい。大きく〳〵と幾度云つても顏をしかめてゐて充分に開かないと、商賣氣もなにもどこかへ行つてしまつて、かつと腹の立つて來ることが度々、勿論痛いことも知つてゐますし、無理のないこともあるのですが、それ程でもない時、餘り神經質でぐず〳〵されると、遂その氣持がこちらに映つて來るのが我慢出來なくならしいのです。職業のもつ慘酷性とでも云ひませうか。

小さな口、大きな口、奥の方が狹まつてゐるのや、美しい隨圓形の歯ならびや――口の形の樣々もいつの間にか氣にならなくなつてあけて下さい、噛んでみて下さい、を繰り返してゐますが、ずつと奥の方の治療で、度々口を大きく開かされた時には、その當座は確かにいくらか口が大きくなりますね。

極大ざつぱに云つてみても、歯の色が透くやうに白く、細く、尖り氣味の人は神經質、幾分黄色つぽく、不透明で、厚く平たいのは膽汁質の人といふやうなことは、その人の顔面の感じや動きと共に、ほんの僅か治療の間にわかることです。

初めて人の口を覗き込んでみた時には、むつと込み上げて來る程嫌な氣持で、自分が歯醫者の仕事を選んだことを心から後悔しました。底の知れぬ洞穴でも覗くやうな不氣味さ他人の肉體にふれ、口臭に鼻をつかれることの潔癖、口の中などといふものは大抵の場合、そんなに美しい景色をなしてはゐないものらしい。かつちりした歯の岩石の上に、苔の代りの黄色い歯しほがついてゐるといふ程でなくとも、靑い胡瓜の皮がはさまれてゐたり、ぶやけた御飯粒が出て來たりするのを、樣々な想像で面白がつてしまふまでには相當に修業が要りました。けれども習慣は恐ろしいもので、今では患者の吐いた唊を手でかきまわす――滅多そんな必要はありませんけれど――ことさへ平氣でやれます、肺尖が悪いと聞いても、あさう、と答へるだけ、生なか隱されたりするより、却つて必要な丈の要心が出來ていゝ氣持です。

以前、僅か盛岡に行つてゐたことがありましたが、近郊の田舍から出て來る年寄りなどの歯といつたらお話になりません。生れて五十幾年一度も歯を磨いたことがないと云つて歯と歯しほとの區別がどうしても見分けられない程ひどいもので、その時こそ農村の人々の生活狀態を思ひ掛けないところから覗いたやうな氣がしました。

希望に滿ちた忙しさ

美容術師　メイ・ウシヤマ

私達が歸朝して、美容術といふ事を初めてから三年、ほんどにこれといふ程の力も借りずに、今日になつたのを思ふと、唯愉快である。然し、威張つた事をいふのではないが、日本の美容術師はまだ〱駄目だと思ふ。新聞や雜誌で相當な理論を發表していらつしやる方は、技術の方がまるで伴はないやうだし日本の髮結さんの方の非常に技倆のある方は失禮ですけれど頭の方が進んでいらつしやらない。こんな事では美容家の社會的地位もいつになれば向上するのか、ほんとに心細い次



第である私は思ふ。自分が若さと精力のある間、一生懸命この仕事をつゞけて、こゝへいらつしやる有産階級の夫人令嬢から撒かれて行くお金をまとめ、社會的な事業に投じようと。例へば設備完全な孤兒院や養老院など。最初はお婆さんばかり收容する養老院だけでも出來たらと思ふ。色々な環境の爲に墮落して老いて後ほんとに頼るものもなくなつた老婆たち、若い私達が力の限り彼女らを救ふことは。一つの義務ではないだらうか。そんな計畫も立てねばならない、又、後から來る同じ仕事を志す人の爲に、よき指針となるべく、不斷の研究を續けねばならない。日に幾十通と來る美容家志願の人々の選擇もせねばならない。家庭におとなしくばあやとお留守をしてゐるベビイも、よき人となるやうに教育せねばならない。ほんとに私は忙しい、身も心も忙しい。だが、愉快な希望に滿ちた忙しさであることを感謝してゐる。

はげしい生きた仕事

新聞記者　吉田信子

刻一秒を競ふ新聞記者の生活は全くめまぐるしくあはたゞしい。一歩新聞社の中に足を入れると悠長な氣持等はどこかへ、話振りや足取り迄が性急になつてしまふ。受け持ちの婦人欄の記事を一日に二つは書かねばならず毎日の活動振りが記事になつてほつきり紙上に表れ社會の目にふれるのだから氣が氣でない。朝十時に出社して各社の新聞を一通り目を通してから今日こそは好い材料を得ようと社を飛び出す。部長から行き先や問題を指定せられる事もあるが多くは研究室、學校、役所各婦人團體、百貨店、家庭訪問とあらゆる方面を歩き廻る。

「面會をさけられたり、不愉快な事もあるでせうね」とよく聞かれるが、多忙な人で仲々面會出來ぬ時は廊下やエレベーターの中や時には自働車の中へ追つかけて話を聞く事がある。でもかうした人達の方がかへつて短時間に要了よく答へてくれて都合が好い。ところが訪問して不快なのは警戒して何を質問しても「知らぬ存ぜぬ」一點張の時。教育者や役人は慇懃な態度をしながらそれが一番多い。こんな時には折角好意をもつて訪問しても反感がむら〳〵湧いて來る。それから有閑階級の奥さん達で長々とした取次、お化粧する時間をまたせる、かと思ふと長い挨拶、次はお茶お菓子と來られると參つてしまふ。

まあ兎に角面會が出來、材料の得られた時はよいが材料もなし、寫眞も手に入らぬ、〆切時間は迫るといふ時は實際泣くに泣かれぬ氣持何處へゆかう？誰れに聞かう？困つた揚句向ふの迷惑等一向顧みず遠慮會釋もなく押しかけて無理やりに材料を得て〆切間際にやつと社に歸る。〆切近くの編輯局の中は恐ろしい程活氣づいてゐる。電話のベルがけたゝましくなる、あちらでもこちらでも急しげにペンを走らす、原稿紙が工場に飛んで行く、何か大事件でもあつたやうに上氣して歸つて來る人、丁度雜沓した街頭にもにた編輯局の空氣に勢ひづけられて亂暴な程夢中で筆を走らす。書き上つた一枚づゝの原稿紙が編輯者の手をくゞつて工場に運ばれる。ホット我にかへつた時はもう午後七時近く。實際はげし

い仕事だ。でも其日其日の仕事に反響があり改善があり、輿論の喚起があり、數々の社會現象が生れて來るピチピチ活きた愉快な仕事である。

或カフェーにて

女給　中野てい子

毎日、午後三時頃になると私たちはきまつたやうにお風呂に行くことにしてゐます。頸すぢだけ、ことさら眞白に白粉を塗り、お化粧道具の入つた籠を下げて、湯屋ののれんを出てくる私たちの姿を通る人たちは一様に輕蔑的な視線を投げて行き過ぎます。私たちは淺間しい氣持になるのを何氣ない風をして歸つてきます。私たちの心の底には何物かに對する反抗心がそつと鎌首をもたげてゐます。

私の店には五人ばかりウエートレスがゐるけれど、皆、貧しいためや、或は男に捨てられて稼いでゐる人たちばかりです。ここはW大學の附近なのでお客の大半はW大學の生徒です。親の脛かぢりのお坊つちやんなどは、私たちのやうな人生の苦勞などはわからないので、まるで、私たちを玩具のやうに扱ふので、癪が立つといふよりもむしろ輕蔑したくなります。これは私一人ではないだらうと思ひます。

私たちは、職業がらどのウエートレスものがれられないいろいろな誘惑の手をのべられてゐるのです。誘惑といつても、ここでは會社員や相場師のやうな金錢をもつて露骨な誘惑をする代りに、それはいろいろな苦心をしてゐるらしいのです。その型の一例として、

A、熊本縣の多額納税者の二男だといつてゐる。よく私の店へ來ては金文字の本をめくつたりして他の人達のやうに無駄話などはしない。そしてチップを露骨に出すやうなことはしないで、新聞紙の下に置いたり、おぼんの下に置いたりしてそつと出て行く。つまりそのやうなブルジョア的禮儀によつて私たちの心を惹かうとしてゐる方。

B、やはりW大學の學生で骨ばつた顔をしてゐる。親達同志できめた許嫁があるが、どうしてもそれがいやで耐らないといつてはこぼして見せて、私たちの感傷的な同情心につけ入らうとする方。

C、自稱詩人である。長い髪の毛を感傷的に後にしごき、酒に醉つては詩の朗讀をして比較的無邪氣で自由な藝術家の生活を空想させて、文學好きのウエートレスの戀情を挑發しようとする方。

D、スポーツマンの卵であるから色が淺黒くて筋骨もがつしりしてゐる。盛んにスポーツの話をしてきかせる。そして、どこの活動のスターはどうの、〇〇舘の呼物はどうのとファン振りを發揮してみせて、私たちの安價な享樂氣分をそそつてつけ入らうとする方。

かうした誘惑のいづれかに私たちの仲間はいつとはなしに落ちて行くのです。お友達のM子さんは無口で眞面目な方であつただけ、とうとうAの誘惑にかかつて姙娠までして捨てられてしまつたのでした。

私たちは玩具のやうに取扱はれるとは知りつつも、そこは若い私たちのことではあるし眞面目であればあるだけにかうした生活からのがれようとあせつてゐるので――といつて私たちには一家の見識も教養もないところか

ら、相手を信頼しては誤つて誘惑に落ちてしまふのです。又は自棄的の氣持から態々身を滅ぼして行くのもあります。

さうした私たちを世の人達は、概念的に墮落女と蔑すんでゐますが、私たちだとて好んでかうした職業につくわけではありません。學歴も富も持たない、といふよりは失ふべき何物をも持たない私たちは、明日のパンにも差支へる境遇に置かれてみれば、勢ひ雜作なく就かれるウエートレスといふ職業婦人となるわけです。だから、さうした職業につかなければならなかつた私たちの境遇を知つて貰へたなら、概念的に私たちに輕蔑の眼を投げかけることは出來ないであらうと思ひます。

私がウエートレスになつて痛切に感じたのは、私たちが玩具の役目をするために生れ落ちたかのやうに眺められたり輕蔑されたりすることです。どんないやな職業についてゐようとも、それをいやしいといつてその人を輕蔑するところに、輕蔑しかへされる種が蒔かれるのです。

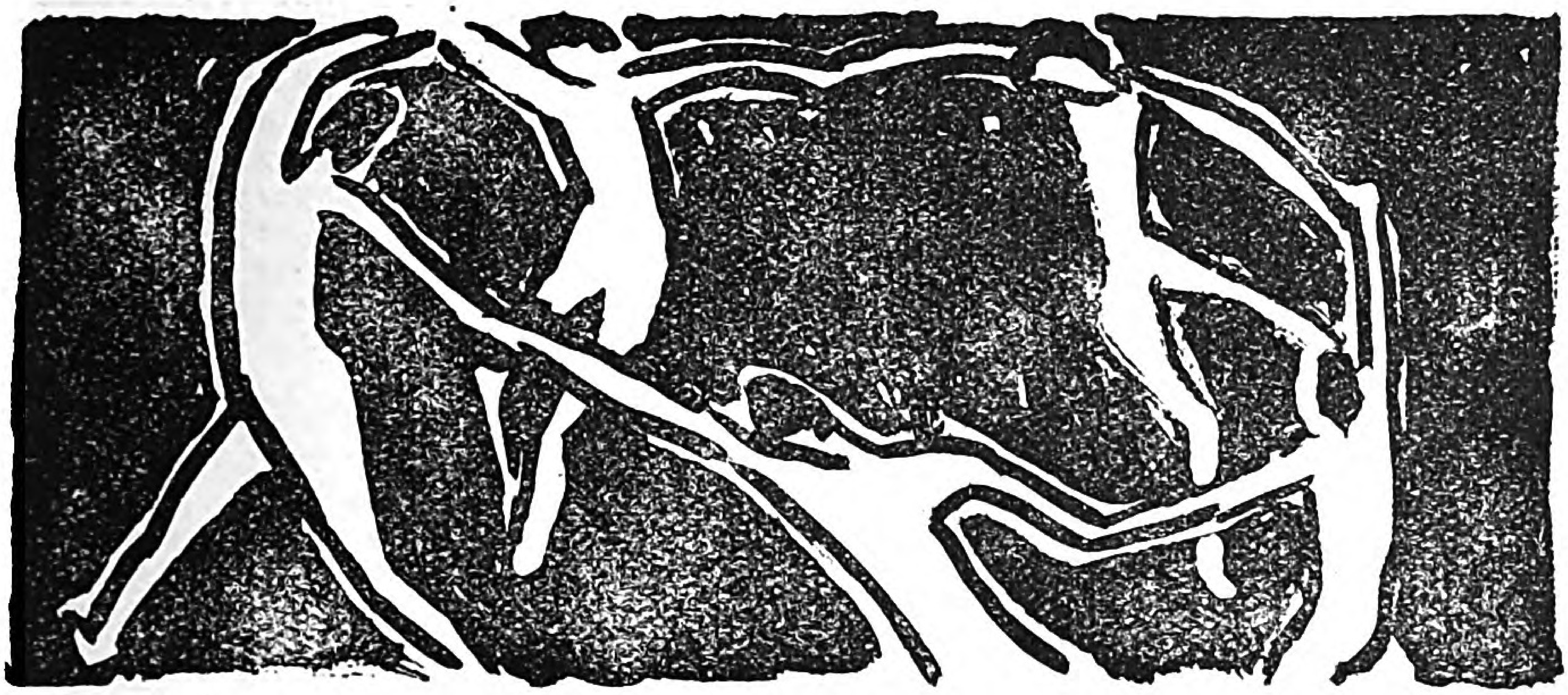
ラスコーリニコフが賣笑婦ソーニヤの足の爪先へ接吻をしたあの氣持、人類の苦腦の前に感謝するといつたあの氣持のわかる人にだけ、私たちは、すくなくも私だけは從順な女になれるのです。

日給七拾錢

松屋呉服店員　本田みよ子

きらびやかに着飾つた奧樣、現代的な裝ひをこらしたお孃さん、東京名所として見物に來たやうなお上りさんなどこゝのお客は實に種々雜多です、從つて私たちの仕事は從來のおたな者とは全然違ひますが、やはりお客と賣るものとの心理は働くもので、あれもこれもと有だけの品を手にとつてみた末に氣に入らないと不平顏をされる時くらゐいやなことはありません。今こゝは朝九時から店を開けてゐますが、私たちは掃除や何かで八時半までには店へ參ります、出勤は非常に嚴格で、入口と、事務室と主任のところと三度出勤簿を押さなければなりません。退けはお店を閉めるのが六時ですからどうしても六時半すぎです。それで一月のうちに休日が三度、給料は、小學校卒業、高等小學女學校出と色々あつて、同じ仕事をしてゐても初給が違ひます私は高等小學を卒業して、もう四年務めてゐますが私が入つた時は日給七十錢でした。大低三年目ぐらゐから月給になりますが、月給は初め三十圓くらゐで後は半年に一圓くらゐづつ昇給しまず。それに賞與が年に四回ですが高は約月給の一ヶ月分くらゐでせうか。

細かいことを云へば、電車賃に衣服――反物は幾分安く買ふことは出來ますが――草履などまで相當にかゝります。草履は一日履き通しですから、キルクの裏についてゐるゴムが十日しか保ちません。ですから大低二足づゝ持つてゐて交る〴〵直しにやるやうにしてゐますが――ですから働いたお金に、幾らかとかくの評判を立てられるのも無理はないでせう。併し、さういふのは極まれで、事實私の知つてゐる人々は皆眞面目に働いてゐる人達ばかり、風評のやうな事實がどういふ風にして行はれてゐるものか全く知らない位です。



月夜

英美子

1

秋だ
あの青かつた林檎のあの紅かつた罌粟のはなの
しんみりとしたお伽噺に
耳を澄まさう。

「王よ、妾が敵はこれに候」
妃は、美しい手で
傍の王子をひきよせ
ひしと胸にかき抱いて
接吻けた。



淡色のガウンをきた
今宵の月明よ
つゞけておくれ
私は
戀よりもなほ優しい對話が
もつときゝたいのだ

2

月の光は惜しいけれども
もう、窓をしめよう
髪をほぐして
好きで、すきでたまらない
コリント前書、第十三章を
胸の上にひらいたまゝ
穂花のやうに
眠り呆うけてしもうとは
神よ——
余りに美しすぎる
ひとりねの
秋がまゐりました。

古い旅嚢から



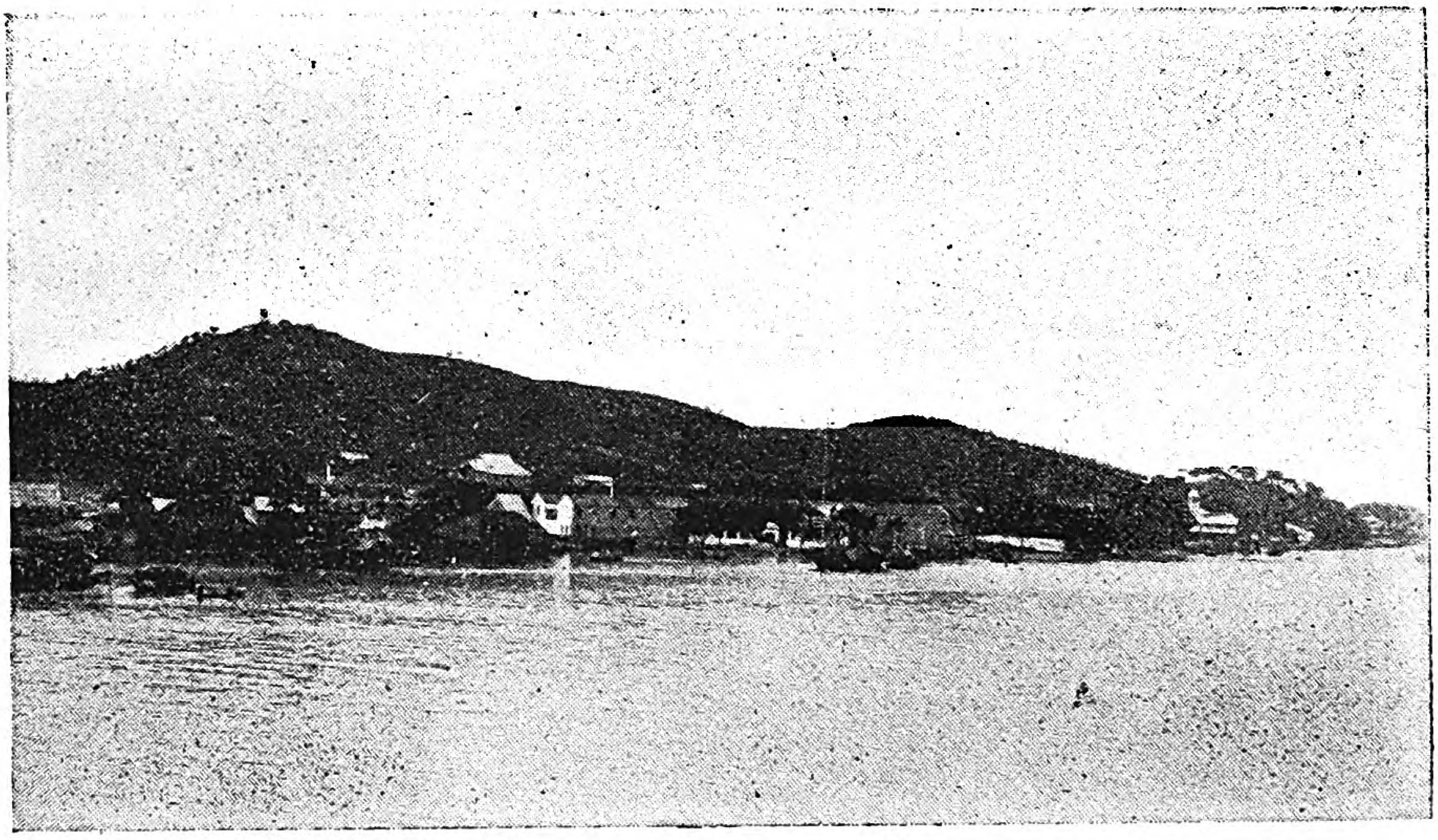
長谷川はる子

竹中繁子

女だてらに、と笑つて下さるな！　何しろ負けない氣の中には、持つて生れた茶目つ氣と、恐ろしいもので、ふだんの職業意識が何と言つても多分に働いてゐるのですから。

　南昌に行つたその頃は、誰一人として本當に會つてゐなかつた、疑問にとざゝれてゐた蔣介石氏に何とかして會つて見度い、その人の語る言葉を直接耳の底にやき込んで歸り度い、と考へては矢も楯もたまらず、孫文氏の未亡人宋慶齡さんと、その頃の武漢政府の左翼要人でつた司法部長の徐謙氏の夫人沈彬儀さんとその他の紹介狀三つ四つを後生大事に懷ろに納めて、漢口を立つて、排外運動の眞最中、楊子江の渡し舟の中で糾察隊にお金をゆすられながら、一つ談判が間違へば私達二人の女旅人はそのまゝコロリと舟からコロがし込まれないとも言へない危ない目をして九江に上陸した程ですもの。(南昌行きは、九江から汽車で七八時間の道のりなのですが、その當時の道中いかにも不安とあつて、態々と九江の大和久領事に思ひ止まらせられましたが、)廣東に行つた時にまたしても叛逆氣がムラムラと起つて、かねて聞き及んでゐた、中華民國革命の策源地黃埔の軍官學校參觀を志したのも無理がないのです。

　廣東總領事の森田寬藏氏は、初對面の我々さへ馴れ易い、何でも言へるやうなお人柄、それだけ無理な願ひをも私達に氣易く切り出させて、「それはよからう、婦人だけに却つて事は容易に運ぶかも知れない」と、贊成して下すつたばかりでなく、早速御自身總司令部に交渉に出向いて下すつた。「向ふでは非常に滿足してね、當日は先方でモーターボートを仕立てゝくれるといふし、晝飯は用意しておくから辨當持參に及ばないといふことだ、大變な歡待だ」といふ夢のやうないゝ返詞をきかせて下さつたのです。一ト頃は上海にあつた軍官學校の分校が、共產黨狩りによつて一掃され、その時發見された敎科書から、いはゆる危險だといふ思想をもつていかに學生らが中國の革命を志ざしたかゞわかつて、とう〳〵解散させられたとか、何でも非常に嚴重な秘密主義の校規を遵守したとも傳へられるその學校の本職だとして見れば、參觀不可能の危ぶみは多分にあつた。然しその頃擡頭しつゝあつた南方派の形勢や事情やをそれとなしに視察に行かれた佐分利さんが、外國人での參觀者の皮切りとして歡待された近い例



黄埔軍官學校全景

があり、つゞいて第二番目が私達、つまり婦人での皮切りをつとめたわけです。之に對する總領事のお骨折の重かつた事は改めて記すまでもありません。

それは丁度去年の二月七日のこと、民國では正月の六日といふ、どこの家も店もまだ爆竹の音に時々旅人の膽を冷させるお正月氣分たつぷりな時でした。そのくせ廣東政府は舊曆を廢して太陽曆にしたがふことに改まつたといふのですに、兎角長い因習を捨てかねる人情をこゝにも見たわけです。それで其日私達が嶺南大學碼頭からモーターボートで出たのが十一時少し前、珠江の水碧く滑らかに、涼しいと言ひ度い位の新春の風が和かに頰をなでゝ、黄埔までの下り一時間と十五分の航程を私達一行は短かい程に樂しみました。

軍官學校は言はゞ我が士官學校、しかしそれが中央軍事政治學校と名稱を改めて、名の如く軍事と共に政治を學ばせ、「これは何處の國にもない組織です」と南方政府をして誇らしめて居るのです。建物は、例の鼠色の煉瓦で外廓を繞らしてあるほか、内部は極く質朴な木造ですが、どこを步いて見ても塵一つ止めない淸潔さと、何から何までが實に秩序整然、むしろ嚴然としてゐるなかに、容易ならぬ活動と行屆いた訓練とが行はれてゐることを、驚きと共に感じさせました。人と人との交渉にも軍隊的規律の中にまことに自然な、自由な空氣の漲つてゐたこと、例へば將校と下士卒との間、教官と學生との間におのづからなる和氣を外から行つた者にすぐ感じさせることは、取りもなほさず人類の待遇に差別を挾まないこの學校の精神、延いては南方國民政府爲政者のモットーとして、北方人の羨望となつたゐることは敢て怪しむに足らない事でしたし日本政府の治下に甘んじない朝鮮人（彼らを被壓迫者として多數扱つてゐます）がこの學校に來て無差別に待遇されることは、待つた海路の日和よりも嬉しい事に相違ないのですこの精神の旺溢は、やがて革命に成就した日の世界の覇者を彼らに夢みさせてゐました。彼らは言ひました、「我々が革命に成功した曉には凡ての被壓迫民族を濟ふことに力を盡す」と、すべてこの意氣です。

この日の印象感想を書いたならはてしもなく長くなることを恐れます。こゝで認める男女絶對平等の權利とその主張、學校の沿革その他これらは他日にのこして、とにかく一つ二つを記して見ませう。がその日は宣傳部長の不在に、政治部主任の熊雄氏が代つて一日私達を引きまはしました。校長蔣介石氏の部下として要職にあるその人の恐ろしく雄辯な宣傳は、その日私達の同行者であつた若手の外交官をすつかり感心させて「僕も一年あの學校に入つて見たいなア、さもなけりゃ日本から誰か學生をあすこに入れて見るんだなア」とつくぐ\と言はした程きゝめがあつたのです。

こんな事を熊雄氏は婦人について言ひました。氏は一度日本に來たことがある人ですが『私はお茶の水の女子高等師範學校の卒業式に行つた事があります。その頃はまだ大隈さんが在世の時で、當日は丁度卒業生に向つて一場の訓話をされたのです。忘れもしない女子を外交政策に用ひる意味の言葉で、日本の婦人を代表するこの少數の婦人の責任がどんなに日本に對して重いか、それについては支那の留學生と宜しく自ら進んで結婚しろと說かれたのでした。大隈さんはかうして女子を外交政策に使はうとされたのでしたが、それは見事失敗に歸しました。なぜなら支那の日本留學生は皆日本に對して惡感をもつてゐる學生は日本婦人と結婚するものが甚だ少ない政府と政府とが合はない、これらは言葉よりも實證ではありませんか。そこで少數の女子では今は何の用にも立たない、全部の日本婦人が支那の婦人と提携しなければならないのです。」日本の覺醒した少數の女子、私の思ひなしかは知らないが、この言葉の中には我國の婦人の大多數は覺醒してゐる、お國の御婦人よりは一ト足お先きに絕體に解放されてトットと覺醒に大衆を急がしてゐますよ、といふ口吻が感じられたのです。

恰かも二月七日は南軍にとつての記念日でした。四年前京漢鐵路の工人が四十七人吳佩孚のために虐殺されて、それが北伐の動機の一つとなり、中國の自由平等をこれによつて知つたといふ北伐軍にとつては大切な日なのです。それでこの中央軍事政治學校の宣傳隊は三百人ばかりで手分けをして廣東市中に打倒北軍の宣傳に出かけたあとでした。怨みを忘れない魂は中國人の特徵だと私に想はせる事は、旅行の中で一度二度ではありません。意恨十年一劍を磨くことがむしろこの國が將來の大をなす所以ではあるまいかとさへ、兎角熱し易く冷え易い血を引いた私に深く考へさせたことです。「我國は阿片戰爭以來十四ヶ國からの壓迫を被つて來た、不平等な待遇も甘んじて受けさせられた。今や、今や立つて自主獨立の步みを確實にしなければならないとは男からも女からも途々きかされて來た語です。內と外とに向つてこの凝つた意恨の刄を磨がうとする中國人は、日本人のやうに順境に甘んじた忘れつぽさでは居られないわけです。二十一ヶ條を泣く泣く承認した國辱記念日は全國的に、五三十事件は上海に起つた虐殺事件として、六月二十三日は廣東で川を隔てゝ租界の英國人と戰ひ、多數の死傷者を出した日として、地方的に記念される日なのです。その中でも上海の五月三十日の事件は五三十公民學校、五三十何々學堂と一目にして市民は敎へられる記念事業ともなつて現はれてゐますし、廣東の沙基は六月二十三日路が俗名となつて租界と沙基をつなぐ橋の袂には御丁寧にも石牌に「勿忘此日」と彫りつけてあるのです。これならば三つ兒にでも自分の國と外國との間に起つたいきさつがわからずには居ますまい。かうしたねばり強さをもつてたゞひたすらに目的に向つて來たのです。

校内隈なくめぐつて最後に後庭に立ちました、後庭といつても墓場です。私達の立つ足の下、青天白日旗のコンクーリトで固めてある下には、五百余の革命の犠牲者が葬むられてあるときいては凄烈の氣おのづから身に迫るのを禁じ得なかつたのです。白く塗られた高い墓碑に夕日が映えて、眼下には陳烱明との戰ひに破壞された船一隻江中に半身を埋めたまゝ、宛がら北伐の士氣を勵ますかのやうに物凄い恨みを語つてゐるではありませんか私達は暗い氣持でそこに立つたまゝ、むしろ立たされたまゝ熊雄氏の日支友求のいかに急務であるかを例の雄辯で語りつゞけるのに耳を傾けるでもなく傾けぬでもなく印象深い一日を追想したゐた時に、そこに珍客が現はれた。花のやうに美くしい女性です。「我々の同志を御紹介します」と、聞けば上海から南方にかけて有名な女優揚耐梅、即ち革命のために藝術を捧げてゐる優（ひと）なのです。二七の記念日に餘興の一役をつとめる爲にそこに來たものでした。「どうか我々の間にかやうな有名な女優があることを、日本の婦人方に傳へて戴き度い」と熊氏は附加へました。こゝで出會つたのを記念にと一同で撮影をして別れたのです。

旅嚢の底におさめた記錄の中で、黄埔の一日は私に色々の意味から懷かしいものです。

北海道の旅より (1)

八木秋子

八月のはじめといふに、北海道の空はもう秋である、わづか海峽をこえただけで、空の色がいかにも北の國らしい深さを見せてゐる。眼の屆くかぎり、黄白い燕麥の穗波と青々した水田と、大豆と玉蜀黍の織布であつて、點々と、散らされた玩具のやうに牛や馬が原野にあそんでゐる。おほまかで悠々とした油繪である。

留萌の驛で乘つた青年がふたりあつたその話をきいてゐると、北海道に住む人の人生觀を、ほゞ知り得る氣持がした。郵便貯金は利息はほそいけれど堅いから、是非誰でも實行しなければならないものだ。子供が生れたら、その月から十錢づゝ貯金することにすると、二十歲の年にはいくらになる。男の子ならば學費にするか商賣のもとでに出來るし、女の子なら嫁入支度になる。

「月十錢づゝ。だん／＼殖やして行けば二十年には二千圓になるものなあ」

嘆息するやうにして、眼を輝せてゐるふたりの青年は、まだ三十を少し越した位の年配だつた。

札幌に一週間ばかり滯在して、町に出あふ女の人達を見ると服裝などは東京と少しもちがはないやうだけれど、表情の上によほどの差がある事を思つた、東京が、理智と、明敏な批評と多少人のわるい浮れごゝろを持た近代的な新聞記者の性格とすれば、札幌は勤直な勤人の人生觀であらうか。道で會ふほどの人が、表情の中に「安住」といつたものを備へてゐるやうだ、しかしこれは老境の安住ではなく、青年のいのりの心境であるかもしれない。

あらゆる感傷を排して、明徹な理智に時代の感情を嚙みくだいて、動亂の切ない苦しさの中に生きて行く都會。その惱ましさの中に、一脈の落ちつきと安心のある事を私は旅先で感じた。おどろくこともない、悲しむこともまた喜ばしいことも――自分だけの生活の中にはない。私はしつかりと生きぬいて行き度い。私はこのつよい欲求を、堅實な勞働堆積と、多少人道主義的感傷のある、美しい北海道の自然と人情の中で感じた。八・一〇



何故の死人舞踏（感想その三）

――三角關係の一端より――

生田花世

――三月十九日午前九時――

今日はいくらか氣がらくにくらせさうな氣がする。庭の草木をいぢることも出來さうな氣がする。町へいつて花を買つて來られさうな氣がする。弟の遺骨をお寺へおがみに行く。それから上野へ獅子を見にゆく。ほかにもいろ〳〵のことをして今日をくらして見ようと思ふ。

×

もう一人生きていゝ時が來たと思ふ。男性についての苦勞をしなくてもいい年齡が來てゐる、それを知らなければ私といふものはバカな女だとおもふ。もう今度の事件で愛慾の世界での全部的ないろ〳〵のものは吐き出して了へて、心も身體もアクのぬけたやうな氣がする。これで結句よかつたとおもふ。去るものは追はず。私には一人靜かな生を。

×

あの人の苦しさ……。すべてを投げかけてゐるその心持ゆゑ。破壞をさけない脫出人はたゞ悲しくながめやるより外はない。

×

離婚――休養――仕事。私の步いてゆくのはこの三事につきよう。碎けたものにかける執着は愚の外の何であらう。私はあの弟の遺骨を抱いてかへつて、それを埋め、故鄕の初夏を心しづかに味ひたいとおもふ。それがたのしみだ。あのふるさとの大河、みどりの山々、しづかな白帆、やさしい母、昔なじみの友……溫かい感情としづかな呼吸とはあの故鄕が私のために準備してゐてくれるものだ。かへつて行つて私は休養をする。あわてぬやうにまちがひをせぬやうに、良き自分一人に生きられるやうにしたい。『結婚』といふものは愛の毀れた時にはもう終つてゐるはづとおもふ。今日はもう『結婚の破棄』が公正にさるる時が來てゐると思ふ。

×

あつちはあつち、こちらはこちら。

狀態はわるくなつたのではない、却つて非常によくなつた。よろこびがいくらか分つて

来た。この今朝の心持。もう少しすればなほなほ心がらくになる。したいことは何でも出来る。行きたいところへはどこへでも行ける。さうなることのたのしさ。十五年間あの人をも私をもつないでゐた環が解けたのだ。二人とも開放されたのだ。この状態は決してわるくない。私も自由人、あの人も自由人、おお、自由人、それがたのしいことにおもへる。

×

どうならうともあの女と行けるところまで行くといふ考へを賛成しよう。私はかくべつ言ふことはない。二人は愛しあつたのだもの。先方の動静をもう少しまつて、あとをにごさず、きれいに別れて了はう。そして私は、なつかしい〳〵ふるさとへ歸つて了はう。あそこの肉親の温かい心の中で暫く休養しよう

×

――午後零時半――

家にゐると妄想を起していけないとかうおもつた私はよしに家のことをたのんで出た。そしてお寺にゆき、弟の遺骨におまゐりする。『こちらへ』とお坊さまに案内されて本堂わきの別室にゆくと、そこには高い高い大佛壇があつて位牌が數段數十、おびたゞしく並べられてゐる。大きい寺なので自然こんなにおあづかりの位牌も多いのだらうとおもふ。今その中央へすゑられた弟の白い布につゝんだお骨箱はまことにはつきりと浮ぶ。その白布の上のしづかなひるの明りよ。

燒香をすましてから心でおもふ。

『…弟よ、もう少しこゝで待つてゝおくれ、今に姉さんがつれかへつてあげるもの』

かうおもふとバラバラと涙が私の膝にこぼれおちた。いかばかりの思ひをもつてつながれてゐた心であつたらう…この私の心がこの故人に。いかばかりの期待と友愛とがこの故人のために私の胸の中を一杯にしてゐたことだらう。故人の心はしなやかで淺い緑の葦の葉のやうにデイリケエトであつた。（ああ私の線の太い心が彼を傷けること多かつたかもしれない）故人の姿は秋の夕の七日の月のやうに寂しくしかし優雅であつた（戀もなくしてすぎ去つたその短い生命よ）うつむくごとに眉へかかつた房々としてゐた長髪のみだれ…柔かだつた聲…消えてあと方もなきその呼吸、足音、咳…おもひ出さるるは、かず〳〵のありし日の言葉である。

『姉さんはお義兄さんのため一生、（温める人）としてはなれられぬ方だとぼくにはおもへますね。お義兄さんは（冷えるニヒリスト）だから…』

『お義兄さんは暗い人です。根本的に生を厭うてゐる方です。ただ姉さんの奉仕で、辛ふじて生にふみとまる位なものでせう。又或は、お仕事がうまくゆけば、いくらか生はたのしまれるでせう。しかしニヒリストはどこまでいつてもニヒリストです。そして姉さんはニヒリストではないのだ。そこにお二人のうまくゆかない點もあるが、又それだからうまくゆけるといふ事も第三者なる僕には考へられるのですよ』

『故郷へかへつて一人になつて、姉さんが幸福になるとおもつたら大間違ですよ。それは夢、バカらしい夢だからおよしなさい。どんなつらいことがあつてもそんな夢を育てていけないと、僕はおもひます。姉さんも生きられなくなるし、お義兄さんとてもさうです。姉さんにとつてはお義兄さんは一生の荷物――重荷といふことはよく分りますが、それはお義兄さんの方からも同様にいへることでせう。ニヒリストが生きてゆくといふことは大變な苦行なのですから』

あの人をも理解し、姉なる私をも理解し

かも自分自身いふところの冷えるニヒリストの苦行に當面してその青春を戰つた二十五才の死はあまりにも老熟しすぎてゐたやうな氣がされるのだ。

『まあ、こんなものだらうよ……からおもつて私は居ます。お前が私の膝であの最後の息を引取つた心持もかうだつたらうと。これでよろしいと思つたらしいその心持。私にはおまへの臨終の心持を今こそより以上解してあげられる。出來るだけしたのだ。そしてオール・オア・ナッシング……姉さんとても同じことよ。お前ばかりではないのよ。だから、うらみはのこさない……』

『水の上に數かくごときわざをして……』

こんなに思ひ思つて大佛壇のまへに私は長いこと眼を濡らして坐つてゐたが、おもひ直して立つ。

そしてお寺を出た。

×

『水の上に數かくごときわざをして……』

から心にくりかへしつつ、私は町を歩いていつた。そしてもうその心持は、あの猛々しい獅子なんかを上野動物園へ見にゆかうとおもふやうな心持ではあり得なかつた。はてしもないさすらひ心がわく。水の上とほくとほく消ゆる彼方へあこがれてゆく、私をのせて船はゆく、流れに流れる水の上を心も流れ、船もうごく。大空は雲、土地はみどり、しづかな人の居ない河岸の林の中のみちをあてもなく、ブラリブラリブラリとほく歩いてゆかうとさうおもふ心持にさそはれて了つた。隅田川へゆかう、そして河蒸汽にのつて、千住近くまでのぼつてどこまでも歩いてゆかうと私はおもひついて、エンタクをよんでそれに乘つた。

×

自動車をのりまはす女きちがひ！　ふと上野廣小路で、車の中で、自分のことをそんなに嗤ひたい氣持がした。

×

雷門のところで自動車はとまつた。降りてポカポカ春めいてゐる仲店のとほりを、草履も重く、病み上りの人のやうにうつろな心持で私は歩いた。人がぞろ〳〵と歩くので、誘はれて了つて私も歩いた。どこもかしこも身體が痛い。まづ、ぐるりと歩いてから、隅田川の河蒸汽にのらうとおもつていつた。すると貧しいみなりの汚ない顏をした女や男が端に立つて何か紙製のおもちやを買つてもらはうとして汚い手をふりまはし口々に叫んでゐる。これらの汚ない、貧しい老人たち、その貧しさ、汚なさが私の心に來た。それにしてもそれにもまして汚なく貧しいのだと自分のことがおもはれた。ぜに金にかへられないものを失つてゐるものをとおもつた。ひどい心の痛み！

×

もしも私がエンタクに乘つてこゝに來たことにより、めいせんの新しい着物を着てゐることにより私がこの人々よりぜいたくな女であるといふならばうなづく。この人々は、金も乏しく、着物も襤褸だし、その上に年齡からいつても、健康からいつてもわるい狀態だし、もとよりその心の狀態も傷き歪んでゐて、到底もつと悲慘だといふならばうなづく。たゞ私は、傍をとほる若くて幸福で豐かな人々よりはずつとこの人々に近いのだし、心の傷が今新しく大きいといふところからずつとこの人々よりも悲慘だとこんな風に考へたことになのだ。ひどい心の痛み！

×

人に語るべき事ではない。一人で、一人でとかう思ひ決して、家でゐる時はペンを執つてたゞわが心とのみ語り、外に出るにはたゞ默つてのみゐられるところへのみ歩いてゆく。この心の痛み！

×

ふと私の歩みは止つて、端の方にたゝずんだ。山門の少し手前の左側に掲札が目立つ、それにはかう書いてあつた。

（咲き終へぬれば墜つべき時は椿の花は自ら墮つ。あはれ人々よ。汝等もまた淫と怒と痴との三毒を捨てよかし、身を靜かにし舌を和げ、心の海に仇浪をたてず、世の魔に迷ふことなき、かゝる人々を寂默と云ふ。夜もすがら佛の道をもとむれば我心にぞたづねいりぬる、惠心僧都）

まるで私のこゝに來るのを待つて、ゐてくれたやうな法の言葉だ。まつたくとおもふより外ない心持。『これからは一人』とおもふ心持も『解放された』とおもふ心持も『故郷に歸らう』とおもふ心持もみなその寂默の道へではないだらうか。それにしてもいい法の言葉だとおもつて横丁の文房具店で小さい手帖と鉛筆とを買つて私は、屋臺店のこかげからそれを書きうつし、くちずさんだ。

『咲き終へぬれば墮つべき時は椿の花は自ら墮つ。あはれ人々よ……』

といふのがかなしく美しく胸にせまるのだ。あれも落ちた椿の花、これもとおもつた。

『自を靜かにし、舌を柔げ、心の海に仇浪をたてず……』

そんな風になりたい今ですと素直におもつて……。

春の太陽はあたゝかい。何かから私は亡父にあつてさとされたやうな心持。たすけられる。たすけられる！　と感じられたのである。

×

私たちもまた凡人凡女、煩惱の上から見れば同じこと、感情の世界は新舊を超越する。こんな風におもひつゝ觀世音に詣でる。觀世音への信仰の時々の出現は、私が母からゆづりうけてゐる根づよいものであるのだ。幼い時分の、母につれられての御寺詣で、その時分は母は父との相方の受難時代ではなかつたらうか、頑是ない私は母の袖のかげにたたずんでゐたが……。

『…………』

ありふれた默拜の言葉が私の心にも呟かれた。別るゝは宿世、いのるはまごゝろいかなる方面から見ても破壞のみちへすゝんでゆくとしか思はれぬあの人の無事がいのられた。死は死をさそひやすい、しかし弟のやうに死なずに生きてゐてくれるやうにとねがはずにはゐられないのだつた。

×

古い女心もとび出し、新しい女心もとび出す。あきらめに一歩すゝみ、執着に一歩かへる。心は刻々の悩みになやむ。裏にもなり表にもなる。燃えもすれば冷えもする。

×

いろ〳〵の女がいろ〳〵になやみ、いろ〳〵の心持をもつて、いかばかり多くこの御堂のまへにぬかづいたことだらうといふことを私は御堂の柱のところでおもつたことである。あまりにもダシヌケに生活の不幸がやつてくる。足そのまゝに地面が裂けて了ふかとおもふやうな感情の裂線の上に悶える時、理智はのがれ、痴情の油は燃えひろがる時、死ぬにも死なれず、生きるにも生きられぬ時人にも語れず、わが心またもてあます時、いろ〳〵の女が（又は男が）いろ〳〵になやみ、

いろ〳〵の心持をもつてこの御堂の下にいかに多くの年月を信仰し來つたかといふことを考へると、信仰なんかばからしいといふ風なことが、どうしてさう無雜作に云ひ切れよう。かうしたところがないならば、自殺狂人はもつと多く出來て了ふだらう。

×

私の母や祖母は今も何か困つたこと心配なことが出來ると四國のあの寺々を打つれ立つて詣で歩いたり、よくあたるといふ占、みくじを取りに歩いたりしてゐる。迷信といへば迷信、信仰といへば信仰、愛情の古い形といへばいはれる。子や孫の不幸不運を心配のあまりに二人の老女がさういふことをする。私も一つ、『私の身の上』を心配してやりたいものだそんな古い形でと思つた私。あまりものを悲劇的に考へたくないのだし、あたるも面白く、あたらぬも面白いと思つた私。こんなユーモラスな氣持で、私は『みくじ場』へゆく。若い坊さんががらがらとそのみくじの束のうづはをまはしてゐる。二三人、次々にもらうてゆく。私も貰はうとおもふが、なれないので一寸手が出ない。すると坊さんが、今もらつた人の次のを、私の前においた。さてはこれよ。凶か、大凶か……大凶でなくて何が出ると心におもふ。とにかく、それをもらつて觀音堂を下り、ブラブラ歩きつゝ開いて見る。(第九十四、半吉)とあるのだ。大凶と來ないのでフシギな氣がする。。

事忌二樗前語一

人防二小輩交一

幸乞二陰公祐一

方免二事敵交一

(ぐわんもうよろしからず。うせものいづべし。まち人きたる。やづくり、ひきこしよろしからず……)

×

『うせものいづべし』これが何がなく私には面白かつた。失せて了つたあの人が出てくるかしらと思つたりして……。

×

言葉をつゝしみ、交際に氣をつけよといふ封なのだ。ぢつと忍耐してゐよとこれもいふのだ。(陰公に祐を乞はば)といふことは何をさすだらう。女權高調といふことには反對してるのかもしれない。しかしとにかくケントウちがひはしたくないとおもつて、すべてを差控へてゐる今の私の立場は立派に出してゐるわけである。封は親切にも(敵交をまぬかれ、うせものいづべし)といふのだ。人のいいお爺さんがにこにこして『まあまあ御辛抱が大事ですよ……通り魔におそはれてるやうなものですよ……』と話しかけて行つて了つたやうで、可笑しい悲しい心持。

×

可笑しい悲しい心持で、白いまぶしい土の上を神經も感情もユラユラ陽炎のやうに揺れ合ふ感じで歩いた。ひどく疲れてポカポカと足許が定まらないがしかし心は明るい風になつた。そして

『……いたましき死人舞踏……』といふことがひとりでに心に出て來た『何故の死人舞踏だらう……』

あの人、この人の死人舞踏。それは自殺であつて見たり、戀愛であつて見たり、放蕩であつて見たり、外國行きであつて見たり、いろいろな形であらはれてゐる。女にもそれがあり、男にもそれがある。女の人のそれもいたましいが、男の人のそれもいたましい。

×

『かうするより外にどうしようがあらう……やりたいことをやりたい。迷ひとおもへても底まで迷つて行つてやる氣なのだ……迷ひがさめれば戀もさめる……』

『ゆるしてもらひたいとおもふだけだ……さうなるより外なりやうもないのだ。ぢつとしてゐられないかぎり僕の生存は暗い。ぢつとしてゐられないところからのあがきだ、いくらかは、戀といふものが僕の心を何らかにつなぎとめもしようかといふトーテンタンツなのだ……止めぬ方がいいだらう』

『迷へるだけは迷ひ、傷つくだけは傷つき、燃えられるだけは燃える、そんな風に生きて見ないではどうして生きたといへるだらう。今まで僕の一番しなかつたことを今度こそして見たい……ぶつかつて行つてみたいのだ。どうせ僕は敗北するだらう。しかし敗北してもよい。書齋で本を讀むよりもそれの方がずつとよいといふ氣がして來たのだ……』

そんな風に云つたあの人の言葉の斷片をおもひ出しつゝ、『うぢの里』にて中食する。

ひとりおさしみを食べお汁を飲んでゐるうちに出來るだけ明るく喜劇的に心を持ち直さうとおもふチエが出て來た。何でもない……』とおもふ心持。『うぢの里』を出てよしへのみやげの帶しめをもとめ、私自身にももとめ、ガラス瓶入りの女の子の豆人形を一つ買ふ。

『お人形はかあいいわね！』と思つたりして自分をおだてる。吉い、吉いといふ風に自分自身に暗示をかける。明るい暗示を。

×

『牛込の××町までね』

と船にのることをやめて、車にのる。エンタクは氣持よく一散にかへつてくれるのでホントに快い。

靑い丸顏のよしは、やさしく出迎くてくれて、いたはるやうにいふのだつた。

『今日はどちらへおいでになりましたか』

私？　あのね、あさくさの觀音さまへ』

『それはおよろしうございました……あさくさの觀音さまは、御利益があらたかでいらつしやいますそうですから……』

『さうだつてね……一體に觀音さまは私好きなの、私のお國の村のお寺が、和泉寺といつてね、そこは十一面觀音なの、私のことを母がいつも、その十一面觀音さまにたのんでくれてゐますのよ。としよりつてものは信心深いものだから……。』

『御信心はほんとに結構でございます』

『ほんとね……どういふわけか氣持が變りましたわ、私、明るくなつてるでせう』

『はい、昨日おかへりの時よりずつとお元氣でございます』

『……あの觀音堂の奧のくらい方へ、私の心のゴミをあづけて來たのよ』

と私はほほえんでいつた。

『お留守にお手紙がまゐつてをります』

とよしもほほ笑んでいふ。

『だんなさまからのやうで……』

『まあさう……』

といつて私は私のへやの机の前に坐る。机の上にはSからの二枚のハガキ、それから彼女の一通の手紙。ともに十八日のスタンプ、それは昨日なのである。私が上野で獅子を見た日なのである。

『あの日の二人……』

私は彼女の手紙とSのハガキ二枚とをぢつとうつむいて見つめた。

×　×　×　×　×　×

金色の日かげ

原阿佐緒

ゴツホのするどきまみにも似たらむかとたま〳〵は見る鏡のおもてを

狂人（きちがひ）とわれをのゝしるはこの世にわが夫（つま）のみなるがもの足らずと思ふ

氣がつけば齒を喰ひしばりてゐたりけり赤きカンナに金の日がさして

われを容るる狂病院の施療部はなきかもと思ひ今日は暮れたり

力まかせにうちくだきたき何ものかあり自（し）が肉體と氣づきし寂しさ

こを見よと何に叫けばむ尊まれて世に生くる人のまことの相（すがた）を

いくとせ掩ひ來たりしがいまこそあらはになりて悲しき安さあり

わだかまりを强ひておしのけ仕事にむかふひと日〳〵を尊むわれかも

人に徹（とほ）らぬまごゝろだにも保ちえで心足るとし生くべき吾かも

籠より出して餌（ゑ）をあさること知らざらむ鳥をあはれむに似たるみこゝろか

新居風景

中河幹子

うらの森にかなかな蟬のなきつぎて夕べはわびし椅子によりつつ

栗の花白く咲けりと眺めつつ下べくぐるに香の匂ひけり

月光のほのかに白き蚊帳のすみ吾子が坐り居り眞夜と思ふに

眼をとぢて坐りゐるらしき幼兒がすがたかなしもまたいねにけり

蚊帳越しに松かげ黑き眞夜のそら一人めざめてみつつわびしき

かなかなは音にすみなけりあかときとしらむ玻璃窓に近くゐるらし

子を死なせししんの弱りにやひととせのなまけかへりみさしぐましけれ

ひととせはわが背も病多かりしをのこは言にいださされども

×

なれたればつね思はねど人なかにたたする背子のいたく痩せたる

わが背子がとらす大食向ひゐてしみじみをかし痩せゐるになほ



吉田雅子

長流記（その二）

山田邦子

さうした勞れと寂しさを互に持ちこたへ兼て、のめりさうになる心をお互に寄せ合つてゐる二人の生活のなかに、戀愛の使者はさま〳〵の形をとつて現れて來た……。お慶さんにも佐千子にも……

「此間の晩ね、向ふの通りを散歩してゐると仕立屋の前に出たの、その家で裁縫してゐる男がどうも故郷で知つてゐる絲屋の淸ちやんといふ息子に似てゐると思つてね、見ると其男が「慶ちやんじやないの」つて出て來るの、やつぱりさうだつたのよ、相當な家だつたけれど潰れてしまつたんだつて…そしたらね一昨日の晩お酒を持つて慶ちやんと話すんだつてやつて來たのよ、をかしかつた……でも話をきくといろ〳〵氣の毒な身の上らしいの……ところがね、今朝此手紙が來たけれどどうにも讀めないの、尤も仕立屋に年期奉公に出たのだから本讀む間もなかつたから字なんか大抵忘れてしまつたと一昨晩言つてゐたけれど、これではいかにも解らないわ」

さう言つて實際字だか繪だかわからぬ片假名と平假名のごちや〳〵書いてある長い手紙を取り出して見せた。

「どれ…まあ讀んでみませうよ」

そして二人は困難して讀み出した。いろ〳〵と身の上のあはれな事を訴へてある事がどうにか判斷ついていつた。

……「けいちやんドウカフ、にナッテクレ」さういふ處に至つては二人ははたと行き詰つてしまつた。

「何でせうねフ、つて……」

二人は首をひねつてゐたがやがてお慶さんは急に手紙を投げ出して眞赤になつて笑ひ出したものだ。

『夫婦になつてくれのつもりかもしれないわ……』

二人は笑つて笑つて涙を流してしまつた。そして此あはれな仕立屋の戀は可笑涙と共に打ち切られてしまつた。讀者諸氏よ、此仕立屋の戀を直ちに戀と判斷つかなかつたとて此二人の女性を頭腦がわるいとは思はぬがよい、それは餘りに思ひもかけない男の戀文であつた、仕立屋の職人が、文字の書けない戀文を當時の女流作家に寄せたのであるから……。

佐千子の方には方で又いろ〳〵の渦が巻き起り來つた。毎日の編輯室は佐千子に無關心ではゐなかつた。某華族の殿樣があの婦人記者をも一度訪問によこしてくれと言つたとか言はぬとか何君が長田さんの家を訪問したさうだとか面白をかしく噂がのぼつた。事實物好きな富豪のなかには大磯の別莊へ遊びに來いなど長距離電話をかけてよこすやうな事もあり佐千子のまわりには漸く魔の手が遠まきにのびはじめた形であつた。

佐千子はさうした華やかな氣分を面白がりながらも自身をそれに投げ出さうとはしなかつた。ふわ〳〵した感情の底に固く眞面目な一點を握つてまだ見出せぬ高い夢に戀人を淸い身と心で待つ願望が續いていつた。

前篇で初臺の家を訪ねて來た靑年のうちで、E氏はT先生の玄關番で先生の姪に手紙を送つた事によつて破門されたと聞いた小說家である。E氏は二人が初臺の丘を下つて、西町と番町に住むやうになつた後も時折二人の家を尋ねて來るのであつた。

佐千子は初めどうも此靑年に好きでない氣持を感じた。ひどく物が誇張的に、やゝもすると藝術家ぶる時、ぞつとする程いやにさへ思へた。お慶さんにはじめ侮蔑的の感じで紹介された男である事が先入主になつていきなり輕ろく思へたのも原因ではあつた。

或る日彼は尋ねて來て四方山の話をしてゐるうちに佐千子は何となく彼の言葉に戀愛的口吻を感じてそれに觸れぬやうにつとめはじめた。彼は其時お茶うけに出した好物の大福餅の白い粉を口のはたにつけてゐるのを知らないでしきりに藝術家の戀愛を說いてゐた。男のくせに大福餅が好きだなども佐千子にはおかしかつた。

「だめだわ、口のはたに大福餅の粉をつけてそんな事を言つたつて……」

佐千子は心のなかでつぶやきながら知らん顏してきいてゐる。

「紙とエンピツをかして下さい…」

Eはかう言つて下手な字で何か書いて彼女の方に投げてよこした。

「貴女を愛してゐる」

とそれには書いてあつた、來たな、と彼の女は思つて驚かない。

「さあもう破滅だ！」

齒ぐきの根まで見える笑ひ方をしてEは更に第二の紙きれを投げてよこした。

「たゞ一度キスしたい」

それにも驚かなかつた彼の女は生意氣な氣持になつて

「女の二十一なんて大人ですわ」

と嫌厭な表情を露骨に顔に出してとり合はない。Eは立ち上つて彼の女の肩に手をかけると無理に唇を奪はうと迫つて來た。危機の氣轉で佐千子はいきなり寄りかゝつてゐた机に顔を伏せて袖で顔のまわりを隙なくとりまいて彼の唇が自分の肉體のどこにも觸れて來る事の出來ない身がまへをとつてしまつた。彼の女の着てゐた黄八丈の羽織が絹の冷たさで興奮した彼の女の顔に觸れてゐた。

極端な負けおしみを無力に傷けられた青年小說家E氏は蛇のやうな執怨な目で彼の女を睨んで歸つて行つた。

畜生々々……俺は女優に迷ふ純な青年の迷ひ心で魅せられたにすぎない……バザロフの如く暗く憂鬱な俺の藝術家的戀愛はもつと心の貧しい女に向つて語られねばならない……高慢女奴!

青年小說家はあらゆる罵詈と憎しみを彼の女の上に浴せかけて二日すごした。彼の女を傷けるさま／＼の小說の構想が霧のやうに後から後から浮んでは消えた。お慶さんに此事が知れては恥ぢに心が更に苦しむ、そこで二日目の夕方お慶さんを訪ねて行つた。お慶さんは何も知らないらしく平常の通りだつたからそこでやつと安心した。今日までに知れないなら大丈夫だ……と、がお慶さんが佐千子からさうした一切の話を聞いたのは其翌日の事であつた。

「さう……道理で昨日家へ來て何んだか上目づかひで私を見ると思つたつけ……」

お慶さんは面白さうに首をちゞめた。

此自惚づよい神經質な青年とは反對に、いかにも物にせきこまない、一寸日本人ばなれのした感のある一人の青年新聞記者は、同じく彼の女たちを初臺の丘の家時代から訪問してゐた一人であつた。詩を作り歌を作り小說も書くし俳句も作るといふ調法な藝術心境を持つてゐる青年であつたが、其頃日本の文壇の一方に火の手をあげたデカダン派の小說家たちと親交を持つてゐて、一緒に淺草の六區を遊び歩く噂は高く知れ渡つてゐた。此青年記者氏が初めて佐千子を訪ねて來た時には田舍出の佐千子は心で震へた程其人を怖れてゐたがだん／＼交際してゆくうちにどうも此青年記者は世評に聞くやうな、たとへば座敷の眞中に火鉢をわざとひつくりかへすとか、マッチをすつて障子に持つてゆくとかさういふ怖ろしい行爲をする人と違つて、どこか無邪氣な又憂鬱な、世なれない處のある新聞記者である事を感じていつた。たゞ其頃の或る新聞記者に通性である時々大膽な露骨な口をきく事が佐千子には親しめなかつた。

「Yさんは口だけが惡いのだわ」

佐千子は折にふれて心でかうつぶやいた。然し丘の家に遊びに來ても小說家E氏のやうに厭味な自己宣傳をするのでもなく、又藝術家を衒ふでもなく、女二人の生活をかき亂すやうな擧にも出でず、風の如く來り水の如く去るといふやうで、邪魔にならぬ訪問客とな

つていつた。とぎれ〳〵に話こんでゐて、夜更けの縁に露がおりてくる、柱によりかゝつてお慶さんと佐千子と代る〳〵居眠りをしてもまだ立たうともせず煙草を吸つて落付いてゐる…といふやうでも別に下駄にお灸をすえる程きらひな訪問客とはならなかつた。初臺の丘を下つてからも此青年記者は西町へも番町へも訪ねて來た。

それは十二月の寒い夜の事であつた。佐千子が机に向つて寂しい氣持で本を讀んでゐると

「長田さん！」

と表の通りで呼ぶ聲がする、佐千子の部屋は土塀を隔てゝ表通りに面してゐた

「どなた？」

佐千子は物なつかしい調子でそこの窓障子をあけた。白い程冴えた月がさしてY子爵の邸は名畫のやうに深く見える、

「僕です。Y…外を少し歩いてみませんか」

「良いでせう、ま、おはひりなさいな」

さう寒くありません、出てごらんなさい」

そこで佐千子は一寸顏をなほしてショールを持つて表へ出た。

此夜Y氏のかぶつてゐた帽子は異狀なもので、すぐに佐千子の目をひいた…猫か狐の皮でつくつたもので頂上のまんなかにリボンで結び上げてある二片のペラ〳〵した皮はリボンをといて下におろすと耳を被うて双頰を包むやうに出來てゐる古色蒼然としたもので、佐千日本にもういくつも殘つてはゐない和蘭陀渡來の物のやうにも見えた。

二人は電車通りへ出てからどこへ行かうかと相談した。

「淺草へ行きませうか」

佐千子は灯の明るいにぎやかな仲見世通りを想像して誘ひかけた

「今夜はにぎやかな處はやめませう、赤坂へ下つて一つ家でお汁粉をたべて歸りませう」

佐千子もすぐ贊成してそれから二人は現在の文壇の傾向などを話し合ふといふよりも佐千子がY氏に質問を發しながら歩いて行つた

「人の不幸を見て喜ぶといふやうなのがデカタン派の人々の氣持でせうか」

「そんな事はありませんそれは惡魔ですよ」

清水谷公園が目の前に暗く見えて來た。

「公園を通つてみませう」

さう言つてY氏は先きに立つて公園のなかにはひつて行く…晝も人の少ない山の手の多の公園…まして夜の靜けさは沈默の底を行くやうであつた。然し佐千子は何の不安をも持たずにY氏に並んで月光の道をふんで行つた。

「大へん靜かね、早く通りぬけませうよ」

「でもこゝで一寸休んで行きませう」

Y氏は池のそばの物古りたベンチに腰をおろしてしまつた。佐千

子も足が勞れてゐたのでそこに腰をおろして休んだ。月の光は常盤木の暗い繁りを通して寒く冷く二人に照明した。すべてが森としたもの丶底に頭をたれてしまふやうな靜けさであつた。

「行きませうか」

佐千子の聲がすつと流れて靜は動に變じやうとした其時はやくY氏の右手が佐千子の首を卷いた。

「かうして居ませう」

沈鬱な、とても戀を語る人の聲とも思はれない重い調子で短い言葉が佐千子の耳に聞えた時に佐千子は我にもあらず立ち上つてゐた。

「いけません、Yさん」

しかし佐千子は自分の聲が却つて輕卒に聞えて腹が立つ程あたりは困つた調子にてれてしまつてゐた…。

二人は行きがけの平和な親しい歩みにくらべて荷車が二つ並んで歩いてゐるにすぎない程有機的交渉の絶えた二つのもの丶並びかたで並んで無言のうちに再び麹町の方へ引かへした。電車通りへ出た處で立ち止まつて佐千子がまづ口を切つた。

「では左樣なら…又お遊びにいらつしやいな」

Y氏は寒さと感情のさいなみの爲に沈痛に赤くなつてゐる顔を一寸あげて默禮して向ふの方へ歩き出した。妙な帽子のリボンは夜目に暗くトンボのはねたやうな形にいつまでも佐千子の目に見えてゐた。

「ごめんなさいYさん、私は貴方が好きです、でも貴方と戀をしたり結婚したりする好きさとは違ふのですから…」

さういふ心持で佐千子もぐつと沈鬱になつて番町の方へ歩きだした。

…それにしてもYさん…

と彼の女の心はもう遠く〱歩いて行つたらうY氏の後姿に呼びかける…

「此後だれにプロポウズする時でもあの帽子はおよしなさいよ…貴方の男ぶりを三割がたさげてしまふ…それに何事も可笑しくてたまらない娘心はあの帽子を見ると笑ひ出さずにはゐませんから…」

それから三日程すぎてお慶さんが遊びに來た。

「昨日Yさんが遊びに來たの、何んだか調子が變だつた、何かあつたのぢやないの」

お慶さんはからかふやうな目で佐千子を見てゐた。佐千子は困つたやうな調子で、前夜の出來ごとをお慶さんに打ち明けたのであつた。

「それで私の處へ來た譯がわかつたわ…貴方の處で失敗するとみんな私の樣子を見に來るのね…私は貴女のお姑役よ」

お慶さんは姉さんのように佐千子を眺め下した。

人生挿話

雲を見る記

林禮子

雲が見える、この寐ころんた窓の外から。白いフワ〳〵と軟らかさうな異人の横顔を思はせる一塊が、西へ西へとゆつくり歩いてゆく。

いつだつたか、遠い遠い昔、やつぱりこんな雲を見たことがあつたやうに思へる。誰かと二人 ひろい戸山が原みたいな處を歩きながら、碧空の彼方にフト見出したのであつたらうか、或ひはまた、やつぱりかうした窓からであつたらうか。だが、とにかく、こんな穢い煤けた硝子窓ぢやない、もつと小粋な圓窓か何かに寄りかゝりながら、そして窓の下には、萩の若葉がゆら〳〵とゆらいでゐるやうなさうした處であつたらしい。

この陋屋の窓から、毎日雲を見る事は、私にとつて、うれしいことの一つである。

どつかで讀んだ獨房の中に居る四人が、ふと敷石の間から伸びて來ようとする、一本の草を見つけて、その草の成長に、自分もまた生き由斐を感じたといふのと、丁度同じやうな氣持で。

思へば、もう疾うに死んでゐてもいゝ筈の私がかうして生きて、この窓から雲を見てゐるといふ事が、奇蹟に近く思はれてならない。

ともかくも生きてゐる事は、惡くはないと思はれる。

垣根の朝顔の蔓がヒヨロリ〳〵と伸びて、よく見たら、もう蕾がついてゐるかも知れない。こやしをやらないから、まるで肺病やみみたいな葉の色ではあるが、でも日當りの好いせいか、去年はかなり大きな花が咲いた。絞りだの撫子のやうな花もあつた。

私は花が好きだけれど、あんまり、いぢくる事を好まない。自然にうつちやらかして、伸びはうだいに伸ばしたのが好きだ。もともとこの朝顔も自分で植えたのぢやない。誰か先に住んで居た人の植えたらしい、種がこぼれて去年も今年も、ひとりでに生えて、ひとりでに垣根に卷きついてゆくのだ。

ちよつと、よそ見をしてゐるうちに、もう異人の横顔はくづれて、風が出たのか行き脚ははやく動いてゆく。

やがて夕方になつたら、この雲も赤や橙の絢爛な夕燒の色に變るだらうか、だが私の心を一層つよく引きつけるものは、あの今にも雨になりさうな、黒雲の恐ろしいたたずまひである。

もや〳〵と濃い淡い灰色が、沸きかえるやうに蠢めくとき、私はぞつと惡寒をおぼえながらも、この雄大な自然のうちに、こゝろよい戰慄をする。

丁度、私のある過去の斷片を思はせる。ほんたうに、あの頃の生活は甚しかつた。よく私のやうなものが、あゝして生きてこられたものと 思はずにはゐられない。

それを思へば、この二三年の生活の何といふ無事で、平凡なことであらう。だが私には、やはりこれでいゝのらしい。あの頃の一日の小使ひにも足りない金で、私は一ケ月の生活をしてゆく事ができる。人間はどんなにしてゞも、生きられることを、しみじみ思ふ。

さうして一人住むといふ事にも馴れた。この陋屋に一人居るといふ事が、はたで見るほど寂しくもない、不自由でもない。(一人のはうが氣がそろつていゝ)まつたくだと思はれる。

　こんなに足ることを知る氣持になつてしまつたのも、やはり年のせいであるかもしれない。

　いつだつたか私の新しい友達が、と云つても、これはまた私と似ても似つかぬ、ブルの若旦那が、

『さう云つちや、なんですが、隨分よくないお住ひですね』

　とこの私の室を見廻して云つた。よくないとは、わるいと云ふことに、ほかならない。

『えゝ、まつたくですね。でも人間に似合つてますから……』

『似合つてるつたつて貴女、これぢやあ、あんまり、ひどすぎませんか』

『さうですかね』

『さうですとも。それとも粋狂なんですか。かういふ綺麗でないところが、蟲がお好きになるのですか』

『ホヽヽいえ、決して。……きれいな大きな家はようございますわね。やつぱり凡夫の淺ましさでね。……たゞ、できないから、しないと云ふまでの事ですよ。竹の柱に茅の屋根なんてそんな道樂はうちません。だいゝち一人ものがね……はじまらないぢやありませんこと?』

『ハヽヽ僕もこゝへお伺ひするまでは、貴女を、ひとりものとは思つてなかつた』

『さうですか』

『あんな小説をお書きになる方がお一人でおいでの筈はないと思ひました』

『どつちだつて、いゝぢやありませんか、他人のことを』

『ところが僕は、ヘンに人の事が氣にかゝる病ひがありましてね』

『困つたものですね』

『しかし、病ひとあればしかたが無いでせう。ところでゞすね……そこで……一つ御相談があるんですが、病人に逆らはないで、聞いて下さいますか』

『伺ひませう』

『あの……僕の太田の家ですがね……あれはなか／＼、この不景氣で買手もなきや、借手もつかないのですよ。……どうせ、あゝして空けておくより、あの家に貴女に住まつて頂けたらと、思ふのですがね』

『太田の？　あの馬鹿々々しく、大きな家ですか』

『はあ』

『あんな寂しい、あんな廣い家にポツンと居てもね。……お金でも有るかと、狼狽て者の泥棒でも這入られたら、災難ですわ』

『ハヽヽヽいゝぢやありませんか。泥棒が這入つたつて騒ぐ必要はなし、ぢつとしていらつしやりや　向ふであいそをつかして、出ていつてしまふでせうよ』

『それもさうですかね。でも、もし借手か買手が有つたら、どうなりますの。追出されるのでせう』

『その時にや、また、その時で何とでもなりますよ。御不自由はかけません』

『さうですか。ぢや、さうしてもいゝけれど、何となくお氣の毒みたいな氣がしますわ』

『僕にですか』

『えゝ』

『それは、すこしも御遠慮なく、僕のはうから、お願ひ申上てゐるくらゐなのですから、――そのかはり、僕のはうからも條件をつけさせて、もらふ事があります』

『何ですか』

『……猫が居るでせう、こゝには』

『えゝ、居ります、みんなで五匹』

『五匹？　多いですな』

『だん／＼小供を生みますから、まだ殖る見込みですわ』

『弱りましたな。どうも猫を五匹も飼つてる人を、見たことあない……』

『私が猫を飼つたつて、あなたが、お弱りになる必要はないでせう』

『イヤ…しかし、襖を破ぶくでせう。柱で爪を研いだり…』
『そのことですか。ホヽヽ、しかたがありませんね、畜生のことですから。云つて聞かせても解らないし…』
『何か、檻のやうなものをこさへてその中に入れておく譯にはいきませんか』
『さあ、猫を檻へ入れて飼ふつて話は聞きませんわ。そんなことをしたら猫が健康を害しますわ』
『でなきや、すこし、お嫁にやるとか、養子にやるとか、せめて一二匹にする事は、できませんかねえ』
『さあ…よそへはやれませんわ。もつとよく教育をしなくつちや、人様の中へは出せません』
『ウフツ…眞面目で申上てゐるのですよ、僕は』
『だから、私も眞面目に…』
『まるで猫婆さんでゐらつしやる』
『えゝ猫のはうが、人間より交際ひいゝから…』
『イヤ、どうも…』
『嘘だと思つたら、ようく猫を見てゐてごらんなさい。可愛いものですよ。一匹だつて、手離すことができるものですか。それに、みんな拾て猫で、私のところへ迷つて來たのですもの。こゝへ來るまでには、どんなに苦勞をしたらうかと、それを考へたゞけだつて泣けてきますわ』
『へえ！』
　あきれたやうに若旦那は私を見た。私は立つて堺の襖を開けた。さつきから次の間に私の聲を聞いて、襖のそばにさわいでゐた彼女たちは、開けるがはやいか、ぞろ〳〵とやつて來る。
『イヨウ、驚きましたね。オヤ跛ぢやありませんか、この赤猫は』
『えゝ、それが一番可哀想なのです。私の處へくる前に、きつと小供にでも石を、ぶつつけられたのですね。この邊には惡い小供が居りますから…來た時には、もつとひどい跛でしたわ。やうやく、これだけに癒つたのです』
『フツ、このぶちは片目ですね』
『えゝ、それも、やつぱり、いぢめられてなつたのか、それとも生れつきなのか、犬猫病院へつれて行きましたが駄目でした』
『へゝえ…いよ〳〵もつて恐縮しました。猫屋敷…いや、化猫屋敷ですな』
『化猫屋敷の姐御ですか』
『はあ、いや、まつたく…』
『金ちやん、凸ちやん、重いぢやないの。そんなに大勢のつて來ちや、堪らない』
私はいつの間にか膝の上に集まつてきた猫たちに云つた。
　跛の金さんは膝の眞中に大趺座をかいて、片手でクル〳〵と今顔を洗つてゐる。凸さんは今ゴロ〳〵と喉を鳴らしながら、目を細くしてゐる。
　若旦那は呆然と猫の群を見てゐたが、
『イヤ…どうも、飛んだお邪魔をいたしました』
と急に思ひついたやうに云つた。
『オヤ、お歸りなのですか。まだ、およろしいでせう』
『イヤ、急に、ちよつと用事を思ひつきまして…』
『さう…ぢや、おとめしませんわ。あの、さつきの家の話は、どうなつたのですか』
『どうも…その…』
　若旦那は頭をかいた。
『破談ですか』
『…また、いづれ、伺ひます。その時に…、ぢや、失敬」
　若旦那は周章てたやうに立上つて、玄關の障子を開けると、いそいで下駄をつつかけて、
『さよなら』
ともう一言、格子を開けて出ていつた。私はこみあげてくる可笑しさに笑つた。どこからだつて空は見える。私は此家でちつともかまやしないのに。

ディユーゼ



遠近

シヤポー

久しく人を避けでヴイトリアーレに閑居してゐたガブリエル、ダヌンツイオは、最近追憶の一書を現した。題して「睫なき眼の友」といふ。彼は此書を、かつての愛人、エレオノラ、ディユーゼに獻げてゐる。

彼は又彼の「死の都」を演じたイルマ・グラマチカ及びエムマ・グラマチカに祝電を送り、二人の爲に何か美しい贈物をしようと約束してゐる。どんな悲劇を次に彼は書くのか。——伊佛の藝界はもうその悲劇の出生を待ちかねてゐるやうである。

ディユーゼの名を出した序でに彼の次の、——或ひは數人目の愛人イダ・ルビンシユタインを此處に紹介しておから。彼女にはもう若さや温かみはないが、何か完璧な美を彼女自身の肉體に、わけてもその四肢に持つた女優である。私は彼女の「フエードル」を巴里のオペラ座で觀た。ダヌンツイオは舞臺稽古に立ち會ふ筈だつたが、開演の當日まで姿を現さなかつた。おそらくは飛行機で開幕前後に、——巴里の社交人種はそれが見たさに競うてオペラ座へ集つた。が彼の棧敷は勿論ハネまでからつぼだつた。

地下鐵道を取扱つた小説が初めて巴里に現れた。「メトロの中の小競合」作者はピエール・グラッセである。本は勿論まだ來てゐないし、紹介にも筋は書いてないからどんなものだか一向判らないが、まさかマツカレイの「地下鐵サム」の眞似でもあるまいと思ふ。

某日の「コメディア」の第一面第一種に「トキオの虹、イクマ・アリシマパリに來る」とやらの見出しを發見した。何の氣なしに讀んで行くと、二科會のこと、「白樺」のこと、有馬に三兄弟あることなど、なかなか委しく書いてある。長兄タケヲは「或女」の著者、サトミ・トンはゲイシヤ小説の、——私はどきりとしてすぐ筆者の名を探したキク・ヤマダとあるのを見付けて、ハアと長い息を吐いた。

前號にスル・レアリズムの映畫のことを、佛蘭西製のやうに書いたが、あれは獨逸のものだとあとで判つたから此處に訂正しておく。尤も歐洲では金缺がもとになつて、役者や監督が向うへて行つたり此方で仕事をしたりしてゐるから、何處のものとはつきり定めることは出來ないさうである。此處



イダ・ルビンシユタイン

ご挿入したブリギッテ・ヘルムの新映畫にしても、「スイネマトグラフイ・フランセーズ」誌は、一見佛製映畫の體裁で紹介してゐる位である。(勿論見る眼が素人だから欺されるのには違ひないが。)「危機(クリーズ)」といふ題の語る通り、結婚生活の危機を取扱つたもので、筋はよくある映畫の型通りといつた感じだが、役者がいゝし、それに相當綺麗な場面もあるらしいので、早く見たいやうな氣がする。



歐洲の金缺は映畫の出生を困難にするばかりでない。名畫や稿本がどしどし米國へ運ばれて行くのは、今に始まつたことでもないだらう。最近ルソーの「ヌヴェル・エロイーズ」の稿本が、五萬五千法で一米人の手に落ちた。此價格は決して不當のものではない。それにその米人は、同價でゆづつてもよいとさへ申し出て。が、ジャンジャックを市の誇りに數へてゐるジュネーヴには、五萬五十法で引き取らうといふものが一人もなかつた。

泰西女人藝術きゝ書き

ハルコー

今年の佛國翰林院(アカデミイ・フランセイズ)の二つの文藝最大賞のうちの一つ、プリ、ド、ロマンの賞金五千フランは、とうとう今年は婦人作家が獲得した。作家としてはもう老大家のジャン・バルド夫人のごく最近出したばつかりの、そして大變評判のいゝ『アルビウの女王』といふ小說に與へられた。

此の人の作物の特相(パテティク)は極端なまで力強くてそして感動的だ。個性描寫も無論しつかりしたものであるが散文ではなく詩で描き出した風物なぞにも魂をつかんだ隨分いゝものがあるらしい。この人はやはり先づ初め詩で認められた。フランシス、ジャムなどもその詩については感動的な言葉で書いて居る。他の批評家たちも偉きい、そしてノーブルな獨創を持つ作者だと譽めてゐるし、多くのその作物は金色のばらの光りで映えてゐるやうだそうだ。



マリー・ルフラン

こうした光榮は過去にも度々持つてゐる。一九二三年にも最後のノースクリフ賞を小說で、またずつと前の一九一一年には翰林院からその詩ですでに賞を得てゐるしまだ他にも賞を得た。詩も小說も澤山公けにしてゐる。

若い連中の方では去年ヴイ、オーローズ賞をその小說でかち得たマリー・ルフラン孃が『砂丘の上のポスト』といふ小說を最近發表して、大分これも評判になつてゐるらしい。描寫よりは散文的だがちよつと新感覺派風なスタイルである。中々人をあつといはせる性格分解をやつて新鮮で面白い。より以上の藝術的批判はおいて、フランスの新進女性を單にはつきり我々に見せてくれる丈でも興味がある。折があつたら少し作物を紹介したいと思ふ。

小劇場「眞夏の夜の夢」

岡田八千代

帝劇で催された築地小劇場のシエークスピアの「眞夏の夜の夢」を見た。全體にサラリとして氣障つけのなかつた所は、素人芝居の連中に達者な人が廻つて、戀人達に新進が扮して懸命だつたからであらう、然し南、伊達、楠田、三氏の體格の細くて小さい所は、斯ういふ劇には如何にも弱々しく見えた、高橋豊子氏のヘレナは近頃での出來だつたが、貴族の娘としては品が無かつた、だが岸輝子さんのヒポリタと共に付鼻としたのはあゝいふコスチウムをつける役として當然だつた、だが、これは自分で思ひつくのか、注意されるのかと思つて、私は一人で氣を揉んだ、兎に角、豊子さんは築地へ這入つてから平行の時の娘に次ぐ出來だつた、輝子さんのヒポリタは大詰めで腰かけてから立派に見えた。南氏のシシャスは、痩せてゐるからといふ丈でなく、扮裝が如何にも安つぽくて貧弱に見えた。汐見氏の大工、小松氏の指物師、清橋氏の織屋、友田氏の風櫃屋、薄田氏の鍛冶屋、三浦氏の裁縫師何れも車輪ではあつたが厭味にならなかつた所は流石に老巧な方々のお揃ひだからだと思つた、殊に汐見氏が、シシアス邸での口上から、後見の工合、如何さま嬉しさうで面白さうで、今度の芝居は此連中で、隨分引き立てられて居た。丸山氏のオベロン、近頃になく、すつきりとした形であつた、だが訛言のひどいのは馬鹿に耳につく、氏ほどの熱心な人がなぜもつと訛を直す事に懸命にならぬのかと思つて不思議に思はれる、例へば、はな（花）といふ言葉にしても、ば、な　とはの字にアクセントをつけて言はれるとがつかりする、一寸少しピアノのキイを叩けば二三度で覺えられる筈だのにといつも思ふ。東山千榮子さんのチテエニヤ　妖精にしては肉體美があり過ぎたが兎に角、日本人ではなか／＼痩せてゐては形が出し難いから、少し人間味は勝つても見た眼の立派なのには一寸この人に勝る人は少ないであらう、村瀬幸子さんのパックはなか／＼勇敢に思ひ切つて演つて居たが、聲に巾の無いのが損であつた、夫と背中を丸くした形がわざとさうするのでなくやゝ猿のやうに見えたのは、足の縮め方が惡いのかもしれない。然し動き詰めの大役で定めし勞れる事であらうと思つた。

音樂も歌も大變に氣持が好かつた、が間々へ這入る白のテンポがなんだかまだ音樂としつくりしなかつたやうな氣がした。

明治座の文樂

演舞場で四の替りを打ち納めた文樂は、明治座で引き續いて、「忠臣藏」の通しを演じた。今度の興行で新進で名を上げたのはつばめ太夫だと思ふ、源太夫の三味線が惡くなつて冴えなくなつたのに引き替えて、此人の三味線を以前源太夫を彈いて居た勝市が彈いてゐるだけでも此人は大變な得をしてゐる。樣子はまだ／＼若いが、聲に巾もあり、りよも利き、つぼも外れない、此前の紙治の前の「ちよんがれ節」の間なども、乘りさ

うな調子に乗らず、自然に、押えてつぼを外さぬ所、間造の人形の傳界と相まつて結構であつた。今度の殿中も、師直に、付けたやうな厭味がなく、若狹之助の一本氣の所も力があり綺麗に語れた。八段目も結構であつた。今度は病氣の故もあらうが古靭が此前の紙治も、今度の六段目もどうも氣勢が上らなかつたのは殘念であつた、夫に引替えて、津太夫は、此前のすし屋も前は兎に角として奥は立派であつたし、今度の九段目にしても貫目のある所で、間の長い所や、聲の屆かぬ所も差し引いてし



山本安英嬢のヘアミヤ

まつて申分無いと言つてさし支へ無いと思ふ。五段目の口を語つた播路太夫といふのは達者だが綴太夫に似た唾が溜つたやうな聲が氣になつた、奥の桐生太夫は此前の野崎の口よりは厭味がなく、好い出來であつた、大隅太夫は今度よりも前の野崎の方が好かつた、隨分外れもし、細かい節の廻せぬ人であつたが、野崎を聞いて酷く見直してしまつたが、四段目などは難かしくもあらうし榮えない故もあつたらうが、七段目の平右衞門と來ては、丸つきり駄目であつた、絃と離れて語る語り難さもあらうが、一寸手に負へぬ程外れてしまつたのは氣の毒だつた。人形では玉德の若狹之助が目に付いた、扇太郎といふ人の觀世は前も丁寧で好かつた。紋十郎は小浪が本役で道行は文五郎と揃つてよく踊つた。玉次郎の本藏は九段目の「山科」で上手の柴折門の外に立つてゐる間も立派だつた、榮三は勘平よりは由良之助が好く、殊に城外で「これ見られよ」で蹲居んで見せると、諸氏の提灯が後と左右と半圓に由良之助を取り圍んだ形は大變に面白く思つた。茶屋場では「江戸三がいへ――」の所が九太夫を馬鹿にしてるといふ意味でなく、何となく悲痛に感じられた所が殊に好かつた。文五郎は、相變らずよく呼吸をする人形を遣つてゐる。門外のお輕はや﹅蓮葉に、身賣りのお輕は世話女房になり切つてゐる所、茶屋場のお輕に色氣のある所、何れも遣ひ分けてゐると思つた、道行の戸名瀬の踊りは手に入つたものだ。この人のかういふ役でいつも人情のある所は、お輕でも母親の髪を撫でつけてやつたり、戸名瀬でも指に唾をつけて娘の鬢のほつれを上げてやる所二人顏を見合して、うなづきあつて話してる所などは言はれぬ優しさと人情の染み出してゐる所に心を曳かれる。（八月三日記）

時雨さんの顏と築地小劇場の山本安英さんの顏とはよく似てゐる。

私は山本安英さんを悲劇よりも喜劇に向く人だといつも思へて仕方が無い、安英さんの様な眞面目な癖に極自然なユウモラスな所のある女優さんは少ない、只惜しい事に丈が足りない、どうせ時雨さんに似るなら顏だけでなく、丈の高いところも似ればよかつた。（八千代）

×

生田花世女史のところに聲から物言ひまで女史そつくりの女中さんが居る。ところで最近、支那で三十前の婦人に斷髪令が出たせいでもあるまいが、女人藝術社の誰彼が揃つてボブになるので、その瀬踏みをして花世さんより一足さきに女中さんの方が斷髪で、洋裝?になつてしまつた。花世女史もそつと洋裝になつて見たら、御良人から子供のようだ、といはれたさうである。さて、あの大きな丸めた毛だまはどうなるのだらう。（小雀）

文藝筐鑑（三）

生田花世

佛蘭西製だといふ黄ろい厚い幕のそばの机の上に、片上伸氏の遺著『露西亞文學研究』の書を据ゑてからのこの十數日、「ロシヤ無產階級文學の發達」「ロシヤ精神發露としてのボリシエビイズム」「現代ロシヤ文學の印象」「革命前後に於けるロシヤ文學の主潮」「新時代の豫感」「革命後のサヴエート文壇」等をやうやくにして讀了することが出來た。ところでこれらの項目は、今年の春に讀んだクロポトキンの『露西亞文學講話』と連絡し、呼應し、關連して、かなりはつきりと私の頭の中にロシヤ文學新古の潮流を理解せしめるものとはなつた。ずつと前、『ロシア文學研究』といふに、『ロシア文學への感謝』といふ小文をかゝげた私のロシア文學への理解は、何といふ幼稚なものだつたらうと今一入におもはれる。

繰り返して言ふが　ロシアは初めから、死ぬべき運命を有してゐた。自から破壊すべき運命を有してゐた。自から破壊し、自から殺すことによつて、はじめて自から甦り、自から生き、自から建造するに至るのが、ロシヤの運命であつた云々（「否定の文學」より）』『繰り返して言ふ。一人のエウゲーニーは一夜の追跡で終るかも知れない。しかしエウゲーニーは一人でない。あまりに多過ぎるほどのエウゲーニーがゐるのだ。しかして、これを追跡するピョートルは、――國家の威力の象徴は、いつまでも一人だ』（「平凡人の反抗」より）

遂に多數のエウゲーニー（プーシュキンの作中の人物）が、あの大革命を成就してから千九百二十一年の新經濟政策前後を通過し、あるひは、通過し得ず、又あるひは傍觀しつゝその何れもが、「およそ生命の感じはそれが緊張した境に在れば在るほど、直接な、鋭敏な、必死なものとなる」その各人各個の生命感に立脚していつたところの時流の姿、又未來派文藝をも、舊時代の遺物とまで見なして、更に、サヴエートロシヤ文學らしい文學を將來に建設せんとする最近の積極的蠢動をまことに理解しやすく、しかも讀み心地よく（このことこそこの書のねうちである）説明し、啓蒙してゐるのがこの片上伸先生の『露西亞文學研究』の功績である。何人もこの書に親しむならば、まことによく這箇の事情を知悉することが出來る。宣傳的に書かれてゐる書に對しては、人間性の底にねざすある種の反抗がわきやすい。しかしこの書には、さういふあとがない。宣傳らしからぬ宣傳こそは眞の宣傳であらうといふことすらおもはれた位である。それにつけても著者片上伸先生の逝かれたことはまことに突然の驚きをさへ附加して私の心にいろいろの事を思ひ出さした。十七八年前、『女子文壇』の訪問記者として柏木のお宅に先生をたづねた時、先生は黒漆の髪その青春の輝きをもつ紅みを帶びた双頰、みるからにハツラツとした感じだつた。ラフカジオ、ハーン先生の随筆を好いてゐるといふことがその時の話題であつたりした。あまりにも惜しい先生の死だとおもはれて仕方がない。去年の

秋、秋田雨雀先生のロシヤへの送別會の時お見掛けした時先生は實に愉快さうだつた。(露西亞文學研究——三圓八十錢——第一書房)

ヤーコウレフ作『十月』の讀後感。

『私は此の書で市街戰といふものの鳥瞰的な景況を味ひ觀ることが出來た。恐怖の市街、血の市街、火の市街、かぎられたる區域での戰鬪…。今考へて見るのにこの『十月』でも又前に私の讀んだ世界大戰をとりあつかつた『クラルテ』でも女性なる私にとつては、何だかその情景が理解に遠い感じを催す。血、呻き、銃聲、さうした戰爭文藝に對しての受感能性はたしかに女性と男性とはちがつてくるのだらうといふことがおもはれた。どちらかといふと私は戰爭文藝は好まない。たゞ殘忍をいとふ心が湧き平和をおもふ心がなほもつよくなるのに役立つ意味でのみ讀まるる。

かの多數の若い逞しい男、かの貴重な生命のいくつもがあだがも切られる人參か馬鈴薯のやうに死骸になつて町に山積するといふことは私の心の中をどうたゝいても厭惡、恐怖・苦痛の外の何ものをもよび起さないのである。(彼處には誰が居るのさ、ブルジユイ、プロレタリイ、ソシアリスト、ごつた交ぜさ、皆な人間だ、足と手のある人間だ、眞理が何處に在るか、誰も知らねえでさあ)と(十月)の中で、老人ヤアスイ、ペアスイは云ふがその暗いにがにがしげな聲の中に、戰爭そのものの一解釋がある。また革命についての一部の人々の否定もこもる。『(十月)の中で作者ヤーコウレフは三人の男性の心を讀者に示してゐる。一人は(シイリイ、一人はその親友のアキム、一人は兄なるイワンである。ワシイリイはその革命の死の渦卷に對していつも一歩づつひきかへす。むしろながめるといふ性質であり、アキムは誘はれやすく引きずりこまれやすく自己を失ひやすい性質であり、イワンは賢く、しかも正直な脆い性質である。

この三つの性格がボリシエウイキイとエスエルとの市街戰にその性質傾向をそれ〴〵に露出する。そこにこの作の重要な興味がある。『(だが、彼…イワンは引離されて了つた。夥しい、この大集團は一大家族のやうに揃つて歩いて行くのに、嘗てはモスコウ全區の勞働者團體の首領と自認してゐた彼イワン、ペトリヤーエフは傍に立つて、他人か敵かのやうに彼等を眺めてゐる。(略)イワンは胸の痛さで呻き出し、齒ぎしりをした。「らッ糞ッ誤つた』といふ風に叫んで到頭アキムの墓所で自殺するこのイワンの死はアキムの死にもまして不幸である。アキムの戰死は無智の幸福なる死、イワンの死はインテリゲンチヤの不幸な死しかもその二つの死はサビエート、ロシアがその革命のために要求したものであるのだ。たゞ二字なる『革命』が、いかばかり莫大な、又いかばかり複雜多方面なる深刻なる犧牲を要するかを知れよとばかり(十月)は私どもに語りかける。しかもかうした犧牲を拂つてから、昨日今日を生きようとする露西亞ではある。

八月三日夜、銀座の長壽庵で、日本名淸水浪子氏、本名、(ブルスキー女史)の歡迎會にはしなくもまじることの出來た私は、彼の國の自殺した詩人セルゲイエセニンの辭世の詩を浪子氏の紅唇よりきくことが出來たそのときにもこの思ひで心が痛んだ。エセニンもまた革命後の波動の中でのそのいたましい自殺ではなかつたか。(十月——定價一圓　南宗書院)

詩は「人間の魂の解放のための戰ひに於いて(そのために人生の凡ての營みが行れてゐるのだが)その最も銳敏な力强い光りとなつてくれるもの」詩人らしい詩人死んだセルゲイ、エセニンの辭世の

詩はやはりその魂の解放を歌つたものだらうと思ふ。露西亞語を知らない私はどんなにざんねんだつたらう。せつかく、そのありのまゝの韻律で、露語でそれが歌はれてゐるものを、たゞそれを耳できくばかり、意味も分らずきくばかりだつたのはざんねんだつた。しかし、何しろ私はそのリズムを聽いた。それが心にのこる。リズムが何かはしらず何かを傳へてくれた。それが心を顫はせた……。詩がもしもリズムにおいて弱いならば、花に匂ひの乏しいやうなものであらう。

『今こゝに一つの新しい花がある。壺田花子氏の（喪服に挿す薔薇）といふ詩集。』

『ほんのりしたはかないリズムだがしかし氣持のよい詩。……「むらがり生へたこの青いいばらの……冷たいするどさ……若いしなやかな肉體を……きみわるくうづめつくした……いばらのむれ……五本の手指も足音も。「懊惱のさなかに……いたましくもゆる……はなやかなまなざし……たかまりつゝ……ゆらぎきらめくもの……火の、焔の、むらさきよ、琥珀よ。

「運命のとりでに押し落された一族への……深まりゆく純情は……もはや涙ではすくはれない」

『（詩の家）の詩人はとかく言葉の遊戯が多い。壺田氏にも多少そんな點があるがしかしやゝ救はれてゐる。（喪服に挿す薔薇――一圓二十錢　詩の家出版部（川崎市砂子一ノ二六）

詩も歌もその鑑賞はむづかしい。歌評、詩評の數多くを私もよんだけれども、結局鑑賞はその好き好きといふことになるだらう。たとへ缺點があつても好きなものは好きなのだもの。

『片手もて母もたたむなり洗濯もの夕立それて日はまだ高し……氣やすめもいひつくしたりながやみの母のくるしさなぐさめかねつ

（北見志保子）

『十年まへみしそのまゝに蓮池眞ひるの風に葉うらかへせり……なよびたる夏着しらけて女工らの列つくりいづる大佛の門（川上小夜子）

『水上げし鈴蘭の葉にきりふきて朝は靜けき心たもちぬ……ほほづきの青きふくろをもぎとりてかなしき心せむすべもなし（横田葉子）

よみあさりゆく女人十數氏の歌淡く、やさしく柔かいといふ點、女人の世の平和さをうらづけてゐる。さて先月號あげた『ごぎやう』と、こゝにかうしてあげる『草の實』とは丁度双生兒のやうで姉たりがたく妹たりがたく、いづれもやさしいつゝましい。前述のロシア婦人湇水浪子女史は某誌でのその『短歌論』に日本の歌への理解をのべて、「言葉の花束」と單に解釋されてゐた。しかし歌がたゞ言葉の花束ではないといふこと、それを『草の實』や『ごぎやう』の同人が今後横を見て傳へてあげるを得たらどんなにかよからうとおもつたことである。

（草の實――三十錢、草の實社――小石川區表町九十一）

（黒いピアノ）――執行光枝著。

童話は散文ではあるが、小說より詩に近いものであると小川未明先生がこの書の序にいはれてゐます。『詩』といふものを廣義にあつかつて、それを魂にむすびつけて考へる時小說も、短歌も、俳句も、いづれも詩をふくむべきもの、まして童話にそれが缺けてゐるならば、どうして子供の魂がうるほはされようと私も同感したことです

（黒いピアノ）――一圓五十錢

日本童話協會（東京府下高田町雜司ケ谷鶴原四十二）

×　×　×　×　×　×　×

五臓色のお祭り

小林　咲子

混沌たる無我の進行
つつぱしる思の形
神経叢調は構成された笑ひです。
目の前の風景に
五臓色がはりついた。
さあ、さあ、おはいり
無機體の見世物。

無　題

近代人は、一人國の王様、
隣邊と、見えない恐怖をもつ。
もう少し地球が冷えると、
新しく創造された變形動物となります。

あなた方が、それとなくお感じになつたでせう、
空氣の濕氣が稀薄になつたことを、
それはあなたがたが、出鱈目になつたからですよ、
あゝ、劍のつりがねを取つて、
私は待つてゐる、時の末流を。



ネッディ

綱野菊

ゆき子は教會の牧師の世話で或外國人の家へ一週二度洋服其他の整理をしに行く事になつた。ゆき子は女學校がミッションだつたので英語も先きの云ふ事だけはどうやら分つたし、洋服裁縫編物には自信があつたので其仕事はゆき子にとつては好都合だつた。夫は多少の財産を遺して逝つたので、ゆき子は別に自活の方法はたてなくてもよかつた。又、烈しい生活は病身のゆき子には向かなかつた。さうかと云つて、唯遊んでゐるのはつまらなく思へた。で、一週二度位の仕事はゆき子にとつては此上ない、適當な仕事だつた。

初めての日、ゆき子は牧師の紹介狀を持つて出かけた。途中、何だかオド〳〵した感じだつた。

外國人はオーステンと云ひ、××大學の講師に呼ばれて來てゐる人で、麹町の或華族の邸内の西洋館を借りて住んでゐた。

ザク〳〵〳〵〳〵、門をはいつて玄關へ行くまでの間、砂利の音が長く續き、ゆき子を弱らせた。

思ひきつて呼鈴をおすと、肥つた五十ばかりの日本の女がドアをあけた。

「奥様はおいでですか。」おづ〳〵と訊くと、

「あなたは何やさん？」といきなり其女は云つた。

ゆき子は何と答へたものかと思つたが、適當な答が思ひ浮ばなかつた。

「ミシンや何かのお手傳ひにあがつた者なんですけど。」さう云ふと、其女は、

「あゝ、さう。」と云つて直ぐ奥へ引込んだ。そして間もなく引返して來てゆき子を玄關脇の應接間へ通した。

「奥様は直ぐ來ますよ。腰かけて待つてて下さい。」女はそう云つて出て行つた。ゆき子は、其女はガラ〱してはゐるが悪い人ではなささうだと思つた。

ミセス・オーステンが出て來た。ミセス・オーテンはゆき子の顏を探るやうに見ながらほゝ笑んだ。ゆき子も當惑氣な笑を浮べた。ミセスオーステンは見るからに若く、健康さうだつた。ゆき子は、自分の蒼ざめた顏色やつやのない皮膚を省みて引け目を感じた。さうして不斷から不活發な樣子が益々因順になるのを感じないではゐられなかつた。

「此調子では私は落第かもしれぬ。」と心の中で思つた。

ミセス・オーステンは牧師からの紹介狀に一通り眼を通すと再び探るやうな眼をゆき子に向けながら、

「あなた、ミシン出來ます?」と日本語で訊いた。

「えゝ、少しだけ。」ゆき子はオヅ〱と答へた。

ミセス・オーステンはゆき子の其樣子を見ると、一寸不安な顏をした。そして暫く考へた後ゆき子を應接間の隣の部屋へつれて行つた。其部屋の窓際の隅にミシン臺があつた。ミセス・オーステンはミシン臺の引出しから小布れを出してゆき子に渡しそれからミシンを指した。

「かけてみろと云ふのだな。」ゆき子はさう思つて、ミシン臺に腰かけた。ミセス・オーステンは、ゆき子の直ぐ後に立つて、ゆき子の手つきを見てゐた。見てゐられると思ふと、ゆき子は手がふるへた。

「益々落第だ」とゆき子は思つた。だが、ミセス・オーステンは、兎も角もそれで滿足したらしく、

よろしい」と英語で云つた。そして、部屋の外へ出て行くと、暫くして白い布れを抱えて歸つて來た。

「これは私のベービーのです。縫へます?」

「縫つてみませう。」

ゆき子は眞先きに子供のものを出して來たミセス・オーステンに好意を感じた。ゆき子は小さい時に或る事情から母に別れ、母の愛を知らなかつた。自分の生みの母が母親らしくない母親であり、其爲め、自分が苦しい生活をするやうになつたと考へこんでゐたゆき子は、世

間の母親らしくない母親すべてに悪意を持ち、母親らしい母親にはすべて好意を持つた。

ゆき子はミセス・オーステンに好意を感じると忽ち元氣になつた。一生懸命に働いて、出來るだけ、ミセス・オーステンの手助けにならうと思つた。ゆき子は午前中しきりにミシンをひゞかせてゐた。

「ママ、ママ。」可愛らしい子供の聲が時々隣の部屋や廊下でした。

お晝になると、先刻の女中がはいつて來た。

「あなた、お辨當持つて來た？」

「いゝえ、持つて來ませんでした。」

「さう、ぢや私と一緒にこつちへ來て食事をなさい。」

ゆき子は其女の後から臺所へ行つた。

臺所からミシン臺の所へ歸らうとした時、廊下でゆき子は、傍の部屋からチョコ〳〵と駈け出して來た小さい男の子に會つた。

「ネッディ。ネッディ。」

ミセス・オーステンが追ひかけて來た。男の子はゆき子を見ると、ビックリしたやうに立止まつた。さうして、クル〳〵した眼をしてゆき子を見上げた。ブロンドといふのであらう、あま色の毛をし、眼はあをかつた。ゆき子は子供に慣れないので、左う見上げられると、どうしていゝか分らず、默つて笑ひながら立つてゐた。と、子供はツカ〳〵と寄つて來、手に持つてゐた繪本——それは、ページがバラ〳〵にとれてゐたがゆき子に差出した。

"Strange You like this lady !" （ふしぎお前はこの人がお好きなの）

ミセス・オーステンは左う子供の後で云つた。

「ありがたう〳〵。」ゆき子は左う英語で子供に云つて本を受取つた。すると、子供はゆき子の袖をつかまへて、そばの部屋へ引つぱつて行つた。そこは子供部屋と見えてオモチャの馬だの何だのが床に散らばつてゐた。子供は、それらのオモチャの中から、ゴムの犬を取出して來てゆき子に渡した。

"Strange ! Neddy likes a Japanese lady ! Do you like Neddy, too ?"

（おかしいこと！　ネッデイは日本の婦人が好きですね。あなたもネッディがお好きですか？）

左うミセス・オーステンに眞正面から訊かれるとゆき子は返事に困つた。向うでこんなにも好意を示してくれてゐるのだもの、勢ひ、こちらでも好きになることは分りきつてゐた。だが、どうも、まともに「好きです」といふのは變んに氣がさして云ひにくかつた。ゆき子は困つてニヤ／＼笑つてゐた。すると、ミセス・オーテンは、ゆき子が英語を解さないと思ひ、今度は日本語で、

「あなた、此ベービー好きですか」と訊き直した。

「好きです。」ゆき子は顔を赧めながら答へた。さうするとミセス・オーステンは安心したやうに、うなづいた。

「こゝが、日本人と西洋人の違ひだな」と思ひ、ゆき子は、ハキ／＼しない自分の態度をまた省みた。だが、子供は口がきけなかつた。それで、其愛情の示し方は直接で、日本人と西洋人の區別がなかつた。

子供は今度はゆき子を子供部屋の庭へつれて行かうとした。

「イエス、あなた、外で、靴下の繕ひ出來ます。」

ミセス・オーステンは左ういふと大急ぎで出て行つて、子供や大人の靴下を持つて來た。そして、自分も編みかけのものを持つて庭へ出た。

庭には小さい池があり、池のそばにベンチがあつた。ゆき子達はそこへ腰かけて仕事をした。ネッディは大元氣だつた。一寸もヂッとしてゐなかつた。そこゝに落ち散つてゐる櫻ん坊を拾つては池へ投げ入れたり、ベンチによじ上らうとした。ミセス・オーステンだけの手にはおへなかつた。

「アマが病氣で寢てゐます。それで今日は一日私がナースです。」とミセス・オーステンはゆき子に云つた。

ゆき子は繕ひ物を手にした儘、ちよい／＼席を立つてはネッディのあとを追ひかけた。ミセス・オーステンが平氣で見てゐるやうな場合にも、子供慣れない、神經質なゆき子はあぶない氣がしてヂッとしてゐられなかつた。

「トーン。トーン。」ネッデイは石（ストーン）が云へず、左う片言で云つて、ゆき子の所へ小石を持つて來たりした。一度はもう少しで池の中へすべりこみさうになつた。

「奥様、ベビー、フオール、ダウル／＼！」

女中が臺所口でどなつた。ミセス・オーステンとゆき子はビックリして駈寄り、子供をだきとめた。

ミセス・オーステンは、ネッディに、

"If you fall down in this pond, there will be no Neddy then, and your Mamma willl be so sad !（もしもお前が此池に落ちたら、ネッデイはゐなくなり、お母さんは大變に悲しがります。）と云つた。

ゆき子は其の英語の云ひ廻し方をきいて、

「中々、面白い云ひ方だな」と思つて感心した。

夕方までにゆき子の繕ひ物は中々はかが行かなかつた。そのくせ、ゆき子はグッタリと疲れた。子供は家の中にはいつてからもゆき子のそばを離れなかつた。ゆき子は仕事の手を休め〳〵しては駈廻る子供の後を追つた。子供は二階へ行く階段をズン〳〵上らうとする。そばにはミセス・オーステンもゐるのであつたが、それでもゆき子は不安だつた。ともすればゆき子は子供と一緒に駈廻つた。

夕方五時になると、ミセス・オーステンはゆき子に其日の手間賃を渡した。ゆき子は其日大した仕事も出來なかつた事を心苦しく思つたミセス・オーステンから渡されたお金を過分と思つた、併し、それにもかゝはらず、疲れ方のひどさはゆき子にとつて非常だつた。ゆき子は、此分では到底自分には此仕事は續けられまいと思つた。何故さう疲れたのか？それは確にネッデイのことが一大原因だつた。だが、其爲、ゆき子は疲れたことは不平にも不滿にも思へなかつた。

ネッデイはゆき子の歸る時、大きな聲をあげて泣いた。眼の色も異なり、はじめて會つた子供がこれ程までに自分をしたつてゐる、――それはゆき子に取つて奇異な思ひであつた。ゆき子は今迄子供をあまり好まなかつた。電車の中などでも子供づれの人の隣にはなるべく坐らぬことにしてゐた。子供の方でもきゆ子にはなつかなかつた。それだけに、ゆき子は、自分に破れた本や犬を持つて來てくれたネッディ、自分を歸らせたがらなくて泣いた青い眼の子供に對して、一種感傷的な氣持を覺えた。

ゆき子は下宿に歸つた。下宿の主婦も寡婦で耳が遠かつた。ゆき子は殆ど一日中其主婦と物を云はずに暮す事がよくあつた。ゆき子はあの青い眼をした子供の事を誰かに話したいと思つた。だが、耳の遠い主婦に大聲で話す氣はしなかつた。默つてお夕飯の支度をし、一人で食事をし、それからまた其の後片づけをしながら、ゆき子はあのネッディのことを考へ〳〵した。

夜、床についてからも、ゆき子は中々ねつかれなかつた。ゆき子の眼の前を、ネッディが駈廻る。庭の池の廻りを駈けめぐり、落ちさう

になつたり、又ミシンで指をはさみさうになつたり、階段からころげ落ちさうになる……。ゆき子は其度、「アッ」と聲をあげさうになり、寢返りをうつた。

朝眼がさめるとゆき子はグッタリしてゐた。ゆき子は夢でもネッディの駈廻る樣を見つゞけ、ゆき子の頭はネッディに怪我のないやうにといふ注意で疲れた。

それから三日程して再びゆき子はオーステンの家へ行つた。子供は乳母とどこかへ遊びに行つたらしく、姿が見えなかつた。

其日もミシンをかける仕事だつた。カタ〳〵〳〵〳〵ミシンの音を立ててゐる間に、ゆき子は時々耳をすましては子供の聲らしいものを聞かうとした。

お晝近く、部屋の外の廊下で、バタ〳〵、小さい足音と、ガラ〳〵金屬性の物のゆれてひゞく音がした。バタンとドアの開く音がして、ネッディが駈けこんで來た。あとから乳母らしい四十前後の西洋婦人がはいつて來た。病上りのせいもあるのか、大變にもの和かな感じのする、ホッソリした婦人だつた。ゆき子が目禮すると、其婦人も靜なほゝ笑を浮べて目禮を返した。

ネッディは首に、小さな、一寸經方位の細長い罐のやうなものをつなぎ合せた環をかけてゐた。それが、ネッデイの駈ける度、ガラン〳〵と音を立てた。ゆき子を見ると、嬉しさうに笑つて駈寄つて來た。そして手をのばしてだからうとした。ゆき子はミシンの手をとめて、だいてやつた。ネッデイはしがみつくやうにゆき子の體を小さい兩腕でだいた。そして、いつまでも離れやうとしなかつた。

「彼女はお仕事です。あちらへ行きませう。」乳母はさう云つてよんだが、ネッデイはきかなかつた。そして首の環をとつてゆき子の首にかけた。

「あちらに行つて お食事をしませう。ネッディ。ね、さうして外へ出て遊びませう。ネッディの好きな お隣の ベービーを見に行きませう。」

それでも子供はゆき子から離れなかつた。益々強くしがみついてかぶりを振つた。ミセス・オーステンがはいつて來た。

「本當にふしぎです。ネッデイは日本の婦人を大變好きと見えます。」ミセス・オーステンは、乳母に左う云つて笑つた。乳母は、默つてほゝ笑んでゐた。

「乳母とあちらでお食事をなさい。」ミセス・オーステンは子供をゆき子から離さうとしたが、子供はきかず、火のつくやうに泣出した。ミ

セス・オーステンは泣くネッディをゆき子から離し乳母に渡した。ゆき子は、ガラ〳〵の環をはづし、ネッデイに返した。

ドアを開け乳母は子供をつれて出て行つた。泣く子供の聲とガラ〳〵の音がだん〳〵遠くなるのを、ゆき子は耳をすまし、聞いてゐた。

其日は、それきりゆき子はネッディを見なかつた。歸りの時、廊下か庭ででも會ふかと思つたが會はなかつた。

それから二三度行く間、一度もゆき子はネッディを見なかつた。ゆき子の仕事の邪魔になるので、ネッディはゆき子の所へは、つれて來られないらしかつた。

或る日行くと、珍しく門近くの庭のベンチでネッデイが乳母と遊んでゐた。ネッデイは、ゆき子の姿を見ると、手をうつて嬉々と笑つた。ゆき子が近づいて行くと乳母は一寸けげんさうな顔をしたが、直ぐ例のもの靜な笑を浮べて、氣の毒さうにゆき子に云つた。

「ミセス・オーステンはお留守です。あなたの所へしらせは行きませんでしたか？」

ミセス・オーステンはミスター・オーステンと前夜、海岸へ小旅行にたつたのであつた。ゆき子はしらせをうけなかつたことに一寸、暗い氣持を覺えた。だが久しぶりにネッディを見ることは嬉しかつた。ゆき子はベンチに腰かけ、ネッディのすることを見てゐた。ネッディは近くの草をむしつて來ては、乳母とゆき子の手の中におしこんだ。

「ネッディはトトがすきです。」乳母は、日本に來てから見物した所や招待をうけた人のことなど話したあとで、ふと、さも面白いことを話すかのやうに笑ひながら、左う云つた。ゆき子は、トトの意味が分らず、きゝ返した。

「魚です。日本では、魚のことをトトと云ひませんか」と乳母はけげん氣な顔になつて云つた。

よく聞いてみると、或る日本人の所へオーステン一家が呼ばれた時、そこの家の人がネッデイに「トト」と云つてお魚をすゝめたのださうであつた。

ネッデイはゆき子にだかりに來はしたが、併しいつか程烈しくしがみついたりはしなかつた。直きに飽きてゆき子の膝から降り、石ころや草などを拾つたりむしつたりして、ゆき子達に運ぶのであつた。ネッデイは時々小石を口の中に入れた。乳母とゆき子で、其石を出してやつた。門の外を、どこかの人が乳母車をひいて通ると、「ベービー、ベービー」と呼んで駈出して行つた。

「自分もまだベービーのくせに。」さう思つて、ゆき子はおかしかつた。

乳母車をひいた人は近所の人らしく、笑つて、車をとめ、ネッディの近づくのを待つてゐた。ネッデイは近づく

と車に兩手をかけぶらさがるやうにして車の中をのぞきこみ、「ペービー、ペービー」と聲を立てゝ、喜んだ。
ゆき子は暫く乳母と話し、いとまをつげた。乳母はゆき子に無駄足をさせたことを氣の毒がつた。ゆき子はネッディと乳母の方を振返り〳〵門を出た。乳母もベンチから立上りネッディと二人、手を振つてゆき子に挨拶した。ゆき子は、ネッデイが、もつとゆき子に別れを惜しんでくれるのを豫期してゐたがネッテイは乳母のそばを離れず、立つてゐた。
歸り道ゆき子はオモチヤやの前を通つた。陳列窓に、セルロイド製の卵が二つにわれ、そのそばに、小さい矢張りセルロイドの黃色いひよこが澤山並んでゐた。
「あれをネッデイにあげたら、ネッデイはきつと喜ぶだらう。」とゆき子は思つた。
ゆき子は陳列窓の前に立ち、永い間、其の卵を見てゐた。オモチヤをネッデイに持つて行つていゝものかどうか、ゆき子には分らなかつた。到頭ゆき子は獨立記念日とかクリスマスとか、左うい ふ場合まで待つことにしようと思つて、窓を離れた。
次の行くきめの日には、ゆき子は前日から强い頭痛がし、どうしても行けさうになかつた。ゆき子は、手紙で行かれぬ旨を斷つた。其の次の日ゆき子がオースチンの家の門をくゞると、シャツ一枚になつた見知らぬ日本人の若い男がセッセと玄關口を掃いてゐた。
「ミセス・オースチンはおうちですか。」とゆき子が訊くと、其男は、
「オースチンさんは越されましたよ、靑山へ一昨日。」と答へた。
オースチンの家で、どこかわきの適當な家を探してゐたことは、ゆき子も知つてゐた。併し此の前の旅行のこともあるので、ゆき子は、今日來ると分つてゐるゆき子に引越のことをしらせてくれなかつたミセス・オースチンに不滿を感じた。
ゆき子はそれきりオースチンの家へは行かなかつた。オースチンの家の引越先きはシャツの男にきいて分つてゐたが、そこまで出かけて行く氣になれなかつた。オースチンの家からも、別にゆき子に來てくれとは云つて來なかつた。教會へも、ゆき子は其後行き怠つてゐたので、牧師にも、其後の報告はせず仕舞、きかず仕舞になつた。ゆき子は、仕事の割にはよすぎる報酬の口を失つたことを惜しむ氣はしなかつた。唯、あのネッデイに會へぬことは淋しかつた。ゆき子は、よくネッデイのことを思ひ出しては考へた、「あの子供が大きくなつて、普通のアメリカの紳士になり、アメリカ人らしい笑ひ、アメリカ人らしい物云ひをするやうになつてから、子供の時分に日本にゐ、さうしてあんなにも日本の子供と同じやうな泣き聲をあげて、日本人の私のあとを追つたことを思ひ出すことがあらうか」と。――昭和三年七月――



五月雨

松井締子

白い砂埃が、歩む度に、尻尾の切れた佐助の藁草履から、渦を捲いて立ち昇つた。

裄丈けの短かい筒袖と股引、それに厚い胸幅を、覗かせ佐助は、大抵の場合、姉夫婦の、百姓仕事の手助けとなつて、赤ん坊の守をさせられた。身の丈が六尺に近く、體重の拾八貫もある彼の脊中では、何日も、芋蟲の様に小さく子供が寢入つて居た。頑丈な幅の肩は、底強い腕力を潛めさしてゐるかの様であつたが、其の二つの眼を見ると、事象を單に受け取る丈けの硝子玉に過ぎなかつた。

ボコボコ歩きの田舍道を埃にまみれて、村童の群と馳け廻つて遊んだ。

昨年が徵兵檢査であつた。

村の芳藏、萬作、誰れ彼れと連れ合つて、佐助は町の役場でしらべを受けた。

順が廻つて、今度は彼の出る番になつた。彼は生れて始めて、袖のある袂の裾の長い着物を着たのであつた。

芳藏や萬作の袂の内の様に、煙草は一本も這入つては居らなかつたが、淺黃色をした木綿の手拭が四つに疊んで佐助の袖の中には在つた。

重いドアを排して見ると、其處は廣いホールになつてゐて、大きなテーブルの前には、嚴めしい顏付きで睨まへて居る、肩章のついた警察署長、郡長、教官、視學官、そうした不氣味な存在が、物々しげに陣取つてゐるのであつた。

そして、今上天皇の寫眞と、日淸日露の兩大戰場に於て、最も野蕃な、そして最も犧牲的な情景を、クライマックスに現した、三色刷となつて、それ等の物が、一引安價な額緣で、眉間の鴨居に羅列して飾られてあつた。

佐助の健康な心臟は、譯もなく威嚇された時の恐怖に似たものを感ぜずには居られなかつた。

彼は頭が、ぼうつとなつて、其れ等の人々の顏が、狸の顏となり猫の顏となり、輪廓のぼやけた型になつてしまつた。

こんな場所へ來るのじやあなかつた。今日は山へ登り度かつたのに、お秋夫婦の者が、自分を無理に此處へ行く樣に拶めたのだ、こんな場所へ來るのじやなかつた。佐助は、自分を誘ふた萬作共がうらめしくさへ思はれた。

そして新丈の短かい袖口を、矢鱈に引張つてゐた。

『住所、姓名、職業』

係り官の男は、彼の頭の天邊から、足の先きまで見返し、つい顏色に侮蔑の苦笑を浮べた。

『おい、おい、返事をしないか、何んだ、其の大きい身體で、恐悶付いて居る奴があるか、男らしく返事をするんだ。』

正面の壁には、或る樞密院顧問官の肉筆で、啓智成德の四文字が、橫に大きく書かれて、額になつて揭げてある。

『宮、宮崎縣、東、東方郡、東方村、山野、山野、佐助、』

たどたどしい言葉に係り官は、チョット、舌打ちをして、

『職業は？　お前の仕事をきいてゐるんだ。』

總ての人々の視線は、彼を中心にして、複雜な線を空中に描いた。

彼は突差に、彼の仕事を、割合に明確に答へてしまつた。

『東方村は、お秋姉んところのやや兒の守や。』

お秋姉弟は、尋常二年位の年齡の折に母親を亡くすると、父親の知れない全くの孤兒であつた。

乞食と同じ樣に村で育つたが、乞食の樣な放浪性はないのであつた。

お秋は其の內に娘らしくなり、紡績會社行きを中途でやめて、隣村の若い百姓、貞次と夫婦の樣になつてしまつてゐた。

九州山脈が南北に走り、祖母ヶ岳の秀峯が朝霧の裂け目から覗き、夕べの野地から消え失せる地帯であつた。

そして、裕やかな山襞の裾の方に、高原地になつた一塊りの農村が、零れ落ちた一撮みの菜種の様に、何日の間にか簇り合つてゐた。

日向灘が一角、東の方に展望を伸べて、此の村の山狹を水田地に沿うて下ると、小一里位の所には小さい、昔し賑はつた港町等もあつた。

二百戸足らずの東方村の一割五歩は、自作農であつたが、大方は、來る年の穀類の收獲高を前抵當として年内の肥料代を地主、地本家に向つて前借して行かなければ、生きて行けない貧農の群れであつた。

然かも、自然の不作でも襲來すると、肥料代は空に消え、地主への小作米を納めると、彼等に殘る物は、疲勞と、粗食の爲めに生ずる、餓死が待つてゐるのみであつた。

都會のブルジョア階級の飯を、日向米の特等品とレッテル打つて、生産に直接携る農民は、インタナショナリズムな、朝鮮米と、蘭貢米の混合飯を常食としてゐる。

佐助はそれでも、眞つ黒い麥の入らない、潔白な『白い御飯』を、プロレタリア獨特の持つ哲學で、澤山に詰め込みさへすれば美味しいと思つた。彼は菜つ葉の漬物を相手に、鱈腹に大食するのであつた。

すると、お秋は終ひに飯籠と、茶椀を佐助の手から捥ぎ取つた。彼は默つて箸を下すと、北國に棲む大熊の樣な應揚さで、腸の出た疊の上へ、ごろりと横になつた。

小作爭議が再燃した。農民に取つて戰爭の感ある苗の植付け期を眼前に控えて、地主と小作人の組合は、相方對立して讓らなかつた。

村會議事堂には、小作人達が一杯になつてゐた。入り口の狹い通りで、町から來た正服私服の警察官が何事か人々と言ひ爭つてゐる。

佐助も此の日は仕事を休んで、貞次に連れられて會場へ集つた。

支部長の爭議報告があつて、本部の組合から派遣された、T氏の講演に移つて、半ば頃、

『――只今の我が農民諸君の、負擔であり壓迫である日本の農民制度は、丁度今より三拾年餘り前の、ドイツ帝國に於て、ドイツの農民を

搾取し壓迫した所の制度と同じものでありまして、――』

T氏は次の言葉に入らうとした時、臨官は、長いサーベルを鳴らして怒鳴つた。

『辯士中止ッ、』

激昂は其の頂點に達した。總ての百姓は立ち上つて居た。

佐助も夢中に飛出した。

そしてT氏の腕を捉へて、演壇の下に引摺り下さうと集まつた正服を二三人、力にまかせて薙ぎ倒した。

彼は肩章の相手の首を締め付けた時、昨年の徴兵檢査で侮耻された時の意識を廻想して居た。責任感の伴はない侮蔑と、罵笑とに向つて肉迫して行つた。

金をかければ、手輕くて清潔な、燐酸だの窒素肥料等は何日でも田畠に入れる事が出來得たけれ共、養子の貞次は働き者の常で、肥料代の經濟から思ひ立つて、人々の働き得ない時間を肥車で、港町の家々へ廻り歩いた。

黑い板塀で圍つた裏木戸を開けて、佐助と貞次は肥桶を擔ぎ込んだ。

小庭には粋な作りの松の木や、楓の古木等が植えられてゐて、磨き拔かれた緣側には、紅色や乳色の鉢物の葵の花が美しく咲いてゐる。

明るい電燈が、座敷に垂れ下つた水色のすだれを透して見える。

臺所らしい所から、生肉の鍋に焦げる匂が來た。佐助はふらりと、便所の前から離れて湯殿の方へ歩いて行つた。

白い泡の様な湯氣が入口の二寸位開いた戸外からよく見えた。中では煙の様な若い女がしきりに奇妙なポーズをとつて、立ち昇る水蒸氣を掻き廻してゐた。

眞つ黑い髪の毛を、捩ぢ上げる様にして、簪搔でしつかと押へた以外の部分が、贅澤な位に艶やかに白かつた。

小さい全裸の肉其のものは、異性に取つて美と言はしむべく、餘りに性の對照として、直接な慾求を起させる危險な有體ではあつた。佐助は薄暗い戸外に、低い唸り聲を發し、と、思はれる間に、彼は完全に、桃色の香ひの女の濡れ膚へ、全身を吸盤にしてしまつた男の様に、むさくるしく、汚ならしく、彼の動物性を發揮して行つた。

女は啞であつたのかも知れなかつた。

五月雨は小糠の様に烟つて降つた。鋤き臺に兩手を置いて、馬の後から黒い泥田を起して行つた。佐助の身體は泥で捏ね上げた土人形になつて居た。

用水路の水は溢れ、臨月の腹の、遣瀬なさと、緊張とを、植付時の自然は表はして、人々へ示して居る。青い路草の一株は、時々根こぎに引浚はれて下流した。

畔道を一つ越した畠に百姓娘が、せつせと野菜物を、深い目籠の中へ放り込んでゐた。圓いかさの中から、時々惡戯らしい眼を上げて、佐助をからかつた。

『おゝい。佐助よう。わしや、とうからおまへが好きで、仕樣が無かつたが、今度、町の美しい女を情婦にした談が知れて、わしや、ほんまに、がつかりしてゐるわいなあ。町の女は美味かつたげなのう。』

邊りには働いてゐる人は無かつた。佐助は嬉しさうに頷くと、全身へ力を罩めて、叫んだ。

『おう、美しい米の飯だよう。おまへ達は、麥飯だ。百姓の男に喰はれてりやあ嬉しいとせい――。』

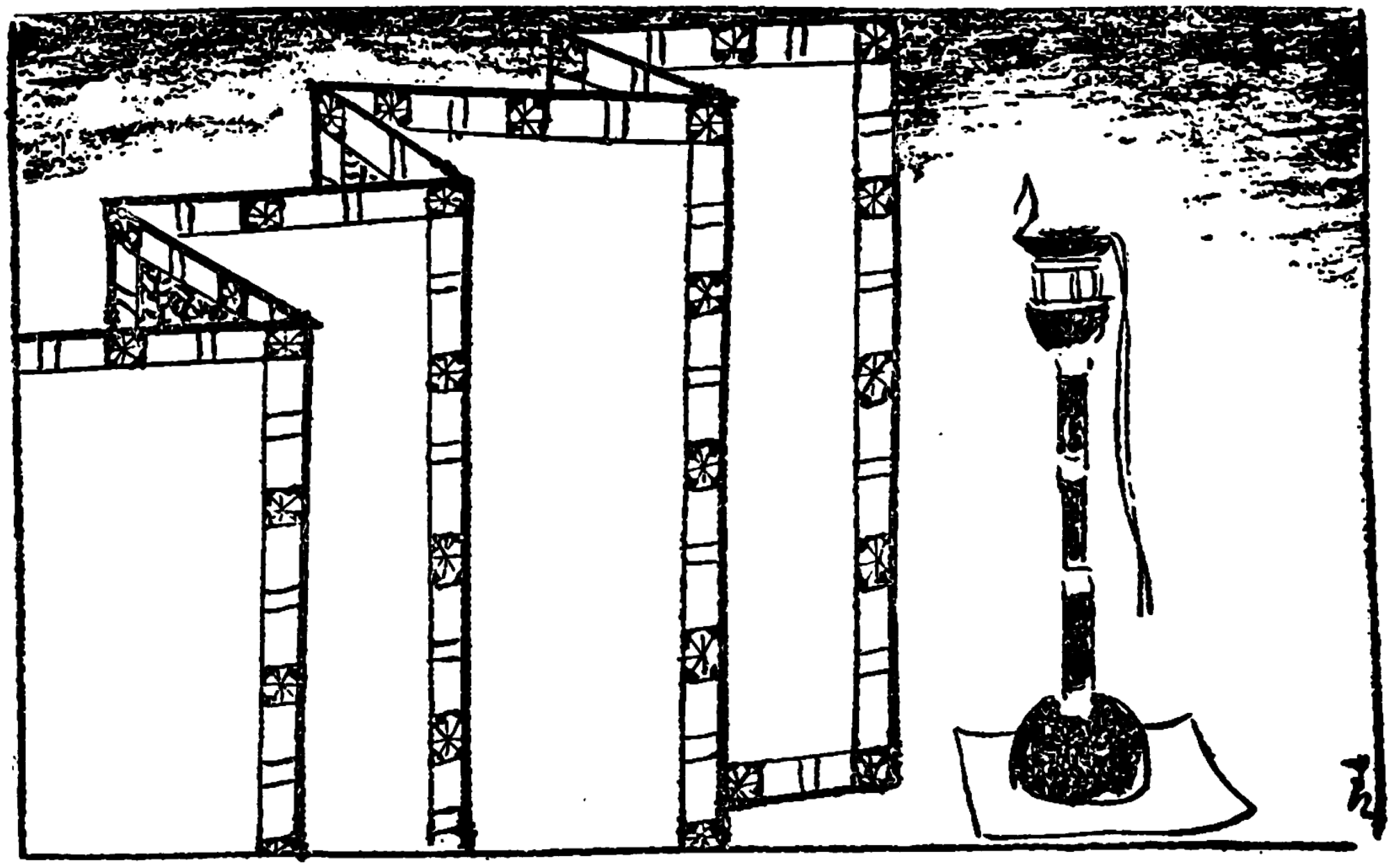
『佐助よう。百姓男が米のおまんまを喰べると、働く事が嫌になるさうな、わしの樣な麥飯でも我慢してみなよ、三年經つと藏を建てるとよう。』

畔一重を隔てゝ、彼等は粗暴な言葉を交はし合つて笑つた。

佐助の額からは、熱汗が滴り落ちた。附近の水田に、立入禁止の揭示が立札になつて樹つて居る。

祖母ヶ岳の裾が暗くなつて、大粒の雨が降り出した。桑畑の蟇蛙が優しい聲で啼いた。

――一九二八、六、卅――



柳

伊福部敬子

人氣のないほどにひつそりしづもつた山莊をつゝんで、春はおだやかであつた。かたく閉した門の、すぐ外を流れる川が、日毎に水量を增して、谷から谷へ、深い木立をわけて鶯が鳴きわたつた。

いつの頃、何人が植ゑのこしたか、川岸ちかく立つ一本の柳が、そのやはらかいみどりの枝を寒白い川霧の中にたれてゐた。

山莊のあるじの姫君――まさしくいへば、次の除目には右大臣を兼けるだらうと噂に高い枇杷大納言資成の一の君、前源少將俊光の未亡人である――は、この頃の大方の日を拂佛の間にばかりすごしてゐた。小蔀をおろした薄暗い一間の机によつて、長い春の日を、音にも立てず勝鬘經をうつしてゐる日もあつた。

鈍色の袿をなよやかにさばき、大束の髪を肩さがりに切りはなした姫君の若い尼姿は、さまぐ〵の美しい色衣でかざり立てた、俗の日の花やいだそれよりも、美しさの上に氣高さがさしそつたやうで、ついてゐる女たちに、一層に可惜しいものに思はれた。姫君の乳人子で、河內樣とよばれてゐる河內介の娘は、年の頃も姫とおつか

つなので、一きわ主人の心持をいとほしく思ふのであつた。

姫君は二十二、そして一切のものを捨てゝ姫君がこの山莊にこもつてから、丁度一年になるのであつた。

京の父君の邸からは、さすがに五日に一度、七日に一度と、その季節々々に入用のものをとゞけるために使ひが來たが、それより他には、近くの受領をあづかる男たちが、春は若菜、夏は果子の類を奉りに來るだけであつた。それだけに、都からのたよりは、心からでなくこんな山住みをしてゐる若い女たちには、千秋の思ひで待たれた。女たちは、京の邸から來る男をつかまへては、殘して來たゆかりの者や、京の町の賑やかな催しごとなどの樣子を訊ねた。いや、わが心から山住みをする姫君とても、やつぱり京の消息はなつかしいものであつた。

或日の午後、姫君は、几帳のかげの小机によつて、香を焚いてゐた。條々と立ちのぼる煙が、しめりの多い室の中にとけてゆくのを、あかず聞いてゐながら、姫君は、昔夫の少將がよく香を焚いたことを思ひ出してゐた。

色の匂ふほどに白かつた少將は、いつも山吹匂ひの狩衣を好んでゐたが、その袖にも烏帽子にもこぼれるほどの空焚をたきしめた。

さういふことも、少將が風流人とはやされる一つのことではあつたのだらうけれども、いつも若い女を對象として考へてゐるやうな夫の振舞が妻である姫君にとつては、うれしいものではなかつた。

姫君の心に、今もはつきりと思ひ浮べられるのは、いつかの、春の夜のことである。少將はめづらしくその夕は姫君のそばにゐて、香を焚いて聞かせてゐた。少將はその香が、妹君である承香殿の女御からのたまはりもので、姫君には、そのめづらしい香の圖はとても書けないだらうといつて、興がつてゐた。姫君は、とりわけてその日は氣が鬱してゐた。少將が、肩にかけようとする手を袖屛風ではらつて、くるりと壁代の方をむいてしまつた。

「ねえ、私はいつの間にそんなうとまれものになつてしまつたんだらう」

少將は吐息をついた。

「まあ、此方をむいてをりますと、その香は一層よい匂ひがいたしますこと」

姫君は、さうしていつまでも頑に振りむいても見なかつた。いくよさも歸つて來なかつた夫が、どこのどういふ女にこれと同じ振舞をして來たことであらうと思ふと、口惜しくて、少將がやさしくすればするほど、素直な心になれなかつた。

するとその時、どこからか、若い女らしい結び文がとゞけられて來た。姫君の氣を引くやうに、わざと思はせぶりにその返しを、艶めかしい料紙になが〳〵と書いてゐるのを、よそ目に知りながら、姫君は夜のものを引きかついでふせつたまゝ、だまつてゐた。少將

がそつと忍び足して出てゆくまで。

こんなことがなつかしく思ひおこされる。皆、ありのすさびであたのだと、姫君は思つた。そして着てゐる衽の袖の匂ひを聞いてみた。夫の少將に似た匂ひの、少しもうつつてゐないのを見て、姫君はさういふ日が、もう遠い〳〵昔になつてしまつたことを思つた。

姫君は、立ちのぼる白い煙の中に、夫の影をたづねようとした。けれどもそれは夢よりもあはくはかないものであつた。

今よりも一きわ濃い鈍色を着てゐた頃は、たゞ亡き人を思ふ心で一ぱいであつた。喪が明けて、若い未亡人の存在が、そろ〳〵世間の人の噂に立ち、再び花が咲いたやうに、あちこちから戀の手紙がとゞけられるやうになつても、姫君はたゞ煩はしく、亡くなつた人の幻ばかりを抱いてゐた。亡くてこそ人はしのばるゝといふは、世の常の人の心か、姫君は少將が亡くなつてから、はじめて少將を戀うた。あまりに情なく、うと〳〵しかつた心を詫びるつもりで、姫君はやさしかつた少將の幻だけを抱きしめて、尼姿にやつした。

父君にとつては二人の姫君であつたが、母君にとつては唯一人の女君で、何ものにも替へがたい愛子で、この年の若さと美しさとで、出家することを始めの中はなか〳〵許さうとしなかつたけれども、又あれほどの人を先立たせた姫君の心としては、それも理であらうと、泣く〳〵ゆるした。それは、普通ならば藤衣を脱ぐべき、一年の喪が明けてよほどたつてからであつた。

けれども、少將の幻は、月と共にうすれていつた、抱いても〳〵面影はとほのいた。そして深山の花のさかる春は、わびしかつた。

さういふ姫君の此の頃の心に、二日の月のやうにかすかにうつる影があつた。それは母方の緣につながる頭中將道命であつた。

中將との緣は、姫君が少將との結婚祝ひの時、その頃まだ年少の藏人であつた道命が舞人の一人として萬壽樂の左を舞つたばかりでなく、後朝の御使をも承つたのであつた。

その水際立つた公達ぶり、優にはなやかな舞の手振りは、風流をいのちとしてゐる公達原の間にも評判で、娘をもつほどの親で、この將來の長い才子に望みを、かけないものはないといつてもよいほどであつた。

それほどであるから、よい運を持ちはこびさうな戀がいくらでもあるのに、道命はいかにも心憍つたやうにあしざまに言はれながら、皆ことはつてゐた。

それが、ひそかに姫君を慕うてゐた故であるとは、當の姫君はよほど後になつて知つたのであつたが、同じやうな若人の間では、疾くから噂にのぼつてゐたものか、亡くなつた少將は、よくそのことを言つては姫君をからかつてゐた。

かうして浮き世の外に住んで、淋しさに慣れてしまつた今、時々その人のことが思はれる、いまだに佗しい獨身をつゞけてゐるほど、

深くまじめに自分を慕ひながら、かつて一度も消息をよこしもしなかつたその心根があはれで、いとほしいと姫君は思ふのであつた。

霧のこめる夕ぐれ、姫君は書見をしてゐた。ふと河内が入つて來て、そして御持佛の供花をかへようといつた。

「姫君、あまりつゞけてお讀み遊ばしては、氣が屈じます、若葉の餅でもまゐらせませうか、女たちもあちらで頂いてをります」

姫君は淋しい微笑でそれに答へた。

西庇の方へ歩き去つた河内が、女たちに何かいひつけてゐる聲が聞えて來た。姫君は、立つて廣縁に出た。山のひだあひから、紫色の夕ぐれが次第にひろがり出ようとしてゐて、春はわびしかつた。

その時、ふと門のあたりに立ちさはぐけはひがして、姫君はのび上つてみた。

馬にのつた狩裝束のもの三四人、徒歩の雜色があちこち走り歩いてゐたが、それが門の外に立ち止つた。

「おや」と姫君は思つた。京の父君の邸から來るいつもの使者でないことは一目見てわかる、供まはりのひそやかな劃に、その一行が何となく氣品がそなはつてみえるのは、いづれ身分の高い人の微行でもあらうか、それにしてもこゝを山狩りの中休みどころにでも借りるつもりか、この山莊にゐる女たちをたづねて來たものでもないらしいと、姫君はなほもよく見てゐた。

と、此方からも布衣の家人が出て、門の內外で何か應對をしてゐる樣子であつたが、その中に葦毛の馬にのつてゐた人が、ひらりと馬を下りるのが見えた。そして山川に架けた橋を、柳の垂れ枝の下を、しづかに歩いて來る。姫君はその姿を見て、ハッとした。それは、紛ふかたなき頭中將道命であつたからである。年をへだてゝ、舞人であつた藏人の昔とは、すつかり異つてゐるけれども、あの優雅な貴人は、道命の外の誰でもない。

姫君はあわてゝ小蔀の中にかくれた。怕れ惑うた。どうしてよいのかわからなかつた。姫君は、いたづらに物語の本の上に目をさらした。その時うしろに靜かなけはひがして、河內が入つて來た。

「姫樣」

白桃の花と一しよに持つてゐた文を、そつと机の端にのせた。困つたやうな、又うれしいやうな、その表情を見ると、姫君は何事も言ふなといふやうに頭を振つた。

河内がその文を披いてみた。

「御らん遊ばしませ、御みごとな手でございますよ」

姫君は手を振つて、机の上にうつぶした。そのすんなりした肩つきをみながら、この僧形の姫君を一寸でも中將が見たらば、一層思ひがつのるだらうと思つた。

姫君は、かさねて河內に言はれて文を手にとつてみた。

『ほのかなる追風のごとあはつけぐ見まゐらせしなけれど、年ご

ろを經て、思ひはなか〳〵にまさりそろ。君はさは知りたまはじなれど、
霧をわけて來しものの心をあはれと知りたまへ』

かういふ言葉が、河内のいふ通り、ながれるやうな見事な手で書かれてゐた。河内は傍から、中將の心の、なみ〳〵でないことを説いて、仇に考へては後々の宿世もおそろしいと、荐に姫君の心を引き立たせようとした。

この頃姫君の心にうつる影のことを知らなかつたけれども、この人の手紙に返しを書く位のことが、いや、それよりもつと深い交りになつたとて、それは決してはづかしいことではない、中將の長い戀を知つてゐる世間の人も許すであらうと思ふのであつた。

けれども、姫君には、どうしてよいか、考がつかなかつた。それほどの深い志を無下にことはるのも辛かつたけれども、色も香もない尼姿で、時の寵兒といはれてゐる人にあふのも、その人の心、女たちの思ひやりを考へてはづかしかつた。夫のために切つた髮を、その人のためにのばして俗にかへるやうのことがあつたら、世の笑はれものになるであらう。

姫君は、それで河内によいやうに返事を書かせようとしたけれども、河内はきかなかつた。

「これほどの深い御心と知りながら、御うけにならないのさへあるのに、手づから御斷りもお書きにならないのは、勿體なうございます」

姫君は、筆をとつて、幾度も惑うた末に、書いた。

『いで、いなとよ、追風の、消えてはかなきえにしゆゑにこそ、
忘るゝひまなくぞ。重ねてはあひまゐらせぬをこそ、せめて。
浮世の外に住み朽つるものを、ゆるさせたまへ』

姫君はこの手紙を書いてしまつてから、男がこれを見て何と思ふであらうか、あんまり氣强いすさまじいものに思つて、疎んじはしないだらうかと思ふと、わびしく辛かつた。こんなことを思ふのは、もうよほどあの男に心を奪はれてゐる證だ、こんな風では、自分の心からどんなはづかしいおろかしいことを今に仕出來すかもしれないと思つて、わざと竪文にして河内にわたした。

姫君は、しかし、河内の足音が細殿の方に消えて、しばらくするとさびしかつた。一すぢのさし入る光を斷ちきつたやうな心持がせらるゝのであつた。

立つて簾をあげてみた。門のあたりには、けれども、もう馬上の貴人の姿はなかつた。

はるかにとほい山路をわけて、戀にやぶれた人が涙で吹くのであらう、春鶯囀の曲が、とだえ〳〵に消えて來た。

姫君は、いつまでも立ちつくしてゐた、立ちこめる川霧の中に立つ柳の若葉を、いつまでもみてゐた。

かすかな吐息とともに、色のない扇をかざして涙をはらつた。



長谷川春子

青幇黨(チンパンタン)の息子

森　三　千　代

小蒸汽船の船尾に濁流が渦をまいてゐる。ポイと吐いた唾が、一片の茴香の花のやうにすつと吸ひ込まれていつた。船では、雨の沫の中で、四五人の船員が一本の帆綱にしがみついてゐた。

揚州。西の風。細雨。寧波(ニンポー)。雨。

沈んだ空の中に、二筋の帆づながゆれて消えかゝつてゐた。

枯蘆の中にふいた新芽の間に一枚の板橋が船から降りる人のために渡された。黒い新しい繻子の男靴が板をしなはせながら踏んでゆく。物馴れないやうな、氣取つた歩みぶりでだぶだぶの茶褐色の紋織りの長袍の裾を左の手で少したくし上げながら、その手は女のやうに白くてしなやかな指だつた。長い袖の中で右の手は、鳥籠の環をしつかり支へてゐた。二羽の白文鳥が、細かい朱の棧の中でじつと止り木にとまつてゐた。

珊瑚の玉のついてゐる紗帽を稍々斜にかぶつてゐる、舒蓮生は、今朝鎮江を立つて、この寂れた漁村、劉江についたのである。彼は青幇黨(チンパンタン)の一親分、舒大麟の一人息子であつて、長江筋の賭場めぐりの途中なのだ。酒――女――賭博。親父が一代かかつて作つた世渡りの圏をもつとも得意で歩いて行くすべを心得てゐるやうな聰明な種類の男だつた。船の中で、一人の船員が飼つてゐる白文鳥を見ると急に矢もたてもたまらなく欲しくなつて、そのために前の賭場からの財布はからになつてゐた。

――チエッ　雨か……

つぶやきながら、思ひ出したやうに鳥籠をのぞいてみた。

田舍道のつゞいてゐる田野はまだ何の緑もなく、冬のまゝで荒れ果てゝゐたが、所々の網代塀によりそうて、柳は芽をふいて、夢のやうに煙つてゐた。ぬかるんでくる道の片側には、農家の一輪車が、いくつもいくつも立てかけてあつた。低い低い空を鵲がとんでゐた。

青幇黨（チンパンタン）——それは殆んど支那全土にわたつてゐる怖ろしい勢力をもつた惡黨の團結である。最初は杭州に羅祖といふ英雄的惡僧が出て、その黨を組織した。だから一種の、宗教の團體のやうにも思へた。

頼まれゝば刺客ともなり、もつぱら人浚ひ、强盜などを仕事として、金品をうばひ、賭博にふけつた。ある實業家は、白晝の上海で自動車ぐるみ奪ひ去られ、第二次革命のある革命家は、この黨に挨拶しなかつたために、慘敗した例もある。

彼等の間の親分、子分、兄弟分の規則は非常にきびしくて、ふとした反則もしばしば、斬罪に觸れるやうなことがある。

長江筋を上る青幇黨の親分たちは、行く先の部落で、ワンボッオや苦力、荷揚人足や漁士仲間などに賭場をひらかせ、そのテラ錢を集めて、先の土地へ旅立つ。一人前の親分となるために、一たびは長江筋をめぐる若者達。度胸と、熟練と、女の冒險。

——やつぱり、來て下さいましたね。

——私は大好きな白木蓮の花が、いくつ開いたか數へに來たゞけですわ。

——あなたは、たつた一人で來ましたね。

——召使ひたちは、みんな疲れてゐるんです。

——しばらく、御一緒にゐてもよろしうございますか。

——結構でございますわ。

——この片田舍の劉江のやうな所に、どうしてあなたのやうな美しい方がいらつしやるのか不思議です。

——私にはまた、こんな田舍にあなたのやうな粹な方が、どんな風の吹きまはしでおいでになつたのかわかりません。

——美しい蝶だけが、きれいな花をみつけることを知つてゐるのです。——あなたは、おわらひになりますね。私がうぬぼれてゐるとでも思つていらつしやるのでせう。

——あら、そんなことはありません。あなたは廣東の言葉をおつかひになつていらつしやいますね。あちらの方の面白いおはなしを聞かして下さいませんか。

——よろこんで——。

——今夜はほんとに良い晩ですこと。

——ごらんなさい。煙つた柳のかげに、あんな大きな月が出ましたよ。こんな晩に、すべての春が訪れるのです。家のすみゞゝから、

心のすみ〴〵まで。

――あなたの御夫人たちが、こんな晩には、あなたを待つて泣いていらつしやることでせう。

――それは、あなた自身のことをいつていらつしやるのではないのですか。どんな男が、あなたの睫毛を濡らさせることが出來るといふのか。さあ、その眼を見せてごらんなさい。

（女、身をかはす。）

――いけません。

――あなたの眼は笑つてゐる。しげみの中の新月のやうに羞んで

――どうして、そんな方をむいてゐるのです。

――いけません。

――丁字の香ひするこの髪。

――いけません。

――貝殼のやうに靜かで、人を誘惑する耳たぶ。

――いけません。

――まるで死の中へ私を呑まうとする不思議な海のやうに搖らぐこの腰。

――いけません。

――この胸の中に、二つの乳房の下に、どんな魔術が棲んでゐて、こんなに私を向うみずにしてしまふのだ。肩だ、咽喉だ、あごだ、唇、唇だ！

――あゝ。

……………。

――夜が寒くなりましたね。あなたはうす着ではありませんか。あなたのお召物は、本當の杭州織の緋緞子ですね。

――……………。

――あなたの香ひ嚢には、遠い安南の麝香が炊きこめてある。

――……………。

――あなたの立派な腕環は、山東の貴重な瑯玕ですね。

――……………。

――あなたの襟止めの寶石は、シヤムかビルマの佛像の眼にはまつてゐる、あの得難い紫玉ではないでせうか。

――……………。

――あなたの簪は……實にめづらしい、南洋の極樂鳥の羽毛で出來てゐる。

――……………。

――あなたの身體中には、世界のめづらしいものが集つてゐる。あなたは、あなたはいつたいどんな御身分の方でせうか。あなたの旦那樣は・・・。

（女、高聲で笑ふ。）

――私の夫？

――あなたはお仕合せさうですね。さうなんでせう。

――仕合せ？
――まだ、ちがつた仕合せもある。
――ちがつた仕合せ？
――私は、あなたを連れてゆく。今夜の中にかけおち。
――かけおち？
――それはあなたのお心一つです。
――私の心一つ？
――！
（女、突然、高笑ひ。）
――御決心がつかないんですか。
――いゝえ、面白うございますわ。どちらにしろ私にはおんなじなのですから。

茶館のてすりが、狹い國道にのり出して、刳型のある紫檀の軒廊からは、さまざまな小鳥の籠が下つてゐた。和やかな早春の一日が暮れ傾いて、長江一帶の田野が遠く霞んでゐる。

　こゝは眠江といふ長江の小さな船つき場で、劉江からは十三支那里程の所にある。紓蓮生は劉江で見知つたかの地の大破落戸の妾、明輝をそゝのかして朝立ちの船旅で、丁度いまこの茶館へついたのであつた。

　明輝は、馴れない船に疲れて、醉ひ加減で卓の上に片肱をついて頭をおさへてゐた。男は運ばれた茶碗の蓋をとつて、かたはらにおいた。熱い湯氣は、玫瑰の香ひで彼の疲れを和らげるやうに思はれた。

　往來では、苦力やワンポツォが一かたまりになつて、炒麵やユザツヵをがつ〳〵食べてゐる。軒なみの淫賣宿からは、うすよごれた女たちが、洗面器や桶をもつて、長江と水つゞきの淤水池に化粧の水を汲みに集つた。その水はさゞなみをたてゝ、青蘆の中を澤山のあひるが泳いでゐるのが見えた。

　蓮生は、彼の前の玫瑰の茶碗の蓋を、型通りに置きかへた。それは、彼等の同黨のものがお互ひにどこででも名乘りあふ目じるしとして、そのやうな規約を持つてゐたのだ。

　突然、表の階段のてすりをぎしぎしきしませながら、荒らい足音で上つてくる者がある。階段を上りつくした男の顔をみると、明輝は思はず輕い叫びごゑを發して、蓮生の脊中へ顔をかくすやうにして外つぽをむいた。蓮生は瞬間に、自分の役割を感づいてわざと、その男の方へぐいとからだをねぢむけた。

　見あげるやうに頑丈で、顔は深いあばたでいつぱいだつた。はだけた胸からは、刺青があらはれて、無頼な荒かせぎをする男の様子であつた、彼の眼は血ばしつて、からだ全體でじりじりつめよるやうに、二人の卓の方へ近づいて來た。この男は、明輝の夫であり、蓮生とは同じ靑帮黨の一味の、澎湖島沖を根じろにする海賊の小頭

で、仲間うちではちよつと知られてゐた。彼は立つたまゝで、蓮生の前にある茶碗の蓋のおきかたを見て、彼等の流儀に從つて問ひかけた。

――お見かけ申せば、あなたも羅祖の流をくむ御一人と思ひますが。

しやがれた太いこゑに對して、蓮生は冷やかに、

――お察しの通り、祖師の威光に生きる一人です。

――いづれのお身内ですか。

――手前の父は、姓は舒、名は上、大、下は麟と申し、手前はその旗下にありまする。

――それならば御藩名は？

――藩は廣東の第二斑。

――いづれの御瑪頭か？

――香港第三の瑪頭。

――おひかへなされ。私は海かせぎの者、澎湖島沖を瑪頭とする。姓は林、名は叫天と申すけちな男でございます。舒大麟殿の御子息ならば、まづまづ正席のまゝにおひかへ下さい。

しかし蓮生は、年長者に禮をつくさうとして自分の席を立ち上りかけた。その時、叫天はたちまち顔中に殺氣をおびて、懷ろにかくしてゐた短刀を拔くなり卓に突きさした。

――いま一度、遠慮なくお問ひ立て申す。

急にかはつた叫天の態度に、蓮生は口のあたりをけいれんさせて、

――何なりとも。

と答へた。

――仲間うちの船舶の數、何ぞうありや。

――二千九百九十そう。

――その旗じるしは如何。

――大江を上るときは層雲旗、大江を下るときは薫風旗、船首には八個の青龍旗、船尾には十六の玄武旗。

――果して船上には何枚の板、何本の釘ありや。

――板は九九八十一枚、釘は三百六十本。

――釘あつて目なきものは？

――跳板。

――目あつて釘なきものは？

――緈板。

――問答はみごと、みごと。しからば天上の星のかづは？

――三十六萬六千個。

――しからば、身うちを流れる脈のかづは？

――肌を裂いてみよ。

――裂けば、一刀にいくばくの胴ありや。

――一刀にたゞ二個の胴あるのみ。

蓮生が答へ終るや、叫天は辛うじてこゝまでつづけて來た問答をこの上つゞけてゆくがまんが出來なくなつた。怒りにふるへる手に匕首のつかを握つて身がまへた。どうしても結局、血を流さずにはゐられなくなつてゆく二人の問答を明輝は、だまつて聞いてゐたが、叫天が身がまへた時、蓮生のきやしやな様子を心配さうに眺めた。蓮生は内ぶところに片手をいれて、短刀を鞘ぐるみ引き出して叫天に應じようとしたが、ふと氣がかはつたらしく、卓の上にからりと投げ出して、ひつつるやうに高く笑つた。

――お前も博徒ぢやないか。博徒なら、博徒らしくさいころ一つで浮世のことは片づくんだ。

といひながら靜かにポケツトのさいころをつまみ出して、卓の上においた。叫天は、なほ身がまへたまゝ、眼だけはさいころに吸ひとられていつた。

――お前が目と出たら女をつれてゆけ。俺が目と出たら、女はもらつてゆく。

叫天は、匕首を握つたまゝの手を下げて、一刻二刻と考へこんでゐたが、

――よし、さうしよう。

匕首を投げ出してどかりと椅子に坐つた。遠まきにさわいでゐた人々の間から、茶館の主人が瀨戸ものの壺皿を持つて來た。明輝はそれを受けとつて、さいころを入れ三度振つて、おいた。

蓋は開いた。叫天の顏がみるみる悲しみとも絶望ともつかない表情にかはつていつた。

黒い龍舫船の上、林叫天のモノローグ――

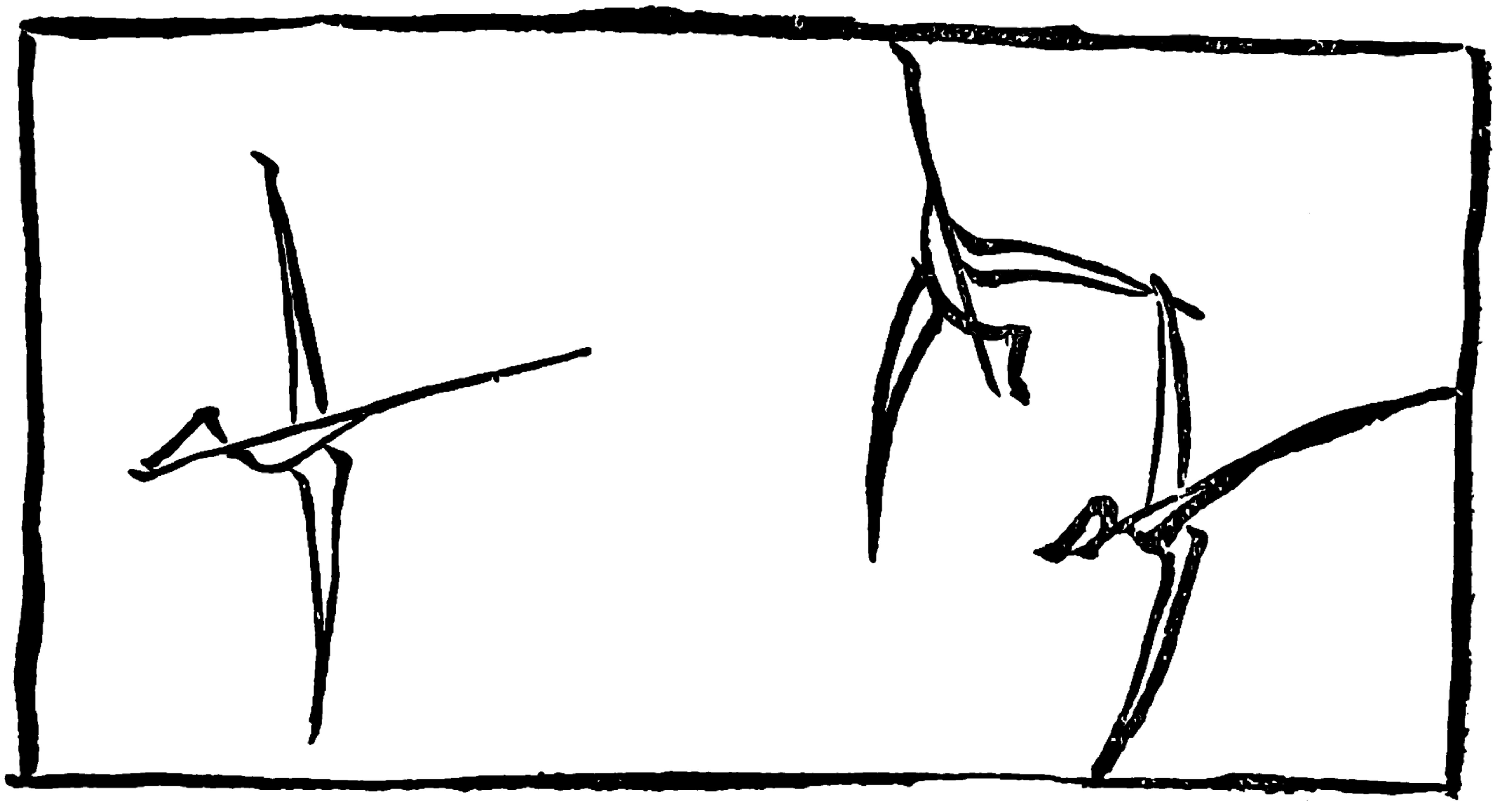
――俺はこの船板の上でどれだけ眠つたらう。眠つたつて眠つたつて足りやしない。覺めてみると、いつでもきまつて、この黃色い濁流だ。空のやつの青いこと……こゝにあるのはそれつきりだ。そしてこの俺はどこへゆく。

明輝――あれを東京(トンキン)の市から大枚の銀を出して買つて來た。ひとめ見た時から、やつは氣に入つたんだ。劉江のへんぴなかくれ家へやつを飼つといて、俺は今日は渤海、明日は廈門(アモイ)とかせぎに出た。珍らしいものはなんでも持つていつて、やつの喜ぶ顏をみるのが一ばんたのしみだつた。

今となつては、さいころ一つで、やつの影もかたちも失くなつたのさ……。なんでもかんでも、さいころ一つで俺のものになつたが、またさいころ一つでなんでもかんでも失くなつてしまふ。

目の出ないときは仕方がない。いつでも、からつけつの時には、空のやつがいやにどぎどぎとしてゐやがる。

もう一ねいりだ、眠つたつて眠つたつて足りやしない。



西の空

時雨

少年、緣側で靴をはきかけてゐる。

室のなかの簞笥　佛壇などは極くありふれた品。少年の勉强机がきは立つて立派に見える。

傍の書架の上には置時計が飾つてある。

次のせまい方の室には、まだ蚊帳が釣つてある。

朝、七時すこし過ぎ。

老母　（おろ〳〵して）どうしても食べてゆかれないのかえ！

少年　（靴紐を結びながら急いて）だつて遲刻するから。

老母　それでも、この暑いのに、朝も食べず、お晝のお辨當も持つてゆかないでは・・・

少年　いえ、晝前だけだから、なんでもありません。

老母　さうでないよ、暑さはあつし、歩いてはかなり道もあるから・・・・

少年　そんなこと言つたつて、今つから駈けてつたつて遲刻するのに――（泣聲で）困つちまはあ、試驗ぢやないか。

老母　それでもよく寐すんでたからね、そつとしておいたのだよ。

少年　（激昂して）だから、あんなに賴んでおいたぢやありませんか。六時前に起してくれつて。

老母　そんなことをお言ひだつて、出來ないよ、可哀さうで。昨夜は、お前寐なかつたのだものを。

少年　試驗の徹夜ぐらゐ、あたりまへぢやないか！　だから僕は寐ないつてたんだ。それを、屹度起してやるからつて、むりに、寐ろ、寐ろつてッといて――それをとつて下さい。うゝん、それぢやない、こつちにある――チョッ（這ひ上つていつて書籍をとり、いきなり駈出す。）

老父　（門のところから押返してくる）まあ、まて、まて、まて――ばあさん、早くこれを沸してやつてくれ。牛乳だ。

少年　そんな事してゐられないのです。

老父　このパンを道々かぢるのだ。いゝか？　な、かにしてやつてくれ、ばあさんは呆けてるのだからな。――時間がないなら、生のめよ、盞はとつてきた。

少年、引きずりとめられて、よんどころなく壜から牛乳をのみながら、半にて腕時計を見て泣出す。

少年　だめだあ。

老父　（おなじやうに覗いて）なに、だめだ？　そんなことはあるまい。ぢや、早く行け、駈けてつて見ろ、おくれた子だつてあるかも知れないから、ちつとは待つてくださるだらう。

少年　そ、そんなこと――（轉がるように駈去る）

老母は臺所で、釜をかけたりおろしたりしてゐる。老爺ドッカリと椽に腰をおろして呟く。

老父　かあいさうに――あんなにも時間が氣になるものかなあ。あんまり出來すぎるのも心配なものだなあ。

老母　ほんとですよ、おぢいさん。あたしはあの子の學校〱で、壽命がちぢまるやうな思ひですよ。以前にはなまけものの勘太郎の學校のことでハラハラしたが、今思へば、あの方がよつぽど氣樂だつたと思ひますよ。

老父　(煩はしさうに)　飯は出來たのか？

老母　あい、出來ましたよ、すぐおあがりなさるか？

老父　妙にあはてたので、腹がおさまらないせいか、食べたくもないのう。あれが歸つて來てから一緒に食はうよ。

老母　おぢいさん、そこに落ちてゐるのはなんですえ？

老父　これか（拾ふ）おゝ、辨當のパンを、袋ごとおとしていつた。

老母　さうぢやありません。捨てていつたのですよ。あれで、中々癇積もちの、我儘育ちだから——

老父　ばかいへ、あの子の氣性は見上げたものだ。

老母　そら、また、おぢいさんのおかぶがはじまるよ。自分の子のことを惡くいつて、あの子のことだと、眼の中へ入れても痛くないのだ。

老父　さうではないがの、どうして〱、あの子の仕事は大人にも出來ない辛抱だよ。ああしたお家の坊つちやんで、不自由なく育つたものが、おれたちのやうな汚ない老人を、おばあさんおぢいさんと呼んで、こんなところに一緒に居てくれるなんて——あれが居てくれればこそ俺は生きてゐるのだよ、ほかに樂しみが、なにあるものか。

老母　恩があるからですよ。勘太郎が助けなければ彼の子は今頃生きてられるものですか。御飯がおくれた位で泣くなんて、すまないことですよ。あの子のおかげで、家の勘太郎は死んぢやつたぢやありませんか。

老父　またはじめた。なにかといふと、二言目には勘太郎〱といふのが、お前の口癖になつてしまつたのだ、生きてゐた時分のことを思ひなさるがいゝ。お前は彼奴にむかつて、親の首へも繩をかけかねない奴だと、泣言ばかり言つてたではないか。

老母　ええ、ええ、言ひましたよ。それは言ひましたよ。でもねえ、おとつさん。いけない奴でも我腹いためた子の方が、やつぱり思ひ出されるのですよ、戀しうござんすよ。あたしはね、あの子の學校〱では肩が張つてしまう。あの子が夜寢ないとね、あたしも落付いて眠むられないのだよ。年寄にそんなおもひをさせるなんて、いくらお褒めでも、決して親孝行ぢやありませんよ。

老父　そりやまあ仕方のないことだ。幾度も繰返しをやるやうで、お前も骨が折れるだらう。骨の折れるのは俺もおんなしだが、がまん

をしなさい。あれは、勘太郎のやうに見込みのないのぢやない。立派なものになつて、俺達に樂をさせてくれやうといふのだから、まあ辛抱するさ。――體を破すこいけないから、今のうちすこし眠んなさい。――ああ、肩が張るのか？ 叩いてあげやう。（妻の肩を叩いてやる。）

老母　だがねえ、おぢいさん、考へて見ると、まだまだこれからが大變だねえ。

老父　――

老母　樂をさせてくれやうつたつて、あの子の大きくなる時分まで、命がつゞきやしませんよ。

老父　――

老母　もう三年になりますよ。勘太郎が生きてゝくれると廿四だ。やくざものでも、矢つ張りたよりだつたが……

　少年、駈けて歸つてくる。

老父　どうした？（心配さうに立上る。）

少年　だめ！ 一時間目はとう／＼間にあはなかつた。それに忘れものしたから。

老母　ほんに、オヤ／＼、此處に鉛筆入れがあるよ。

少年　あんまり狼狽たので、忘れてつちやつた。

老父　なんだなあ、ばあさん、よく氣をつけてやらなけりやいけないよ。どうだ、遲れついでに、飯を一ぜんかつこんでいつたら！

少年　うん、（立上る）だけど、また遲くなるなあ。今日はあと一時間きりだから、直に歸つて來ます。

老父　さうか、では行つておいで、俺たちも待つてゐるからな。

少年　おぢいさん、パンは？

老父　おお、何處へやつた。

老母　（佛壇からおろしてくる。）

　少年と老父と、ちよいと顏を見合せる。

少年　いゝや、これも歸つてきてから貰ふ。（去る）

老母　へんな子だよ、食べてきやいゝのに。

老父　（だまつて考へてゐる。）

老母　（茶を入れて、佛壇にあげ、その後で老父のところへもつてくる。）お茶がはひりましたよ、御飯があとなら、このパンでも食べませう。

老父　――ばあさん。

老母　はい、なんですい。

老父　（言憎さうに）お前、なにか？　まだ忘れてしまへぬのか？　無理はないが――あの子は勘太郎なんぞとは、競べものにならないたいしたものだぞ。お前がもつとよくしてやらなければいけない。かあいさうだよ。

老母　（不服げに）これでもですか？　こんなに氣をつけてもだめなのですかねえ。

老父　第一な、さう佛いぢりばかりしてゐては、あの子に味氣ない思ひをさせるやうなものだ。いゝや、子供ではない。あの子は子供だといつても、どうして發明なことは普通大人などの及ぶところではない。

老母　だつておぢいさん、それではあたしの樂しみがなくなるよ。お茶やお菓子をあげるくらゐ・・・・

老父　いゝや、それがよくない。お前のはことごとにだからなあ。思ひ出させるばかりだ。お前も俺のやうに、なにも忘れて、あの子の成長ばかりを樂しみなさい。

老母　それでは勘太郎が、あんまり可哀さうぢやありませんか。あれは行くところへもゆけませんよ。現在の母親が、お線香一本あげてもいけないなんて、そんなばかくしいことがありませうか。それまでにしなければいけないなら、あたしやあの子も入りません。あの子はあの子の家へお返ししますよ。恩知らずな。

老父　な、なにを言ふのだ。

老母　いゝえね、其代りに、勘太郎を生かして返してもらひます。

老父　ば、ばかを言へ。可哀さうに、老耄してからに・・・・・・（鼻をすする）

老母　お前さんはあの子と睦しく暮して、末長く面倒を見ておもらひなさい。あたしや嫌なこつた、勘太郎にお迎ひに來てもらひます。

ゆくさきの樂しみもなく生きてゐるなんて、フッフッ厭なことです。

其時、一人の青年重げな足どりではひつてくる。

青年　ごめん下さい、ごめんください。

老母　あ！　勘太郎ぢやないか（飛出す）

青年　（間の惡いやうに）あの、脚氣の藥をほどこす家つて、こちらですか？

老母　は——（じつと見詰てゐる。）

青年　（照れて）貰へるでせうか、僕も脚氣なんですが……

老母　勘太郎かと思つたよ。

青年　違ひます、僕、大庭つていふものです。

老母　廿二ぢやありませんか？

青年　え、二十才になつたんです。

老母　（だまつて見詰めてゐる。）

青年　おぢいさん。（老母がボンヤリしてゐるので、呼びかける）脚氣の藥もらへないでせうか。

老父　（これも夢から覺たやうに）あげます、あげますとも。まあ此方へ來ておかけなさい。立つてゐてはいけない。

青年　では、間違ひなくお宅だつたのですね——ああ看板もかかつてゐる。外へかけておくといいのですね。

老父　子供がいやがるものだから。

青年　（看板を讀む）家傳か？　ねえおぢいさん、効きますか。

老母　（急にソワ〳〵と）効きますともさ、その事ばかり一生懸命になつてこしらへてゐるのですもの。まあそれはあととして、お茶をあがつて、息をつかなくつては！

青年　有難う。（一口のみながら）あ、さうだつけ、あの女も探してゐたのだ、敎へてやらう。

いきなり立上つて、歩かうとして顏をしかめる。

老父　なんだ〳〵、わしが行つて來てあげやう、用事はなんだ。

青年　いえ、かまひません、大丈夫。

老母　それがいけないのですよ。かまひませんの、大丈夫のつて、體をいとふことを知らないから、惡くしてしまうのです、おぢいさん、何をうろ〳〵してお出なさる。

老父　でも、なんの用事だかわからぬから。

青年　たいした事ぢやないのです。僕とおんなじやうに、女の人が脚氣のほどこし藥の家を、探してゐたからです。

老母　そんならいゝわね、お前さんが此處の家にはひつて出なければ、探して來ますわね、ほつときなさい。

老父　そのおひとがわるいのなら、あんまり歩かせてはいけないな。

青年　いえ、なんでも、その女の息子だつてつてましたよ。

老母　え、息子さん！　幾歳ぐらゐなのです。

青年　僕ぐらゐなんでしよ。

老母　（叫ぶ）おぢいさん、早くめつけておあげなさい。

老父　（あはてて出てゆく）

老母　（青年に團扇の風をやりながら呟く）御兩親も心配なさつてだらう。

青年　（親しみ易く、悶々しく）そりや、心配してゐるでせうよ。だけど、もうこの脚ぢや隨分金を絞つてしまつたからなあ、貢くなつたといへなくなつて困るんだ。（不良に笑ふ）

老母　（いよ〳〵懷しげに、誰にいふともなく馴々しく）勘太郎に生寫しだ。こんなに似てゐるのもすけないね。

青年　ねえ、おつかさん。（馴々しく、ごく自然にいふ）

老母　（顏中を皺にして）まあ！　おつかさんなんて、何時聞いた聲だらう。

青年　（得意げに附上つて）僕、いまほしいのは藥ばかりぢやないのだけれど——親父はもう欺されないし、藥はほどこしだからもらへるけれど——あはは、こんなこと言つて、いけない奴でせう、あきれましたか？

老母　（急いで佛壇の中から巾着を持出してくる。）

青年　（はれ〴〵と不敵に）やれやれ、とうとう乞食だ。おばさん、欺されちやいけませんよ。

老母が渡す小金を、青年が受取らうとする時、老父、女をしたがへて歸つてくる。二人は具合わるく互の手を引込める。

女　おかげさまで助かります、有難うございます。

老父　いや、お目にかかれてよござんした。

女　いえもう、あの方が、此方様におはひりになつてそのまゝ時がたちますから、あたくしも悶々しく押かけてあがらうと思つてをりましたところで。

老父　さうですか、それはよかつた。

女　（青年に）あなた、御心切にありがたうございます。

青年　（輕く會釋をかへす）

女　（老母に）あたくしまでおねだりもふしまして。

老母　いゝえもう、差上げるために作つてをります薬です。御子息様のと聞きましたので、是非差上げたいと思ひまして。

女　（悄然と）何分にも女一人で、たつたひとりの悴でございますから――

老母　まあ貴女、お察しもふします。あたくしも、たつた一人の悴をこの病氣でなくなしましたので、今もいま、このお方を見て、他人様のやうには思へなかつたのでございます。

女　まあ！　それでほどこしをなさいますのですか。

老母　さようですよ、それから一生懸命に、脚氣の妙薬ときくものを、せいだして集めまして――只今では林檎の黒焼だけ差上げてゐますが――御覧下さい、これが糠の靑をとつて見ましたのでございます。この黒焼はあたくしどもで造りますので、土用の牛の日の、朝八時前にとつた林檎でいたします。いえね、日本林檎でなければいけませんので、この通り樹が植てございます。今年も土用になつたら澤山つくるつもりで、誰にもとらせはいたしません。（ふと、老父へむけて意地わるく）これだけは、佛前へおはつをあげて、一番さきにとつたのを燒きます。

青年　（袂から青い林檎を三ッ四ッころがし出す）おばさん、ごめん！　知らなかつたので、落てたのを拾つて、もすこしで食べてしまうところだ。

老母　（ちよつと複雜にドギマギして）なに、おちてゐたのならかまひませんよ、澤山おあがんなさい。

老父　（素早く立つてゆき林檎を覗きこんで）おゝ、大層いゝ色になつた、美事なのだな。（其中で一番よいのを一個とる）ばあさん、あの子にとつておいてやつても好いか？

老母　――

老父　珍らしい事だからよろこぶだらう。あんなにこの林檎の好きな奴もない。

女　（ふと机に氣がつく）お子様がいらつしやいますの？

老父　へ、孫のやうな奴でして――十四になりましてな、やつと中學で、今日は試驗でござります（靑年が無斷で、机の上のものを見てゐるので、だまつて取りあげる。）

老母　それがね、貴女、その子のために、あたくし共二人の伜はなくなつたのでございます。（訴へるやうにいふ）海でその子が溺れかけたのを助けて、自分が死んでしまつたのでございます。

女　まあ！　海でおなくなりになつたのですか？

老母　いゝえ、あれは泳ぎが出來たので、見殺しに出來ないで、自分の病氣をわすれましてね、水の中へ飛込んだものですから、衝心して……

女　まア！（痛々しげに顔をしかめる。）

靑年　（激しい調子で）で、なんで、敵のやうな奴が此家にゐるんです。

老父　（突然に）さあ皆さん、歸つて下さい。歸つて下ない。まだ朝の掃除もしないのだ、飯もこれからだから。

女　ほんとに好い氣になつて、とんだ長居をしてしまひまして。それでは頂いて參ります、癒りましたら連れて出て、お禮をもふします。

靑年　だけど小母さん、聞いてらつしやいよ、なんだつてその子が居るのだか、氣にならあ。

老母　本當にお前さんは、勘太郎の通りの氣性だね。なあにね、その子の親御がね、氣の毒がつて、伜のかはりにといつて置いてつておしまひなすつたのさ。老人がさびしからうからつていふ、思召は有難いが、まさか御扶持も頂けやしないし、勘太郎の代りつたつてね！

女　（老母に調子を合せて頷く）全くですねえ、お逝なりになつたお方はおかわいさうに——あたくしたちには、その御功德が頂けるのですが……（佛壇の方に首をさげて）有難うぞんじました。またおねだりに伺ひますかも知れません。では？

青年　僕、なんだか胸が苦しいから、もちつと休ませてもらつて行きます。

女　さうですか、それではおさきへ（去る）

青年　おぢいさん、すこし此處をかしてください。（椽側へ横になつて、林檎を噛り出す。）

老父　（不服げにジロジロ青年を見ながら、蚊帳のつり手をはづしはじめる）

幕——すぐ明く

少年、勢ひよく歸つて來る。

見知らぬ青年が椽に横になつてゐるのを、老母が團扇で蠅をはらつてやつてゐるのに目をつける。

少年　只今！

老父　（それを氣にしながら、少年を煽いでやつて）どうだつた、出來たかな。

少年　（無邪氣な誇りで）得意の課目だから大丈夫さ。遲刻したので、體操を丸なしにしちやつたけれど、それでも大丈夫だ。

老父　さうか〳〵、婆さん、はやく飯にしてやつてくれ。

老母御飯ごしらへをする。

老父　（卓について）なんにもないな、晝飯といつしよだとすると、もちつと御馳走したものをな。

少年　いゝよ、おぢいさん、腹がへつてれば、なんだつて食べらあ。ほら、もうこれで四膳めだ。

老父　ははは、まつたく早いの。

少年　お茶をかけてください。まだなんだか腹へはひつた氣がしない。

老父　そのかはり、かういふ好きなものがある。（袂から大事さうに林檎を出しておく）

少年　（目を丸くして）あ、もうとつたの？（何心なく佛壇の方を見る。）

老父　（あはてて手を振つて）それはお初穗ぢやないのだ、落ちたのだよ。

少年　（椽の外に拾られてある、林檎の食べあらしを凝とながめる）おぢいさん、あの人、なに？

老父　病人での、ちつと休ませてくれといふのだ。

少年そのうちに食事を終る。

老父　もういゝかの。（お茶をついでやつて）ばあさん、書生さんを好い加減に起したがいゝよ。日中になつたら、歩くのが猶面倒だらう。

青年　（突：首をあげて、寢言のやうに）あ、ねむつちやつた。どうも腹がへつてると直にねむつちやう。

老母　目が覺めましたね、お茶でもあげませうか。

青年　それよりか、僕にも一ぱい食はしてくれませんか、とてもへつちやつてるんです。歩けないのも脚氣ばかりぢやないんです、腹がペシヤンコだからでもあるんです。

老母　まあまあ、どうしたといふ事ですね。もつと早くお言ひならばいゝのに。なんにもなくつてよければ、此處へいらつしやい。

青年　え、食はしてくれるのですか、こいつは有難い。

ノツ〱上つてゆく。少年と老父は入りかはりに退く。少年は机の前にゆく。

老母　麥飯だといゝのだけれど——まあがまんなさい。

青年、老母によそつてもらつて、平氣で食べはじめる。

少年　（小聲で）おぢいさん、あの人、僕の恩人の友達ですか？

老父　なあに、見ず知らずの男よ。

少年　藥をもらひに來たの？

老父　さうなのだ。

少年　（ちらと顔を曇らせる）おばあさんは、思ひ出してるのだねえ、おぢいさん。

老父　（ギクリとして）そ、さういふ譯でもあるまいが――

少年　でも似てゐるものね、おぢいさんはさう思はない？

老父　あんな奴見たくもない。勘太郎なんぞ、生きてるうちは嫌がらせばつかりしてた奴だ。死んだ時はのうのうしたくらゐだ。

少年　（口を噤む。）

そのうち、老母と青年も顔をよせて、コソコソ話てゐたが、

老母　（元氣な聲で）おぢいさん、緣て妙なものですね、此方はね、勘太郎のこと知つてるのですよ。

老父　（渉つ呆けて、獨言のやうに呟く）どうせ、ろくでなし揃ひだ、知つてもゐやうよ。

青年　なんでも木島君は、ブルジョアの子を救つて、自分が死んだつては聞いてたのですがね、あなた方が木島君の御兩親とは思はなかつた。（得々と）木島君は、ちつとうまらないな。

老父　（聞きたくないやうに）ばあさん、飯が濟んだら歸つておもらひもふしな。

青年　大丈夫ですよ、居すはりやしないから（ジロジロ家中を見廻す。）なにしろ、あなた方はいゝや、うんと手當金を貰つたでせうから――勘太郎さんは死んで孝行した譯ですね。ねえおぢいさん、銀行へ入れておくと危ないですよ。株も安いさうですね、公債にでもしてあるのですか？

老父　（鋭く見る）くどい人だな、飯を食つたら、さつさと歸りなさらんか。

青年　いや、歸らぬとは言ひません。先刻勘太郎君のおつかさんから、頂戴しそくなつたものがあるから・・・・

老父　（老母に）なんだか知らぬが、早く出してやつて、歸つてもらひなさい。

老母　（後むきになり、巾着の小錢を紙に包もうとする。）

青年　いゝです、いゝです、そのままでいゝ、いくらあるのです。一圓三十錢？　ちつとすくなすぎますね。まだあるんでせう。

老母　家は貧乏なものだから――

青年　そんな事があるものか、お出しなさいよ。

老父　こら、何をいふのだ。老母の金をだまして奪るなんて、不埒な奴だ。

青年　御老母は、僕が勘太郎さんに似てゐるつていふので、何かくれたくつてしかたがないのです。怒つちやいけません。それに、あなたんとこには、好い資本主があるのだから、ちつとばかり分けてもいゝでせう。

老父　（カッとしたまぎれに、うつかりと謹みを破つて）何をぬかす。大事な忰とかけがひになるものが世の中にあるか！金がなんだ。大馬鹿ものめ。

青年　（ケロリと）さうでせうかね。

老父　さうでせうかねとはなんだ。

青年　お怒りなさるな、おぢいさん。勘太郎さんは、あんまり好い息子ぢやなかつたから、金と取換へつこならいゝぢやありませんか、あなた方おかげで老樂だ。

老父　なんだと——も一度言つて見ろ。世の中にな、生の子を殺して、金にする親があると思ふのか、恩知らずめ。さういふ心では、貴様なんぞもろくな奴ではないな。いゝか、親といふものは、悪い子ほど可愛いといふくらゐ有難いものなのだぞ。それも懸けがひのある子か……

青年　（皮肉に）貴様はしどいな。しかし或はさうかも知れませんね。さうなると、その坊ちやんはどうなるのです。

老父　（驚愕し、とりかへしのつかぬ悔の色を浮べる。）

青年　その坊ちやんは、金蔓ぢやないんですかね？

老父、おとし穴へはめられたやる瀬なさに、憤怒の極、ぶつてかゝらうとする。

少年　おぢいさん、いけません。おぢいさん、おぢいさん。

老父　（顫へてゐる。）

老母　（はらはらしながら、老父の困りかたを味はつてゐる。）

青年　ねえおばあさん、僕にや分らないんだ。氣持ちの上からいつたつて、自分の息子を死なせた、あの子が可愛い筈がないからな。

老母　（うなづく。）

青年　ねえ、可愛がれますか？

老母　（ブツブツと）そりや、あたしだつて、一生懸命なんしようと思ふのだけれど・・・・

青年　さうでせう、可愛がられないのでせう。あなたは正直だ。

老父　まだあんな事をぬかす。うぬは、うぬは——死んでまで勘太郎といふ奴は親不孝だ。うぬのやうな奴を俺の目に見せたりして・・・・

青年　うわッはッは、おぢいさん痛いところへさはられたのだな。

老父　あゝあいつは、どうせ地獄に居る奴だ、悪魔だ。

老母　（ムッとして）おぢいさん、お言葉が過ぎませうよ。死んだあとまで呪ふのはやめて下さい。彼はね、兎に角善事（いいこと）をして犠牲になつたのですよ。新聞でさへさう書きましたよ。世間の方が褒めてくださるのに、親が悪口するなんて・・・・（泣く）勘太郎や、かにしておくれ。

少年　（やりきれなくなつて、帽子をとつて出　けようとしたが、思ひかへして青年に）君、お金をあげたら歸つてくれる？

青年　（ニヤリと肩をゆする）

少年　歸つてくれる？

青年　歸つてやる。

少年　屹度だね。

青年　案じるな。お前の方が分りがよさそうだ。老人は血のめぐりが悪くつてだめだな。

少年　家にはお金は本當にないのです。おぢいさんは、僕が大きくなつて、僕の手から金をあげれば受取るが、僕の親から禮なんぞとるものか。だから僕は、おぢいさんと貧乏して、滿足してゐるのだ。

青年　いゝこと言ふない、生意氣な奴だな。

少年　僕は、僕の恩人が、僕の年であつたと思つて、おぢいさん達に耐忍（がまん）してもらつてゐるのだ。だから僕、家から金なんか持つて來やしない。死んだ人のかはりに僕がならうとしてゐるのだ。

青年　ばかだなあ、貴様の家は有名な金持ちなんだらう。なんでこんなに汚ないところに貧乏して、ぢいやばあと暮してるのだ、やめ

ちまへよ。

少年　僕はすまなくつてしようがないのだ。僕はおぢいさんとおばあさんの、いゝ息子にならうと思つてるのだけれど…(語つまりホロホロ泣く)僕、あんまり我儘に育つたものだから…・

青年　泣くな、わかつてらい。そんな事言ふなよ。

少年　助けてもらうなんて苦しいや、僕、死んでた方が、よつぽどよかつた。

青年　いけねえ、いけねえ、とんだこつた。お前、俺が見たつていゝ子供だ、命を大切にしなくつちやいけねえ。

少年　(ポケットから五圓出す)これをあげます。

青年　さうか、いゝのか? なんだか具合がわるいな。

老父　(沈んだ聲で)お前、それは――

少年　月謝です、でもいゝんです。

青年　(ノソリ〳〵と下りながら)おばあさん、あなたお一人のとき、また話にきます――さよなら。

青年ノソ〳〵と出てゆく。あと、三人妙にとりつきがなく、だまりあつてゐる。

少年　(居たたまれない沈默から)僕、友達のところへいつて、明日の試驗のを復習(さら)つて來ます。

そそくさと書籍を包む。

蟬の聲。

幕――五六分で明く。

日蓮宗の川施餓鬼の太鼓の音きこえる。

土手下の蘆間に、腰掛けが二三脚出してある。

講中の女　ラムネの代と、敷しまのを此處へおきますよ。

他の女　早くはや・ヽと、船でよんでるよ。

茶店女　えゝもう、ぢきに此處まで潮が上りますから――有難うございます。

講中の女　（船へ）はい〳〵、今いきますよ。

ドヤ〳〵と立去る。太鼓の音も芦間を離れてゆく。

茶店女　（びつくりしたやうに）おや、あなた方、船が出てしまひましたよ。

老　父　（ぢつと一ところを見詰めてゐる。）

茶店女　もし、あなた――聞えないのかしら、――おばあさんが居たつけが、どうしたらう。

汀の方を見る。離れて芦の間に老母つくなんでゐる　口のうちで呟きながら、供養のお札を流してゐる。

茶店女　まあ、そんなところにいらつしやるから、氣がつかなかつたのですね。お施餓鬼の船は出でいつてしまひましたよ。ホラ、もうあんなところに！

老　母　（何を言はれても一心に念じつゞけてゐる。）

茶店女　まあ、二人とも聾なのかしら？　變だね。――もし、おぢいさん、おぢいさん。

老　父　は、わしですかい？

茶店女　船はいつてしまひましたよ。

老　父　船ですとい、何の船ですい。

茶店女　忘れちやつたのですか？　乘つてらしつた、お施餓鬼の船ですよ。

老　父　ああ、あれには乘つて來ません、わしたちは別です。

茶店女　あ、さうですか。でも、お氣の毒さまですが、夕汐がきますから片附けます。

老　父　おゝなるほど、日が落ちた。――あゝ奇麗だ。

茶店女　おつたてて、濟みませんが――

老　父　いやいや、大層長く邪魔をしました。（金をわたす。）

茶店女　（腰掛けを片づけながら）仲のいゝお年寄ですね、お對の浴衣かなんかで。

老父　これですかい？（袖をひつぱつて見て聲をおとす）忰の香奠がへしに配つた殘りです。世話をしてくださつた方のお見立てでね――これでも、わしども夫婦の晴着ですよ。（薄さびしく笑ふ。）

茶店女　まあ、さうなんですか（具合わるく）――もう土手へ上らないといけませんよ、汐がぢきに一ぱいになりますよ。

さういつて土手の上へいつてしまう。團扇太皷の音が、かすかに流れてくる。

老父　ばあさん、歸るか、どうする。

老母　おぢいさん、あたしは歸れませんよ。いくら子供にだつて、恥かしくつて、顏が合せられない。

老父　――

老母　お前さんにもお詫を言はなければ濟みません。あたしの馬痴から、勘太郎のことばかりいつて、あんないゝ子に氣まづくさせてしまつたり――お前さんの樂しみを、すつかり捩いでしまひました。

老父　悔みなさんな、俺はもうすつかり諦めてゐるよ。あの子は俺達二人の子にするには勝れてゐる、立派なものすぎるのだよ。いけない奴でも勘太郎が、丁度こちとら相當の子供だつたのだ。

老母　おぢいさん、本當にさう思つておくれなのですか？――ああ安心した。勘太郎のことで、こんなに安心したことはありませんよ。

老父　安心が、この上もない極樂さ。あの時、あちら様の御親切を斷つて、巡禮にでも出たらばよかつたのだ。なあばあさん。

老母　おぢいさんにも隱してゐましたがね、勘太郎が死んだら、あたしや肩から大きな石をおろした氣がしてね、やれ安心と思つたのですよ。だからあの子が來て、また毎日同じことをしなければならないのが、なんとなし愁かつたのですよ。

老父　わかつてゐるよ。善い惡いにつけ、子供は重荷だ。――やつと二人つきりになつたのさ。さあ、心おきなく、一服としよう。

二人して靜に煙草を喫む。

老母　――今ごろ、お友達のところから歸つて來て、あの子は心配してるでせうね、可哀さうに。

老父　でもな、俺たちが居ない方が、あの子のためにも矢つぱり好いのだ。俺たちだつて、もう娑婆から許されたつていゝわな。あいつが怨んでくれなければいゝがと、そればかりが氣になるが――（言憎さうに）氣拙い思ひをさせたあとだから。

老母　死んでしまへば義理は入りませんよ。もうお互に義理はつくしつこをしたのだもの。

老父　――お、ゞなさい、あの空のうつくしいことをよ。

老母　おぢいさん、あれが後光といふのでせうね、西の方ですよ。

老父　さうだよ、西の空だ。

老母　あみださまのお迎ひですよ、手を合せて。――手を合せてあの光りが消えないうちにゆきませうよ。あたしたちは、いまほんとに素晴らしいのですよ。極樂の巡禮ですよ、よござんすか？

老父　ああい ゝとも。（無意識に後をふりむく）長い苦の世界だつた。

老母　なんまみだぶつ、なんまみだぶつ。

老父　（空の光に）神さま、わしどもにもし殘つた壽命があるなら、どうぞあの子にやつてください――

老母　なんまみだぶつ、なんまみだぶつ。

二人芦の間に座り、汐の滿つるのを待つ。
黄昏の空を太陽の餘光のうつくしく二人に映ず。

――幕――

秋風に

わが思ふ人遠にありはろ〴〵と空ゆく風を戀わたるかな

君が門の草になげかんわがこころのせてゆかずや空をふく風

秋風よわがうた高くうたへかし寢ざめさびしくきく人やある

わが魂は草の葉うらにひそめるや君がまぶたに流れしのぶや

――しぐれ――

婦人彙報

▲人見孃勝つ、

オリムピツク大會に於ける女子八百米決勝の人見絹枝孃は、獨逸のラートケ孃につぎ、二分十七秒四で世界最高記錄を破つた。紐育イヴニング・ポスト紙は、「人見孃の活躍は全く驚嘆に價する。袖の長いキモノを着て、生花や茶の湯を樂しむか、運動と言へば庭石傳ひに散歩するくらゐだと想像してゐた、我等の從來の日本女性觀に、大いなる誤まりのあることを發見した」と筆を極めて嘆賞してゐた。

▼病院社會事業に働く清水孃

今春目白女子大學の社會事業部を出た清水利子さんは、中央社會事業協會の研究生として採用されることになつた。七名の採用者中唯一人の女性である清水さんは濟生會の社會部で働くことになつて日本の社會事業は救護事業のみをしてゐるが、どうしてそのやうな貧しい生活をしなくてはならないかといふ根本問題にまでさかのぼつて考へなくてはならない、といふ抱負をもつて働くといふ。

▼女性の手で樺太開拓

山口ちよといふ宇都宮生れの女性が單身樺太に渡つて未開地の開拓事業に成功したといふ報導を國民新聞が洩らしてゐた。山口さんは大正十一年から海產物事業として樺太ヨード合資會社及び、山口海產株式會社を設立する一方緬羊牛馬等の牧畜にも從事し、今度はまた事業發展の爲にまた樺太文化の爲に水力電氣事業を起すことに奔走してゐる、といふ。

▼日本女性最初の體育研究に

明大國文學教授内海弘藏氏の長女千江子さんは今度母校東京女子大學、及び女子キリスト教青年會から派遣されて、女子の體育研究の爲四ケ年の豫定で米國ウエスレー大學へ入學することになつた。

▼名女優エレン・テリーの死去

十九世紀から二十世紀の劇壇にかけて名女優の名を盛んにうたはれた英國のエレン・テリーが七月二十一日、八十歳の老齡で死去した。エレン・テリーは俳優の子として生れ八歳の時に初舞臺を踏みセークスピア劇の悲劇女優として全英國民から敬愛されてゐた。出世役は三十歳の時に、名優ヘンリー・アーヴイング氏の相手役として扮した「ハムレツト」劇のオフエリヤであつたといふが、それについては、エレンが十歳の時、セークスピアの「眞夏の夜の夢」にパツクに扮して出場した時、あの飛びはねる役で足をくじき、痛さを忍んで白だけは終へたが、閉幕後そのまゝ氣絶してしまつたことがあつた。その時正氣に歸つてみると心配氣に見守つてゐた靑年があつたが、それがヘンリー・アーヴイングであつたといふ逸話が傳へられてゐる。

▼女流採集家山村八重子孃

山村八重子孃は熱心な採集家として我が生物學者間に知られてゐる。八重子さんは父君の經營するフイリツピンの大椰子園におもむいて、何萬點といふ珍らしい採集物を、すべて自分で剝製し、分類して、發生から學名通稱まで則細に調べ上げてゐて、その正確と緻密さには專門家も舌を卷いてゐる今度天皇陛下の御研究材料として南洋產貝類三百餘種を献上する。

▼母親の資格に嚴しい新判例

男子にも貞操の義務ありといふ新判例を下していさゝか女性の立場を認めた日本の法廷が、今度は夫の死後私通した母親の訴訟に對して、子に對する親權喪失の判決を下して、新判例といはれてゐる事實は府下野方町江古田の資產家堀野はな子の親權者實母りよが夫の死亡後靑山南町吉岡留吉と通じた結果五十萬圓の財產を吉岡のものに合併せんとしたところから訴訟が起されたもので、一審は原告のまけ、二審は勝つてりよから上告、大審院民事部の須賀裁判長の係りで審理中のものであつた。

▼現業委員會の女子選擧權

鐵道省現業委員會では八月二十三日が、改選期であるが、こゝでは最初の女子選擧權が實施されることになつてゐる。現業員約二十五萬人のうち、女子は本省の三百人を筆頭に、被服工廠、出札係其の他で約三千人であるから團結すれば女子委員の選出は決して難いことではないといふ。制度のきびしい鐵道省内で堂々待遇改善を叫

ぶことの出來る委員會に勇敢に團結進出して女性の立端からの要求を摘出することを希望する。

▼北平の女子斷髪令

北京を改稱した北平ではすべて舊きを去り新しきにつかんとするに急で、モダンガール崇拜、三十歳以下の婦女子全部三週間以内に斷髪せよとの嚴しい布告が發せられた。市長何其鞏が北平を近代的模範都市たらしめんとする意向とかで、斷髪令の他、てん足をも禁じ、犯したものには税を課すといふ。明治維新の男子斷髪令を思ひ及ぼさずともまた斷髪訴訟など出る國もあるのに正に珍らしい布告であるが、斷髪令の當否はさておき勇敢に躍進しやうとする最近支那の努力には刮目すべきものがあるといふ。

▼モダーン結婚差止め令

最近ロシヤでは「一日結婚」「交友結婚」などの新結婚方が流行して、結婚式後僅か數日間新婚生活を樂しんですぐに離婚するもの續出、離婚問題が激增したので、高等法院では新法令をもつて一日結婚禁止を發した。ソビエット・ロシヤのこれまでの制度では婚離しやうと考へたら、妻の意志を開く必要はなく、口頭で婚姻局に屆け出ればよかつたので、妻は知らない間に離婚されてゐてそんなことを幾度も繰り返した不幸な婦人も多く、今度の法令ではそのやうな結婚をした男子は一年以上十年以下の懲役に處せられることになつた。

▼ジヤズの離婚裁判

西濠洲パース市では最近流行のジヤズ音樂が法廷で立派に離婚の原因理由として認められたといふ話は若い銀行員が「妻がジヤズに熱中して、到底圓滿な夫婦生活が續けられないから離婚認可をして貰ひたい」との申出に對して「原告の申出は理由あるものと認む」といふ判決が下つたものであるが元來狂ひ音樂の事だから何を起すか知れないと揶揄する向きもあるが、事實とすればたしかに餘り愉快でない笑話ぐらゐのことであらう。

▼頻繁な巡査の暴行

社會主義者に對する警官の暴行は公然の秘密といつた形で一部主義者の中では問題になつてゐるらしいが、それかあらぬか最近警官が職權を利用して婦女子に暴行する事件が頻發してゐる。千葉縣市原郡西廣村の齋藤やすといふ娘は叔母を訪ねて上京、神田三崎町で道に迷つて最寄りの交番で尋ねたところ、道を教へるとて同行した坂本と呼ぶ巡査にニコライ堂の窔の暗闇で凌辱されて、恐れと恥とにそのまゝ歸宅してネコイラズを呑んで自殺をはかつたので事實が判明した。その他戸塚署の管内ではそばやの出前持の娘を、數人の警官が交る〴〵辱かしめたといふやうな聞くにも堪えぬ事件が次々とあばかれてゐる。おまわりさんはえらいもの、おまわりさんは正しいもの、おまわりさんは怖いものと盛んに教へ込まれて來た一般の人々の警官に對する觀念はやうやく改められねばならないし、自然大きな變化を沙らすであらう

▲ルーマニアの女王映畫出演

ルーマニアの王室は揃ひも揃つて藝術味の豐かな美しい方々ばかりであるが、わけても美人の評判高い攝政女王マリー殿下は今度自作の映畫脚本、「ルーマニアの魔術人形」が撮映されるについて、その開卷及び卷末に出演されるといふ報導がある。映畫は米國で製作されるのであるが、女王出演の部分だけは一同ルーマニアまで出張して撮影するといふことである。

▼世界にもまれな水上署の女通譯

門司の水上警察には重谷ます子さんといふ女通譯がゐる。水上署の女通譯は世界にも類のないことで佩劍官服いかめしい人々の中に常に紅一點である。大正十年から七年間も務めて、船から上る外人に「旅券を拜見します」と云つてゐるが、女性の優しさが多分にいゝ影響をあたへて成績がいゝといふ。

▼河崎夏子女史の女性研究

文化學院教授河崎夏子女史は今度、「土俗學的方面から見た婦人の地位」について、一大論文を完成發表するといふ。内容は婦人の地位を古代、中世、近世に大別して各時代に於ける婦人の地位を女史獨特の方面から描出したもので、女史を知る先輩學者間に非常に興味を持たれてゐる。

編輯後記

全國的な連日の雨にたれこめられつゝ、九月號の編輯をしましたそして、校了に近い頃やつと太陽が笑び出しました。雨すぎしあとのレインボー！それが本誌第三號の姿ではないでせうか。

「戀愛座談會記」なる特別讀物あり、評論に高群逸枝氏あり、大和から歸つていらした宮本一枝氏亦珠玉の隨筆を御執筆下さいました

「女人藝術」は女性を鑵詰めた「女人王國」だとやゆする雜誌が出て來ました。山川氏はそれに對して明快な論文をお寄せ下さいました。本誌の存在はかくて、色々な方面に、日をおうて問題になつてまゐります。男子方の熱心な御批評もまた愉快なことに思ひます。(しづか)

わが『女人藝術』は、二號は一號よりも、三號は二號よりもだんだん人氣がついて賣行がいゝ。最初は『女のみの雜誌』といふのにかなり衆目を惹いたが、やがては『その力の侮りがたい』といふことにそして、それは更らに衆目の歸するところは『現代の女性の眞の實力』といふことになるのである。

夏は饒舌をつゝしむ時であるからこれで擱筆。

私は自分の用で月末まで長野縣下の主要地を文藝講演旅行をして廻る。(かど江)

『女人藝術』の第三號は意氣旺なものにしたかつた。あの八月に熱情的に咲く向日葵の花の如くすばらしく快活なものにしたかつた。雜誌にとつては第三號がどんなにか大切だらう。第三者もそのことをいつてくれてたし、私達も十分そのことを感じてゐたからであるいろんな意味で向上的氣分を盛らうと企てた第三號の出來榮えを今や私達は快い心の汗をぬぐひつゝ問ふのである。『いかが？』といつて。私達の頬には勤勞のあとの微笑さへも漂つてゐる今です(花世)

戀愛座談會の速記は非常にかさ高なものとなつたが、他にも動かすことの出來ないよい稿が揃つてゐたので、よていの頁數に縮めなければならないのに苦心した。たちきるといふことは中々出來ないわざで、戀愛だからきりにくいのだなぞとシャレどころではない。大暑のをりを、折角集まつてお話しして下さつた方たちに申譯けない氣がしてならない。

婦人愛讀者からのおたよりにはどなたのにも我等の「女人藝術」とあたしたちの「女人藝術」と書いてある。あたしはそれを讀むたびに胸がふくらまり、涙が湧きあがる

「われらといふのがはやりますのよ」といつた人があるが、あたしはさう簡單にかたづけたくない。あたしは素直に受入れて感謝する。あたしの願ひは眞にどなたにも我等の「女人藝術」であつてほしい。もつと〱早く伸び、グン〱成長して、國境もなく世界的の握手も求めたい。お手紙を下さつた皆様に心からお禮を申します。どうか、あなた方のものとして育ててください。

時、漸く新涼、目覺ましき飛躍を思ひ、堅實なる歩みを日常の祈禱とする。(しぐれ)

雜誌も讀者の熱心な期待と激勵との中にすでに三號を世の中へ送り出すばかりになつた。ともあれ三號までは雜誌の土臺石みたいなものだとは人々からも云はれ自分達も感じて來たことである　土臺石は据つた、さてと一服するところであらうがさうはゆかない。これからだ。

編輯室にあてゝ色々批評やら希望やらを書き送つて下さる方が澤山あつて非常に嬉しい。聞く可き言葉がありさへすれば、誌上にも發表して共々にこれを誌面に生かしてゆきたいと云つてゐますから、お氣づきになつたことは是非知らせて頂きたい。(素子)

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	四錢
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用は一割增の事。

昭和三年八月廿五日印刷
昭和三年九月一日發行
（每月一回　一日發行）
發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　株式會社秀英舍
東京市牛込區左内町三十一番地
發行所　女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七五八二五
大賣捌　東京堂　大東館　北隆館　東海堂

久米正雄氏原作
野村芳亭監督

松竹キネマ特作映畫

夏の日の戀

村上德三郎脚色・小田濱太郎撮影

岩田祐吉・奈良眞養
島田嘉七・木村健兒
八雲惠美子・田村文子
吉川滿子・松井潤子
大競演

所謂文藝作品の映畫化に於て絕對他の追從を許さぬ獨特の境地を有する松竹キネマ蒲田が新秋劈頭に公開せんとする逸品、原作は今更喋々するまでもなき傑作、之が監督の任に當るは既に幾多の文藝作品の映畫化を以て定評ある野村芳亭！　公開近し期待せられよ!!



昭和三年八月廿五日印刷納本
昭和三年九月一日發行（每月一回一日發行）

第一年第三號

定價金四十錢（送料金四錢）

二郎主宰

新國劇

は、新興演劇の爲の雜誌であります。◆雜誌『新國劇』は、新年號、春の號、夏の號
銷夏號、秋の號、冬の號と、年六回隔月に發行します。◆口繪を大奮發して、三色版
二色版(二枚その他色刷など面白い寫眞を每號豐富に載せます。

◆記事は、政界、操觚界、文壇、劇壇一流名士の評論、隨筆、漫文などを總八ポイ
ト活字(一頁千五百字)組で滿載します。◆澤田正二郎は、每號、近時隨感、自叙傳
隨筆の三種を執筆してゐます。◆銷夏號から掲げました『思ひ出座談會の記』は大
判になつてゐます。

◆秋の號から、三上於菟吉氏が學友澤田の爲に精根を傾けて筆をとることとなつた
說(題未定)を連載します。これはやがて芝居に脚色して日本全國で上演する豫定で
ります。

◆定價一部僅か二十錢、送料二錢。本誌を安いと云はない人は恐らく無いでせう試
に全國の書店で手にして御覽下さい。一年分は送料とも一圓二十錢であります。

戯曲集 坂本龍馬

眞山青果著

四六判三百五十頁
布裝、堅牢、優美、
清新なる裝幀、箱入

定價壹部 壹圓半
送料一〇錢

篤學博識の作者が、一歳の精進苦吟を重ねて完成したる大戯曲。全四幕六場、これ悉く俊傑龍馬の眞面目と波瀾重疊せるその生涯の再現である。盛夏八月、澤田正二郎これを帝劇に演ずるや果然各方面に一大センセーションを起し、三十日間未曾有の大入滿員をつづけたるを見てもその名曲たるを知られるであらう。附したる名篇『薩摩紅梅』三幕六場と共に、必ずや讀者の眼前に、腦裡に、舞臺そのまゝの熱演を展開するであらう。——(八月下旬發賣)——

務所發行
電話下谷一九一九番
振替東京六一〇二四番

社秀英舍印刷